

豚の下顎骨懸架

—— 弥生時代における辟邪の習俗 ——

春 成 秀 爾

はじめに

1 日本の考古資料

2 アジアの考古資料

3 アジアの民族資料

4 豚の下顎骨懸架の意味

論文要旨

近年、佐賀県菜畑、奈良県唐古・鍵など西日本の弥生時代遺跡から、豚の下顎骨に穿孔し、そこに棒を通したり、下顎連合部を棒に掛けた例が発掘され、その習俗は中国大陸から伝来した農耕儀礼の一つであるとする見解が有力となっている。

豚の下顎骨に穿孔した例は、中国大陸では稀であるが、豚の下顎骨や頭骨を墓に副葬したり、どこかに掛けておく習俗は、新石器時代以来発達しており、西南部の少数民族の間では、今日にいたるまでその習俗を伝えている。

海南島の黎族は、人が亡くなると、牛や豚を殺して死者の靈魂を送る。そのあと、殺した豚の下顎骨を棺の上に置いて埋めるか、または棒に掛けて墓の上に立てる。また、雲南省の納西族は、豚の下顎骨を室内の壁に掛けて家族の安穩の象徴としており、誰かが亡くなると、村の外に捨てる。

豚は、中国の古文献によると、恐怖の象徴であって、豚の頭骨や下顎骨をもって、邪悪を退け死者の靈魂を護る、とされる。

中国新石器時代には、キバノロや豚の牙を装着した呪具を死者に副葬する習俗が、豚の下顎骨の副葬に併行または先行して存在する。豚の下顎骨が、死者の靈魂を送る、あるいは護ることができたのは、大きく曲がった鋭い牙すなわち鉤をもっていることに求めうる。鉤が辟邪の効果をもつことは、スイジガイの殻を魔除けとして家の入口に掛けておく民族例があり、また、楯に綴じ付ける巴形銅器の存在から弥生時代までさかのぼることが推定されている。豚の下顎骨は、鉤形の牙と、豚の獷猛な性格によって、死霊や邪霊に対抗することができたのであろう。また、時としては羊や鹿の下顎骨をもってそれに代えているのは、下顎骨そのものがV字形の鉤形を呈しているからであろう。

弥生時代例は、住居の内部や入口あるいは集落の入口などに掛けてあり、死者がでたり、災厄にあったりすると、鉤部に死霊や邪霊が引っかかっているとみなし、居住区の外に捨てたか、または逆に、死者を護るために墓に副葬したのであろう。

豚の下顎骨を辟邪の呪具として用いる習俗は、朝鮮半島ではまだ知られていないが、弥生時代早期に渡来した人々が稲作や農耕儀礼とともに西日本にもたらした、中国新石器時代に起源をもつ辟邪の習俗であったことは確かである。

はじめに

弥生時代には、豚や猪の下顎骨を、左右の下顎枝に穿孔して、あるいは下顎の連合部を利用して棒に掛ける習俗が存在した。

「猪」の下顎骨に穿孔した例は、すでに戦前の奈良県唐古遺跡の発掘調査で知られていたが、近年、佐賀県菜畑遺跡や唐古・鍵遺跡から「猪」の下顎骨が棒に掛けた状態で発掘されたことから、「猪」の下顎骨穿孔は大陸渡来の「農耕儀礼」の一つ〔渡辺 1982〕・〔土肥 1983, 1984〕として、にわかには注目を集めるようになった。

その一方、直良信夫はつとに、長崎県唐神遺跡出土の猪科の骨が中国新石器時代の「ムカシマンシュウブタ」や「現在満鮮で半野生的に放飼せられている黒毛の支那豚」と「全く同一のものである」こと、若獣が多いことを根拠にして、弥生時代に豚が中国から朝鮮半島を経て運ばれてきたことを主張していた〔直良 1937, 1938b: 47, 1941〕。さらに、東京都三宅島コハマ浜遺跡の資料にもとづいて、弥生人が島嶼部に豚を人為的に移植したことも推定していた〔直良 1938a〕。

その後、大阪府池上遺跡出土の「猪」の骨の死亡年齢を調査した牛沢百合子は、その中で幼若獣が高い頻度を占めている事実を確かめ、「農耕儀礼の供儀としてのイノシシを飼養したとしても不思議ではない」とした〔金子・牛沢 1980: 22~24〕。

最近、西本豊弘は、大分県下郡桑苗遺跡発掘の動物骨を豚の骨と同定し、弥生時代に大陸渡来の豚が飼育されていたことを論じ〔西本 1989a〕、さらに、佐賀・福岡県から神奈川県の間に所在する他の遺跡でも豚の骨の存在を確認した〔西本 1989b〕。そして、それらのなかに下顎骨穿孔例が含まれていたことから、豚の飼育目的は農耕儀礼用であることを主張している〔西本 1991〕。

小稿では、日本および中国大陸の豚・「猪」の下顎骨穿孔例と豚の頭骨・下顎骨の副葬例等を集成し、中国および日本の民族例と文献資料を参考にしながら、豚の下顎骨懸架の意味について考えてみたい。

1 日本の考古資料

a 豚の下顎骨の穿孔懸架例

豚または猪の下顎骨の下顎枝に穿孔した例は、これまで下記の遺跡から出土している。なお、西本の研究によって、弥生時代に豚を飼育していた事実が明らかになり、下顎骨に穿孔のある骨の多くもまた豚と判定されている。ただし、戦前の奈良県唐古遺跡出土の穿孔例のなかに、依然として猪の可能性がのこっているものがあるので、現在のところ、豚が多いけれども猪も含んでいると考えなければならない。以下の記載は、報告書の記述だけでなく、実物に当たっての観察、報告書の写真の検討に基づいている。

沖縄県国頭郡今帰仁村渡喜仁浜原貝塚〔渡喜仁浜原貝塚調査団 1977：写真11〕 沖縄本島にある遺跡で、1976年の調査時に、沖縄貝塚時代中期（縄文晩期併行期）に属する貝層（B区 a 3ピットⅢ層）から出土した猪の下顎骨の右側破片に穿孔がある（写真18）。孔は2.4×2.4cmの円形で、叩いてあけている。牙はのこっている。雄の成獣である。ただし、報告書には穿孔の記述はない。なお、B区Ⅱc層では1×2mの発掘区から、猪の下顎骨5個とホラガイの殻、アコヤガイ・ヤコウガイの殻に穿孔した貝製品が集中的に出土している。（筆者は実物未見）。

長崎県壱岐郡芦辺町原ノ辻遺跡〔鶴田 1944〕・〔仙波 1960：206～207, Pl. V・VI〕 壱岐島の弥生中期の貝塚から、戦前に2個出土している。1個は左右揃いで、孔は、左側が径1.7×2.0cmの円形で、打ち欠いて穿孔後、丁寧に加工している（図1-1）。もう1個は右側の破片であって、孔は1.5×推1.5cmの角ばった不整円形で、叩いて粗く穿孔しただけである。いずれも成獣である。

長崎県南松浦郡有川町浜郷遺跡〔小田 1970：15～28〕 五島列島の中通島に所在する遺跡で、弥生前期（板付Ⅱa式）～中期中ごろ（須玖Ⅰ式）に属する。1969年の調査時に、6基の墓から「猪」の下顎骨が合計24個出土した。それらの骨は、石棺の近くや被葬者の上に散布した状態であったという。西本豊弘のその後の観察によると、これらの「猪」は豚であって、下顎骨に穿孔があるという。それらの概要は次のとおりである。

1号人骨	女	熟年	下顎骨2, アワビ2
2号人骨	女	壮年	下顎骨5, アワビ3
4号人骨	女	熟～老年	下顎骨1, アワビ3
6・7号人骨	男・女	壮年	下顎骨8（1号石棺, 7号人骨は集骨）, アワビ2
2号石棺	—	—	下顎骨5
2号壺棺	—	1ヶ月	下顎骨3 城ノ越式, アワビ1

佐賀県唐津市菜畑遺跡〔中島ほか編 1982：31～46, Pl. 94～98〕・〔渡辺 1982:401〕 1980～81年の調査時に、弥生前期の夜臼・板付Ⅰ式土器の層から下顎骨3個を木の棒に通した状態で出土している（写真3, 図2）。棒の径は2cm, 性は雄1, 雄?2と鑑定されている。この資料は、現場からの取り上げがうまくいかず、詳細な報告はない。この標本の周辺にもバラバラになった状態で下顎骨が散布していたが、それらには穿孔はなかった。同じく前期の板付Ⅰ式の層から1個、板付Ⅱ式の層から1個出土している。後者は2個として報告されたが、同一個体の雄の左右である（図1-2）。孔の径は左側が1.9×2.2cmの不整円形で、右側が2.4×2.75cmの五角形である。左右とも下顎枝の外面に水平方向に切傷がのこっており、咬筋を切断して頭部から下顎を外したことを示している。

これらの出土位置は遺跡全体のなかでは、住居址群のある高まりから旧水田へ移行する境界のE-I・II区付近であって、緩やかな斜面に、居住区のほうから土器などとともに投棄したという状態であった（図3）。

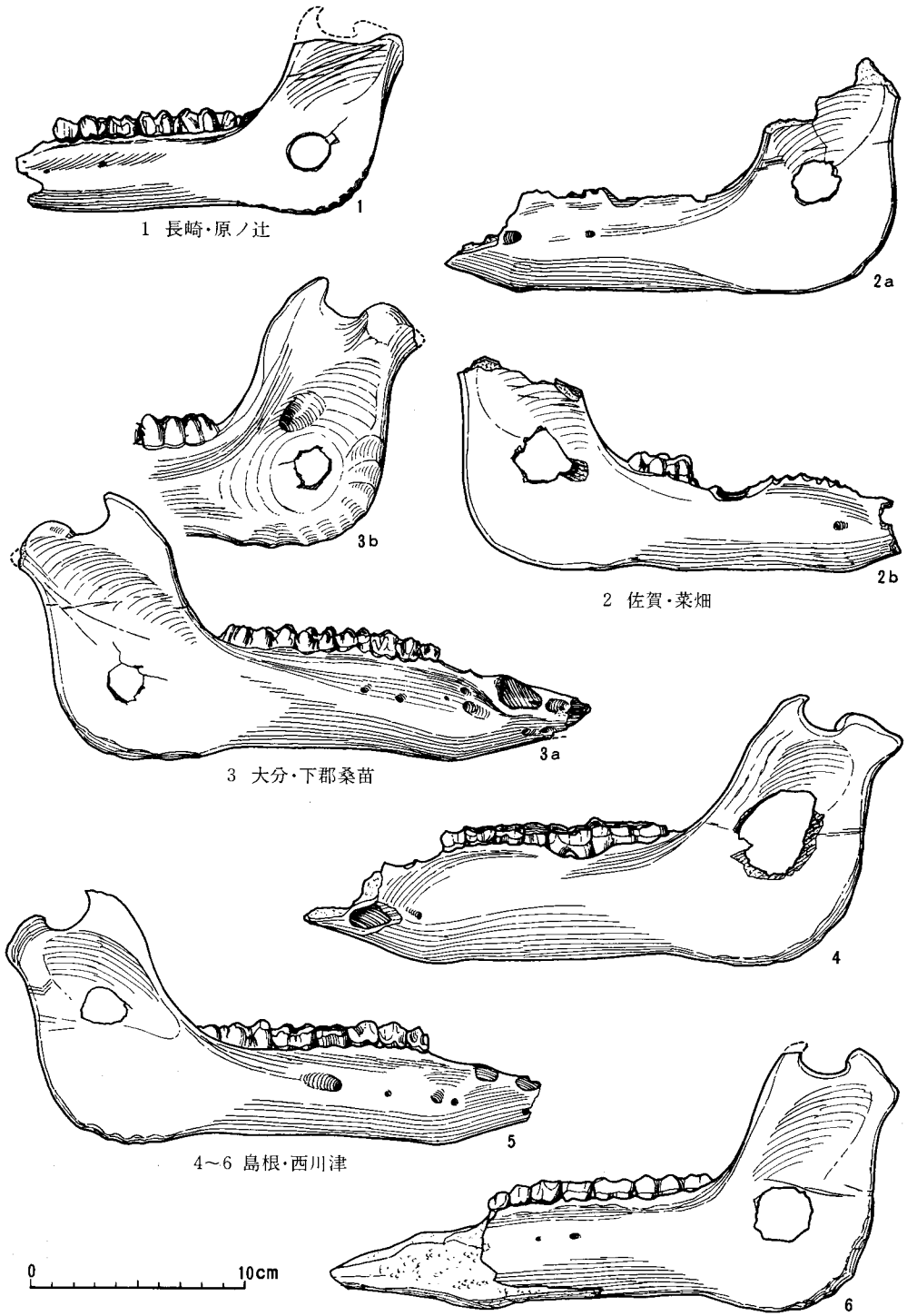
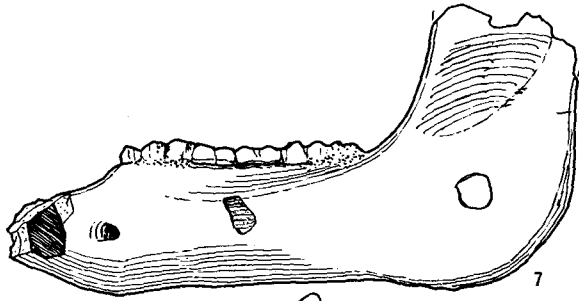
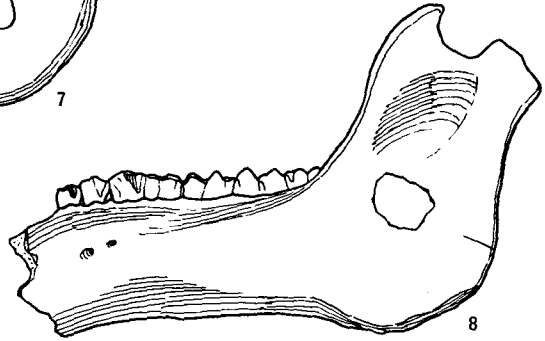


図1 豚の下顎骨穿孔資料 (1・13は[仙波1960]・[キム1974]写真から作図)

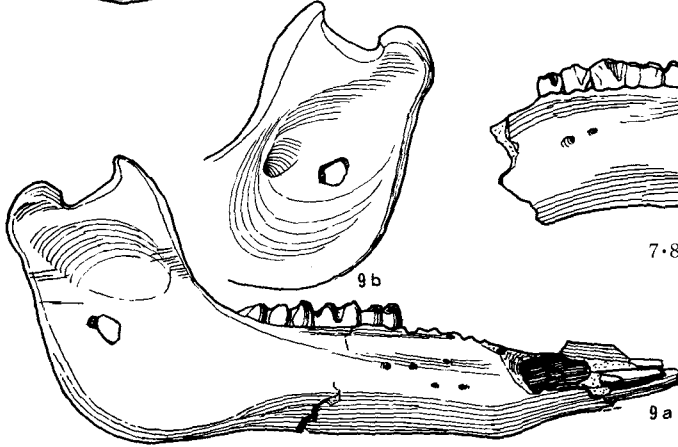


7



8

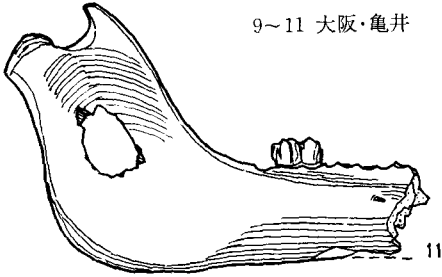
7・8 島根・西川津



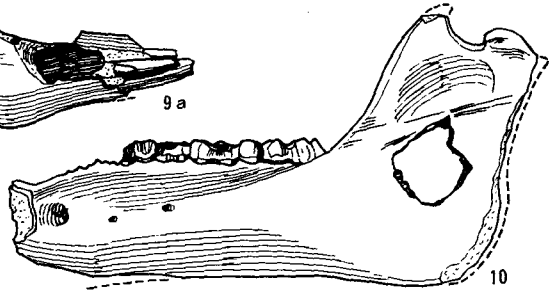
9b

9a

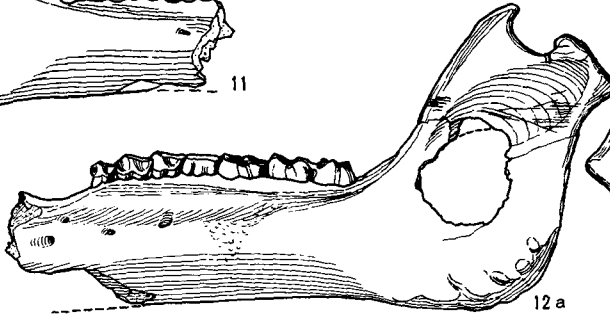
9~11 大阪・亀井



11

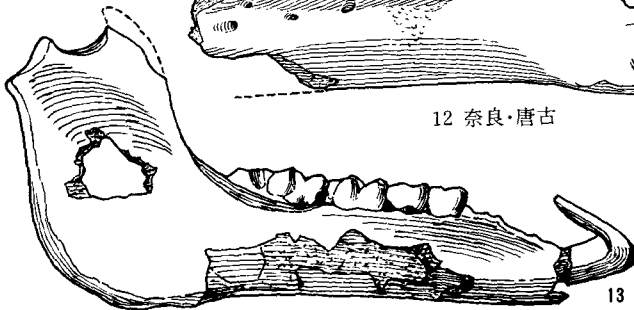


10

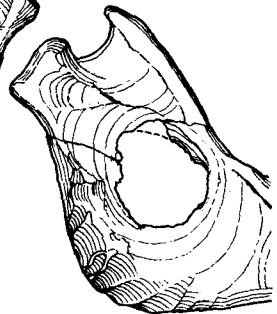


12a

12 奈良・唐古



13 威鏡北道・虎谷



12b

0 10cm

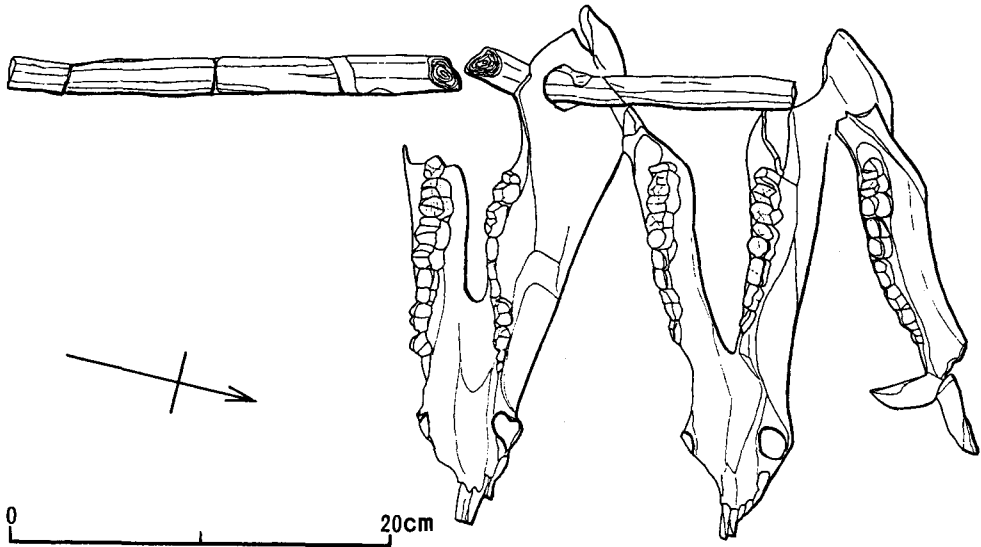


図2 佐賀県菜畑遺跡の豚下顎骨の出土状態
(下顎枝に穿孔して木棒を通して)[中島ほか編 1982]

福岡県宗像市石丸遺跡 [橋口 1980 : 3~11, 図版2~6]・[木村 1982 : 394~395] 1979年の調査時に、弥生中期初頭の3号貯蔵穴から貝殻・獣骨とともに1個出土している。孔の径1.3cm, 雄と同定されている。同じ穴の伴出品には、ほぼ完全な雌豚の下顎骨1個がある。

大分県大分市下郡桑苗遺跡 1988年と1991年の調査時に、弥生前期後葉~中期初頭の自然河道から、土器・木器・獣骨多数とともに出土している。豚は完全ないしほぼ完全な頭骨7個が含まれている。1988年にⅢ区11層から出土した穿孔例の1個は、若獣?の右側の下顎枝付近の小破片で、かろうじて孔があいていたことがわかる程度のものである [西本 1989a : 52~53, 図版動物遺体6-5]。1991年にA区13層から出土した1個は、雄の成獣の右側の破片で、孔は1.4×1.8cmの不整卵形である。打ち欠いてあけた孔の周囲だけは全周磨滅して光沢をもっている。下顎枝には、咬筋を切断したときの切傷がのこされている。牙は失われている(写真17, 図1-3) [西本 1992a : 96, 図版6-5]。

島根県松江市西川津遺跡 [井上 1988 : 図版82-3, 内田編 1989 : 266, 図版113~155] 1984年の調査時に、弥生中期の貝層から出土した「イノシシ」の下顎骨(右側)に穿孔がある。孔は0.7×1.0cmの小さなものである。報告書にはその記述はない。

1985年の調査時には、弥生前期の自然河道(幅約20m)から、穿孔した下顎骨が16個(左右3, 左6, 右7)出土している(写真15・16)。孔は外側から叩いてあけたもので、成獣では2~3cm前後が多いが、不規則な形と大きさになっている。粗いあけ方が多いが、なかには孔の周囲をていねいに整えたものもある。成獣~老獣で、判明するかぎりでは雄8, 雌2である。雄の牙はすべて抜いてある。なお、無穿孔の雄も散見する。他に脳頭蓋部が破壊されていない頭骨1個がある(図1-4~6)。出土状態については、内田律雄の教示によると、特定の箇所集中すること

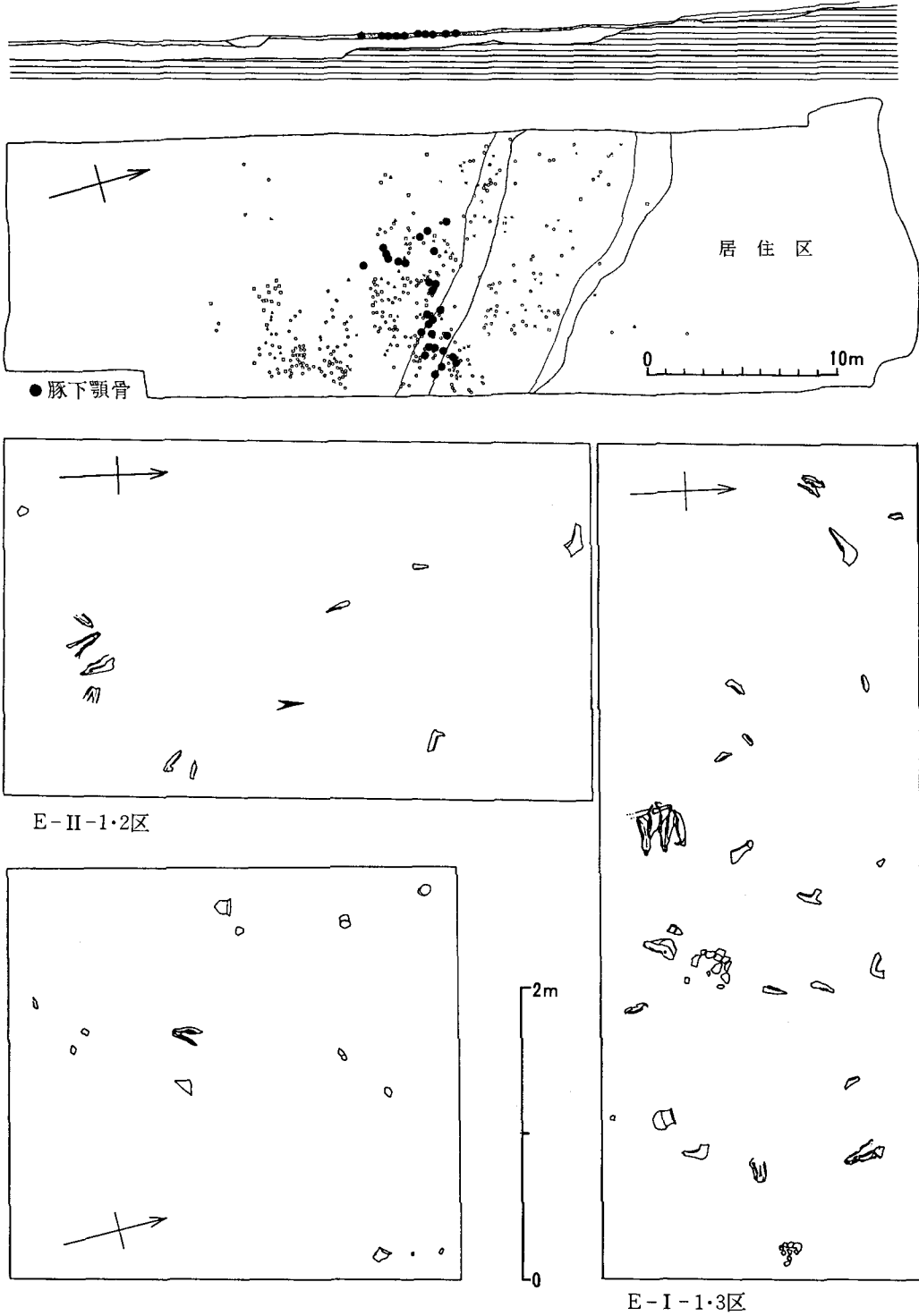


図3 佐賀県菜畑遺跡の豚下顎骨の分布状態
[中島ほか編 1982]

はなく、川の斜面に投げ捨てた状態であったという。

岡山県邑久郡邑久町門田遺跡 [林・西本 1986] 弥生前期中・新段階に属する貝塚から、穿孔した例が1950年の調査で11例、1962・1966年の調査で3例の計14個(左右1, 左4, 右9)出土している。土坑から出土した雌の亜成獣の1例は、孔は1.5cm×2cmである。他の例は老成獣9体、幼獣1体、亜成獣1体であって、老成獣が多い。孔のあいていない例を含む下顎骨43個体の年齢構成は、幼獣10体、若獣1体、亜成獣15体、老成獣17体で、老成獣がもっとも多い。四肢骨に基づく最小個体数は9体にすぎないので、林謙作らは、「猪」の下顎骨が特別な取り扱いをうけているとともに、四肢骨は下顎骨とは別の場所で処分されたことを想定している [林・西本 1986 : 32~33]。貝塚は幅約4m、深さ1.2mの環濠の一部かと推定される溝の中に形成されたもので、下顎骨はそこに投棄されていたことになる。

大阪府八尾市亀井遺跡 [宮崎 1983 : 236, 図版97・98]・[山口 1983 : 247]・[松井 1986 : 430, 図版40中央下] 1981年の近畿自動車道建設の調査時に、弥生中期後半と後期後半に属する穿孔例が5個出土している。弥生中期後半(Ⅲ期新)の井戸(廃絶後のゴミ穴)SK 3060出土例(図1-11)は、右側の破片で、孔は1.98×3.08cmの不整楕円形で、打ち抜いたままで周縁を整えていない。雄である。これには咬筋を切った跡はない。多量の土器・木製品・卜骨・動物骨を伴っている。弥生後期後半の溝SD 3021B出土例(図1-9)は、左右揃いで、孔は0.9×1.3cmの楕円形である。牙は失われている。雄の3歳。溝SD 3021Bからは他に3個出土した。1例(写真14, 図1-10)は、左側破片で、孔は2.3cmの不整形?, 周縁は細部調整している。2例目は、右側破片で、孔は約2.0cmの円形で、周縁をていねいに調整している。3例目は、右側小破片で、孔は2.8×3.2cmの隅丸方形で、内側から叩いて粗くあけている。

また、1982~83年の調査でも、弥生中期の層から出土した左側の破片の1個に穿孔がある。

大阪府柏原市恩智遺跡 [安部 1980 : Pl. 161] 1975~78年の調査時に弥生中期(Ⅱ~Ⅲ期)の層から出土した豚の下顎骨の左右揃いの1個に穿孔がある。牙は失われている。成獣である。報告では穿孔についての記述はない。

大阪府東大阪市鬼虎川遺跡 [宮崎 1983 : 236] 1982年に弥生中期の層から出土した「猪」の下顎骨に穿孔があるという。宮崎泰史の観察による。

奈良県磯城郡田原本町唐古・鍵遺跡 1937年の第1次調査で、弥生時代の層から2個(左右揃い, 右)が出土している(写真11・12, 図1-12) [藤岡 1943 : pl. 104]。1個は、孔は左側が4.0×4.3cmの不整卵形, 右側が3.6×3.0cmの辺の丸い四角形で、雄の成獣である。もう1個は、2.0×2.2cmの円形で、どちらも叩いてあけているが、後者は孔の周囲の加工がていねいである。2個とも、咬筋を切ったときの切傷がのこっている。

1984年の第19次調査では、弥生中期(Ⅱ~Ⅲ様式)の大溝(環濠)SD-204(幅6.8m)の下層から穿孔例が1個(左右揃い, 孔は約2.7×3.6cmの不整六角形), SD-203の最下層から1個(左右揃い, 孔は約2.1×3.0cmの不整形卵形)出土した。牙と切歯は失われている。雄の老獣。

SD—204の下層では他に左右揃った無穿孔例が2個伴っている。

1984～85年の第20次調査では、弥生後期の楕円形土坑SK—104（井戸）の中層から穿孔例が1個出土している。左右揃いで牙は失われている。孔は、右側が1.9×2.1cmの楕円形。左側は2.1×2.2cmの不整形である。雄の老獣である。左側下顎体下縁と下顎連合部下縁に細い切痕が多数ついている。完形の短頸壺、用途不明の棒状木製品を伴っている。弥生前期の土坑SK—205からも、穿孔例が1個出土している。左側破片で、孔は2.0×1.4cmの小さな楕円形である。雄の亜成獣である〔藤田 1986 a〕。

1985年の第22次調査では、弥生前期の溝SD—1201（幅推定3m）の最下層から1個（左右揃い、右側の下顎枝は欠損）出土している。牙は失われている。雄の老獣。猪か〔藤田 1986 b〕。

1989年の第37次調査時には、弥生前期後半～中期初頭の大溝SD—2202から、左右揃いの下顎骨穿孔例が1個出土している。左右とも牙を抜いたあとに、木製牙を差し込んだ珍しい例である。雄の老獣。猪か。弥生中期の井戸SK—2114から出土した左右揃いの穿孔例は、右側の孔が1.8×2.2cm、左側の孔が1.8×2.1cm、雄の成獣。猪か。伴出の無穿孔例は2点とも雌の豚。穿孔例は他に弥生中期の土坑SK—4201からも出土している〔藤田 1990〕。

三重県津市納所遺跡〔富田・島地 1979：図版1〕 1974年の調査時に、弥生前期の「自然流水路とそれに伴う落ち込み」から多量の土器・木器とともに出土した。報告書の写真に3ないし4例の穿孔例がみえるが、穿孔についての記述はない。

愛知県西春日井郡清洲町朝日遺跡〔西本 1992 b〕 1985・86・88・89年の調査時に、61区と63区の弥生中期の層から、計2例出土している。61区の例（写真13）は、左右揃いで、左側の孔は約2.6×2.6cmの円形に叩いてあけている。牙は失われている。雄の若獣。63区の例は、左側で若獣。他に孔のない下顎骨が2例出土している。

b 豚の下顎骨の無穿孔懸架例

次に、穿孔はないが下顎連合部を利用した下顎骨懸架例と推定される資料を掲げる。なお、前出の岡山県門田遺跡出土の下顎骨の一部も、この例にはいる。

奈良県磯城郡田原本町唐古・鍵遺跡 1977年の第3次調査時に、弥生中期の環濠SD—06の底から、下顎骨14個の下顎連合部を木の棒（長さ1.1m以上、径3cm）に掛けた状態で、棒とともに環濠の中に捨てた状態で出土している（写真1）〔寺沢 1978：6，図版6〕。下顎枝に穿孔がなくとも懸架されていたことを証明するよい資料である。この例の出土位置で注意されるのは、唐古遺跡の東南端の環濠で、濠底にのこっていた橋脚の存在から弥生中・後期の「ムラの出入口」と推定された場所〔藤田 1992：6〕にあたることである。

1982年の第13次調査時には、弥生中期前半（Ⅲ期古）の溝SD—06（環濠）内から、下顎骨7個を集積した状態で出土している。豚の雌の若獣のみである（写真2，図4）〔藤田 1983〕。やはり環濠の中にひとかたまりにして捨てた状態である。

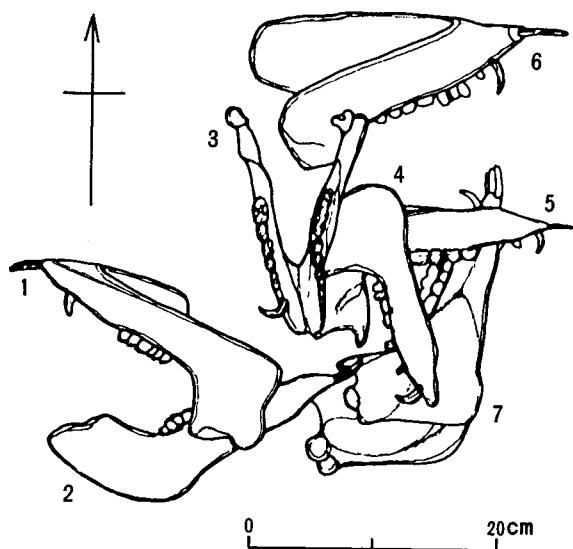


図4 奈良県唐古・鍵遺跡 SD-06 溝の豚下顎骨の出土状態
(1・3～5 若年, 2・6・7 成年) [藤田 1983]

これらは、特別な記述がないところをみると、集落を囲む濠のなかからまとまって出土したのではないらしい。

c 豚の下顎骨の副葬例

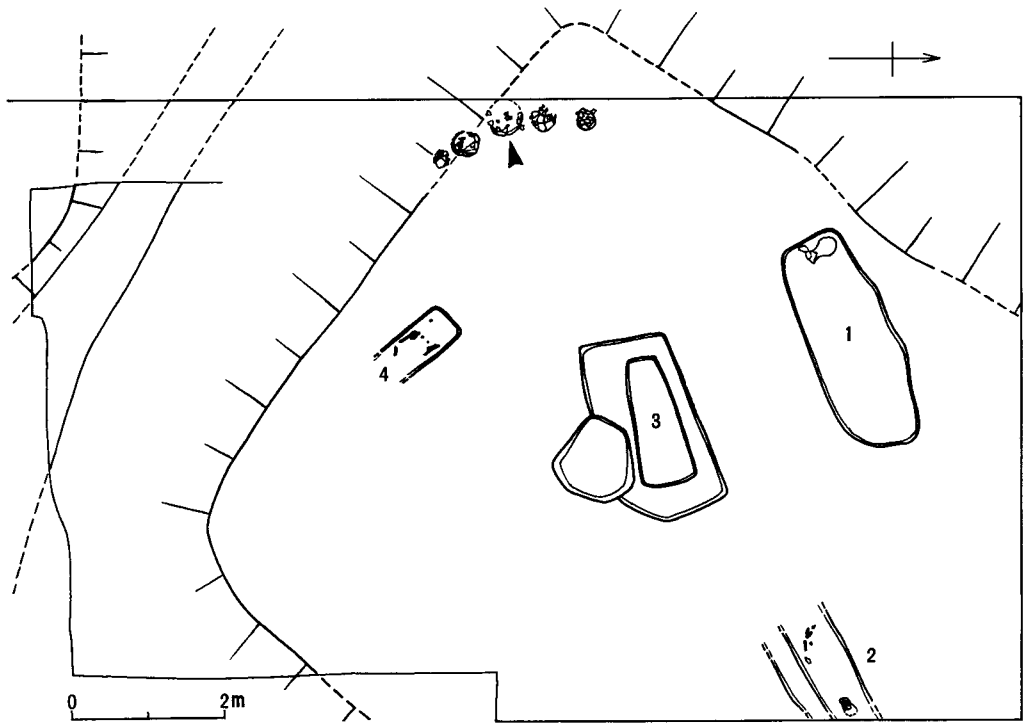
豚の下顎骨を墓に副葬した例は、次の3遺跡で知られている。

長崎県南松浦郡有川町浜郷遺跡 [小田 1970: 45~46] aでも取り上げた下顎骨に穿孔した資料であって、弥生前期中ごろ～中期中ごろの墓から、「棺の近くや被葬者の埋葬位置上层部にイノシシの顎骨があたかも散布したかの状態で発見され」という。1人あたりの数は、少ない例で1個、多い例では8個に達する。アワビの殻を伴っているのも、その意味を考えるうえで示唆的である。浜郷遺跡では、3号は女性、8号・9号・11号・17号・18号・20号は男性、12~16号は男3・女2であったが、これらには豚の下顎骨の副葬はみられなかった。また、壺棺のうち、のこりの6基にも豚の下顎骨の副葬はなかった。したがって、1号石棺の豚骨も女性に伴った可能性を考えるならば、この遺跡では一部の成人女性と乳児にのみ豚の下顎骨は伴ったことになり、その頻度は、成人18人中5人、27.8%である。

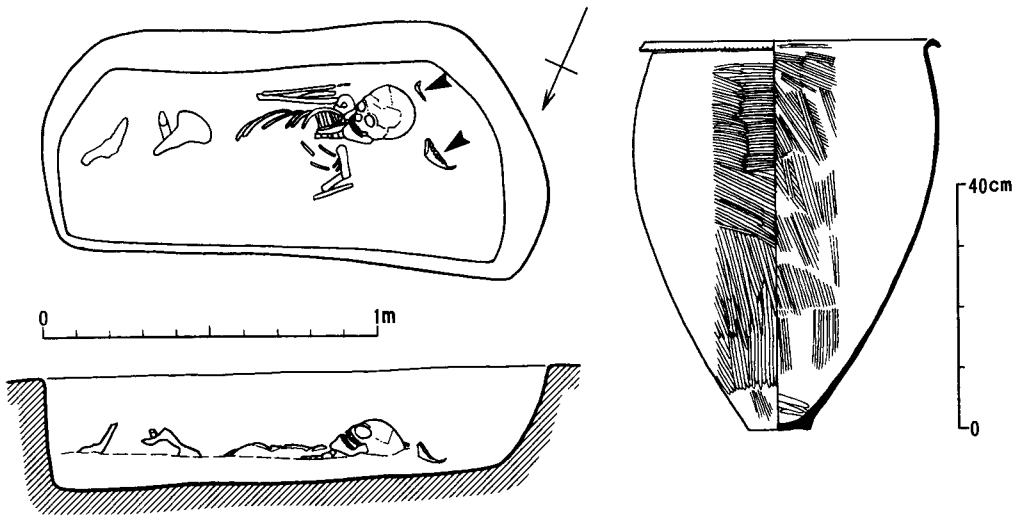
大阪府八尾市亀井遺跡 [広瀬 1986: 42~46]・[松井 1986: 433] 1982~83年に17区で発掘された方形埴塚墓 ST1701の「供献土器群A」(5個)のうちの1個の甕の底部に、1歳未満の「猪」の下顎骨が、上向きになって遺存していた。甕は、口径46.6cm、高さ63.4cmの大型である(図5)。鑑定にあたった松井章は、その他の部位の骨片や骨粉の存在や土器の容量から、生後数カ月の幼獣1体分を甕に容れて供献した可能性を考えている [松井 1986: 430]。埴塚墓の内部主体は木棺墓4基と土坑墓1基で、時期は中期中ごろ(Ⅲ期古)である。

大阪府八尾市亀井遺跡 [松井 1986: 430] 1982~83年の調査時に、弥生中期の層から、猪類の破片が総数385点出土したが、そのうち下顎骨は左側32点、右側22点の計54点でもっとも多かった。他の部位にくらべると、異常に多い量である。性も判明するかぎりでは雌が圧倒的に多く、特別な事情があったことを思わせる。

大阪府和泉市池上遺跡 [金子・牛沢 1980] 弥生中期のB溝に廃棄された状態で保存状態良好な下顎骨14個出土している。雄は、牙を摘出するために下顎体の下縁を破壊したものがある。



1 大阪・亀井 ST1701



2 奈良・鴨都波

図5 大阪府亀井遺跡の墳丘墓 ST1701 の豚の下顎骨副葬の甕形土器 (下右)
[広瀬ほか編 1986], 奈良県鴨都波遺跡の豚下顎骨副葬の土坑墓 (下左)
[藤田編 1992]

奈良県御所市鴨都波遺跡〔藤田編 1992〕 1990～91年におこなわれた第12次調査のときに、中期後半(IV期)の土坑墓に下顎骨1個が「供献」されていた。下顎連合部で左右に分離し、左半分は頭の下に、右半分は約30cm離れた頭の右側にあった(図5)。牙はのこっていなかった。

d 日本の発掘例の特色

日本では豚または猪の下顎骨に穿孔した例は、弥生前期前半から後期後半まで知られている。ただし、沖縄では、貝塚時代中期すなわち縄文晩期併行期に猪に穿孔した1例が報告されており、九州本島よりも古い。現在知られている東限は愛知県であるから、弥生時代の西日本に存在した習俗であったといえることができる。墓からの出土は長崎県浜郷、大阪府亀井、奈良県鴨都波遺跡だけであって、他は居住地外や環濠などに投棄した状態で出土している。下顎骨を割って左右に分かれたり、牙を抜いたのは、廃棄する時のことであろう。孔の大きさは、径1.0cmの亀井例を最小として、4×4cmの唐古例を最大とする。木棒に通した状態で発掘された菜畑例は、棒の径が約2cmである。孔の全周囲が磨滅した下郡桑苗例からすると、紐に通すこともあったのであろう。豚の成獣の下顎骨の重量は1個が500g前後あるから、これを5個、10個連ねるとかなりの重量になり、細い棒ではもちこたえるのが難しくなる。孔の小さなものは、紐に通して懸架した可能性がよくだらう。穿孔例は、判明しているかぎり、雄が23～25個、雌が3個であって、雄が圧倒的に多い。立派な牙をもつ雄の下顎骨を、特に大事に扱ったのであろうか。

穿孔せずに下顎骨の連合部を利用して棒や紐に掛けたと推定される例は、門田、亀井、池上、唐古・鍵遺跡など動物骨をたくさん出土した弥生前・中期の遺跡に多い。亀井、唐古・鍵遺跡で知られているかぎり、雌が多いという傾向がある。

この種の例は、おそらく上記以外にも出土していると思われる。完形ないしは完形に近い状態で出土した豚の下顎骨は、1個であったとしてもその可能性があり、出土状況や使用痕に今後は注意すべきであろう。

下顎骨の副葬は、事例は少ないが、長崎、大阪、奈良県にあり、弥生前・中期から後期後半までの時間幅をもっている。浜郷遺跡では、女性と乳児にのみ伴っている。

これまでの報告例によるかぎり、豚の下顎骨の墓への副葬は少ないから、弥生時代のばあいは、どこかに懸架したあと、濠、廃坑や居住区外に捨てるが多かったのであろう。

豚の頭骨は、菜畑、池上遺跡などでは破壊していたが、下郡桑苗遺跡では破壊しておらず、特別な扱いをしている可能性がある。ただし、頭骨を掛けるとすれば両眼窩に紐を通して掛けるのが、簡単な方法であるが、そのような痕跡は認められない。西川津、唐古・鍵遺跡で下顎骨に伴出した頭骨1個も、特別扱いしたものかもしれない。頭骨のばあいは、どこかの上に安置していたのであろうか。そのばあいでも、観察したかぎりでは、下顎骨に咬筋を切断した際の切傷がついているから、肉・皮つきの頭部を掛けたり置いたりすることはなかった、と断じてよい。

2 アジアの考古資料

中国では、新石器時代の早い時期から豚の飼養をおこなっていた。黄河中流域の磁山・裴李崗文化では約8000年前に、黄河下流域の北辛文化では約7000年前に、長江中流域も皂市下層文化では約8000年前に、長江下流域の河姆渡文化では約7000年前にすでに現れている〔周 1984(佐川訳 1988)〕・〔甲元 1992〕。豚の頭骨や下顎骨を特別扱いして墓に副葬するようになるのは、それぞれの地域で豚飼育の歴史が始まって約2000年後のことである。

なお、墓などから出土した頭骨を、報告書では、「猪 *Sus domestica*」と表現しているのですが、ここではそれは豚と記述するが、その一方、三里河遺跡の報告書には「猪」と「野猪」の表現がある。両者の区別がどこまで厳密になされているのか判断しにくいですが、ここでは原報告にしたがって「野猪」は「猪」と記述しておく。また、個々の遺跡の年代については、南京博物院〔1978〕、任式楠〔1989〕、西谷大〔1992〕による中国新石器時代の編年案を参考にして示す。

朝鮮半島の新石器時代（櫛目文土器）から青銅器・鉄器時代（無文土器）では、現在知られている豚の分布の南限は平壤近くの勝湖郡立石里遺跡であって〔キム 1974: 29〕、南半部からの報告例はまだない。

a 豚の下顎骨の穿孔例

「猪」の下顎骨に穿孔した例は、中国と朝鮮半島からも出土している。

山東省膠県三里河遺跡〔中国社会科学院考古研究所編 1988: 49・128・129・写真14〕 大汶口文化晩期（約4800～4500年前）に属する M279 号墓から、55～60歳の男性の遺体に、猪の下顎枝に「火灼」によって円形の孔をあけた例が1個伴っている（写真5・20，図16-33）。雄の成獣で、みごとな牙をもっている。副葬されていた位置は、二層台上で人の頭の右側上方にあたる。

咸鏡北道茂山郡茂山邑虎谷遺跡〔キム 1974: 図版18〕 無文土器時代の集落遺跡から、「猪」の下顎骨に穿孔した例が出土している（図1-13）。写真に2例を掲出しているが、穿孔についても、出土状態についても記述はない。孔の1例は、2×2.5cmの隅丸の三角形、もう1例は径2cmの円形である。牙は失われている。2例とも雄の成獣のようである。同遺跡から出土している頭骨10個は豚と記載されている。虎谷遺跡は、I期からVI期まで区分され、豚の頭骨を出土した49号住居址はV期に属する。前1000年紀前半から後半まで存続する遺跡である。

b 豚の下顎骨の無穿孔懸架例

豚の下顎骨または頭骨をどこかに掛けていたと推定される例は、次の4遺跡例がある。

江蘇省邳県劉林遺跡〔南京博物院 1965〕 大汶口文化早期（約6200～5500年前）に属する溝（幅2m，深さ0.3m，底の深さ0.7～1.05m）の底部に、豚の下顎骨20個が集中的に放置されて

いた(写真4)。その配列は乱れた状態であって、溝の上から投げ込んだもののようにみえる。

咸鏡北道茂山郡茂山邑虎谷遺跡〔黄 1975:196〕 無文土器時代に属する虎谷遺跡49号住居址内の東南側の床面から豚の頭骨11個が一塊に積まれた状態で出土している。同住居址は火事によって焼けた家であって、床には燃え滓と炭が多量に堆積していた。金信奎によると、頭骨は10個で、雄1、雌9であるという〔キム 1974:41〕。時期は虎谷遺跡V期、すなわち鉄器時代1期であるから、前2世紀ごろであろう。

ロシア共和国ハバロフスク地区ククレヴォ村ベンゾバキ遺跡〔デレビャンコ 1973(加藤 1982:44~45)〕 ウリル文化に属する1号、2号住居址から豚の下顎骨が出土した。1号住居址では、外側に張り出した楕円形の1号土坑(80×110cm、深さ80cm)の底に、多量の石片、土器片とともにあった。壁ぎわに位置する6号土坑(40×54cm、浅い鉢状を呈する)の底にも、豚の下顎骨が小形土器、大形石製尖頭器、スレート製ナイフ、骨錐などとともにあった。2号住居址では、長楕円形の4号土坑(深さ25~30cm)に頭骨があった。楕円形の5号土坑(径1m、深さ30cm、浅い鉢状を呈する)に小塊となった豚の骨があった。そのほか、住居址中央の炉址(1×1.8m、深さ22cm)の壁ぎわにも、豚の骨が土器片、土製玉とあった。遺跡はアムール川支流のコチコヴァトカ川の左岸に所在する。

ウリル文化は、アムール川中・下流域に分布する初期鉄器文化で、前1000年前後とされるが、おそらく前5~3世紀ごろの年代を与えるべきであろう。

ロシア共和国ハバロフスク地区ククレヴォ村コチコヴァトク遺跡〔デレビャンコ 1973(加藤 1982:44)〕 ウリル文化に属する1号、2号住居址から豚の頭骨が出土している。後頭骨と下顎骨がのこっていたという。遺跡は前出のベンゾバキ遺跡の上流2kmに所在する。

ロシア共和国ハバロフスク地区アムール・サナトリー遺跡〔デレビャンコ 1976:50~51(加藤 1988:230)〕 ポリツェ文化(前2~1世紀ごろ)に属する。土坑内から魚骨・貝殻とともに、豚の下顎骨が出土している。

c 豚の頭骨・下顎骨の副葬例

中国の新石器時代遺跡で発掘されたうちこれまでの報告例をあげれば以下のとおりである。ここでは頭骨・下顎骨だけでなく他の部分骨を副葬していたものまで掲出しておいた(表の掲出項目は、墓番号、性、年齢、副葬骨、副葬位置の順である)。

山東省泰安県大汶口遺跡〔山東省文物管理处・済南市博物館編 1974〕 大汶口文化中・晩期(約5500~4500年前)の中期に属する74基の墓のうち29基(39.2%)、中・晩期に属する19基の墓のうち4基(21.1%)、晩期に属する25基のうち9基(36.0%)、時期不明の15基のうち4基、すなわち計133基の墓のうち49基(36.8%)から、豚の頭骨を主体に下顎骨・蹄骨、四不像鹿の下顎骨など約150個が出土している(写真8・9・19、図11~13)。

〔大汶口文化中期〕

M 6 号	—	成年	豚頭骨 2	脚下	M 59 号	男	成年	豚頭骨 3	西端二層台上
M 8 号	—	成年	豚頭骨 1	墓坑左側, 墓口に 近い所	M 65 号	—	成年	豚頭骨 3	頭上方 2, 右側 1
M 13 号	男・女	成年	豚頭骨 14, 豚骨 15 片	葬具右側に 1 列に並べる	M 66 号	—	成年	豚頭骨 5	脚下 2, 左膝傍ら 1
M 18 号	—	成年	豚頭骨 3, 豚骨 5 片	腿上	M 73 号	男	成年	豚頭骨 2	頭上方
M 19 号	—	成年	豚頭骨 2	脚下 1, 左 骨盤の所 1	M 79 号	—	成年	豚頭骨 1	右脚部
M 26 号	—	成年	豚頭骨 1	腿右側	M 81 号	—	成年	豚頭骨 2	脚下
M 28 号	女	成年	豚頭骨 1	二層台東南隅	M 84 号	—	成年	豚頭骨 1	脚下
M 32 号	—	成年	豚頭骨 5	脚下	M 87 号	—	成年	豚頭骨 1	右脛骨傍ら
M 38 号	—	成年	豚頭骨 2	頭上方二層台上	M 91 号	男	成年	豚下顎骨 1	
M 52 号	—	成年	豚頭骨 1	脚下	M103号	—	成年	豚頭骨 2	脚下
M 53 号	—	成年	豚頭骨 3	脚下方二層台上	M106号	—	成年	豚頭骨 4	脚下
M 54 号	—	—	豚頭骨 2	墓坑底西	M109号	男	成年	豚頭骨 1	肩上埋土中
M 56 号	—	成年	豚頭骨 5	股骨上 2, 腰左側 1, 小腿左側 2	M110号	—	成年	豚頭骨 2	脚下
M 58 号	—	成年	豚頭骨 4	脚下 3, 東南隅 1	M111号	男	成年	四不像下顎骨 1	
					M112号	男	成年	豚頭骨 1	脚下
					M131号	女	成年	豚頭骨 1	脚下

〔大汶口文化中・晩期〕

M 35 号	男女・幼児	成年	豚頭骨 1, 豚蹄骨 2	脚下	M 47 号	—	成年	豚頭骨 1	葬具外東端
M 42 号	—	成年	豚頭骨 1	左膝部	M 60 号	—	—	豚骨半片	
M 44 号	—	成年	豚頭骨 3	左右膝と小 腿の傍ら	M 72 号	女	成年	豚骨 11 片	
					M121号	女	成年	豚頭骨 1	右脚下
					M126号	—	—	豚下顎骨 2	

〔大汶口文化晩期〕

M 3 号	—	成年	豚頭骨 1	脚下右側	M17号	—	成年	豚骨 5 片, 小獸顎骨	
M 4 号	—	成年	豚頭骨 1	脚	M24号	—	—	豚骨 7 片	
M10号	女	成年	豚頭骨 2	脚下葬具 外 1, 葬具外東南角 1	M25号	—	成年	豚頭骨 1, 豚下顎骨 1	葬具外東西両端

〔時期不明〕

M12号	—	成年	豚頭骨 3	脚下両傍の 二層台上	M57号	女	成年	豚頭骨 1	脚下
M40号	—	成年	豚頭骨 1	脚下	M68号	—	幼児	豚頭骨 2	頭右方

山東省曲阜県西夏侯遺跡〔中国科学院考古研究所山東隊 1964〕 大汶口文化晩期に属する 11 基の墓のうち 3 基 (27.3%) から豚の頭骨が下顎骨を伴って出土している(図13・14)。

M 4 号	男	成年	豚頭骨 (雄) 1		M 8 号	男	成年	豚頭骨 (雄) 1	
M 6 号	女	成年	豚頭骨 (雄) 1	大形高坏内					

山東省滕県崗上村遺跡〔山東省博物館 1963〕 大汶口文化に属する 8 基の墓のうち 4 基 (50.0%) から豚の下顎骨や蹄骨・脊椎骨が出土している(図14)。

M1号 豚下顎骨1, 蹄骨

M6号 豚下顎骨1

M2号 豚下顎骨1, 蹄骨

M7号 豚蹄骨1, 脊椎骨

山東省鄒県野店遺跡〔山東省博物館・山東省文物考古研究所 1985〕 大汶口文化早期前半～晩期(約6300～4500年前)に属する89基の墓のうち, 早期前半の18基には豚の骨の副葬はなく, 早期後半の21基のうち2基(9.5%), 中期の6基のうち4基(66.7%), 晩期の26基のうち1基(3.8%)から, 豚の頭骨・下顎骨のほか全身骨が出土している(写真6, 図14)。

〔早期後半〕

M8号 — — 豚頭骨

M29号 — — 豚頭骨1

〔中期〕

M22号 女 23 豚下顎骨1

M35号 — — 豚1個体

M34号 — — 豚下顎骨18

M47号 男 35・女 壯年 豚顎骨3

〔晩期〕

M84号 男 中年 豚下顎骨2

山東省諸城県呈子遺跡〔昌濰地区文物管理組ほか 1980〕 山東龍山文化(約4500～4000年前)に属する87基の墓のうち9基(10.3%)から, 豚の下顎骨が計41個出土している(図14・15)。

〔山東龍山文化早期〕

M19号 男 35—40 豚下顎骨4 頭部の上方

M45号 男 40前後 豚下顎骨7

M40号 — — 豚下顎骨4 頭部の右上方

M90号 男 35前後 豚下顎骨1

〔山東龍山文化中期〕

M72号 — — 豚下顎骨4 両膝の上

〔山東龍山文化晩期〕

M15号 — 兒童 豚下顎骨4

M81号 — — 豚下顎骨4 右膝の右側

M32号 男 45前後 豚下顎骨13 二層台の上で右脚下

〔時期不明〕

M68号 — — 豚下顎骨1

山東省膠県三里河遺跡〔中国社会科学院考古研究所編 1988〕 大汶口文化晩期に属する64基の墓のうち25基(39.1%)と山東龍山文化に属する96基の墓のうち21基(21.9%)から豚の下顎骨などが出土している(図15・16)。

〔大汶口文化晩期〕

M104号 男 55—60 豚下顎骨1

M125号 男 50—55 豚下顎骨2 脚下

M105号 女 45—50 豚下顎骨8

M127号 — — 獸頭骨2

M108号 女 35—40 豚下顎骨11 左膝上

M129号 男 55—60 豚下顎骨15

M116号 男 40—45 豚下顎骨6

M130号 女 40—50 豚下顎骨1

M122号 女 55—60 豚下顎骨6

M215号 女 40—45 豚骨1

M123号 男 12—13 豚下顎骨1

M216号 — 6—7 豚下顎骨9

M124号 男 40—45 豚下顎骨22

M219号 6—7 獸骨

M229号 女 約20 豚下顎骨1
 M232号 女 15—16 豚下顎骨5
 M249号 男 約35 豚蹄骨1
 M256号 女 約25 豚下顎骨1
 M267号 男 50—55 豚下顎骨1
 M279号 男 55—60 穿孔豚下顎骨1

〔山東龍山文化〕

M110号 女 30—35 豚下顎骨2
 M118号 女 50—55 豚下顎骨1
 M134号 男 壯—中年 豚下顎骨14
 M201号 女 40—45 豚下顎骨3
 M204号 男 壯年 豚下顎骨12
 M210号 女 40—50 豚下顎骨3
 M213号 女 約60 豚下顎骨3
 M214号 男 30—35 豚下顎骨4
 M222号 女 55—60 豚下顎骨3
 M223号 男 40—50 豚下顎骨4
 M238号 女 45—50 豚下顎骨1

M 288号 男 50—55 獸骨
 M 290号 女 30—35 豚下顎骨4
 M 296号 男 49—45 豚下顎骨7
 M 301号 女 55—60 豚下顎骨6
 M 302号 男 約60 豚下顎骨37

M 240号 男 約35 豚下顎骨3
 M 244号 男 約40 豚下顎骨2
 M 245号 女 約50 豚下顎骨8
 M 252号 女 約50 豚下顎骨1
 M 253号 男 55—60 豚骨1
 M 260号 一 — 豚下顎骨1
 M 271号 男 30—35 豚下顎骨2
 M 272号 一 — 豚下顎骨3
 M 283号 男 25—30 豚下顎骨1
 M2124号 女 約60 獸骨

山東省莒県陵陽河遺跡〔王 1987〕・〔山東省考古所ほか 1987〕 大汶口文化中期の4基のうちの3基(75.0%)から35個, 中・晩期の14基のうちの10基(71.4%)から55個, 晩期の27基のうちの16基(59.3%)から101個, 合計45基のうち29基(64.4%)から191個の豚の下顎骨が出土している(図17・18)。

〔大汶口文化中期〕

M 8号 男 豚下顎骨2
 M12号 男 豚下顎骨4

M24号 一 豚下顎骨29

〔大汶口文化中・晩期〕

M14号 女? 豚下顎骨6
 M18号 男 豚下顎骨1
 M19号 男 豚下顎骨4
 M25号 男 豚下顎骨7
 M26号 男 豚下顎骨8

M27号 男 豚下顎骨3
 M29号 男 豚下顎骨1
 M40号 一 豚下顎骨2
 63M 4号 一 豚下顎骨2
 63M 7号 一 豚下顎骨4

〔大汶口文化晩期〕

M 1号 男? 豚下顎骨1
 M 4号 男? 豚下顎骨3
 M 5号 一 豚下顎骨9
 M 6号 男 豚下顎骨21
 M 7号 男 豚下顎骨5
 M11号 男 豚下顎骨2
 M13号 男 豚下顎骨5
 M15号 一 豚下顎骨4

M17号 一 豚下顎骨33
 M21号 一 豚下顎骨4
 M23号 一 豚下顎骨1
 M28号 男 豚下顎骨4
 M41号 男 豚下顎骨1
 M42号 男 豚下顎骨4
 63M 3号 一 豚下顎骨2
 63M 8号 一 豚下顎骨2

山東省泗水県尹家城遺跡〔山東大学歴史系考古專業教研室編 1990〕 山東龍山文化中中期に属する65基の墓のうち7基(10.8%)から、豚の下顎骨が計118個、1人平均16.9個出土している(図19~21)。

79M4号	—	—	豚下顎骨6	
M15号	男	—	豚下顎骨20	3人再葬, 内櫛の頭部側の北西隅に一塊
M126号	男	成年	豚下顎骨20	棺の南西隅に一塊
M133号	—	—	豚下顎骨12	棺の北西隅に一塊
M134号	男	30—35	豚下顎骨24	土坑の墓口の北西隅に一塊
M138号	—	—	豚下顎骨32	内櫛の北西隅から南西隅にかけて三塊
M203号	男	25前後	豚下顎骨4	二層台の脚側, 南西隅に一塊

山東省濰坊県姚官庄遺跡〔山東省博物館 1963〕 山東龍山文化に属するM10号墓から豚の下顎骨が出土している。

江蘇省邳県大墩子遺跡〔南京博物院 1964, 1981〕 1963年と1966年の第1・2次発掘時に、大汶口文化早期後半に属する177基の墓のうち10基(5.6%)と、同中期に属する155基のうちの9基(6.4%)から、豚の下顎骨などが出土している(図16)。

[大汶口文化早期後半]

M33号	女	約30	キバノロ下顎骨1	M187号	女	熟年	豚下顎骨1
M53号	男	熟年	豚下顎骨1	M215号	女	熟年	豚下顎骨1
M102号	男	約30	豚下顎骨2	M218号	女	約25	豚全身(8ヵ月)1
M125号	男	11—12	豚頭骨1	M222号	男	熟年	豚下顎骨1
M177号	女	約30	豚下顎骨1	M336号	女	老年	牛下顎骨

[大汶口文化中期]

M46号	女	約30	豚下顎骨1	M101号	男	熟年	豚下顎骨1	左前腕部上
M47号	男	熟年	豚骨と鹿骨	M108号	女	約20	豚下顎骨1	
M68号	女	成年	豚下顎骨3	M131号	—	—	豚下顎骨1	
M91号	男	壮年	豚頭骨	M211号	男	約30	豚下顎骨1	
M100号	男	壮年	豚頭骨3					

江蘇省新沂県花厅遺跡〔南京博物院新沂工作組 1957〕・〔南京博物院 1990〕 1953年の第1・2次発掘時に大汶口文化中中期に属する20基の墓のうち1基から、動物の下顎骨が出土している。1987年の第3次発掘時にも、大汶口文化中・晩期に属する26基の墓のうちの数基から豚の下顎骨や頭骨が、少ないもので2個、多いものでは10個出土している(図24・25)。

M18号	男	豚下顎骨2	大腿部, 足元	M21号	—	豚下顎骨1	大腿部左
M20号	男	豚骨格1, 豚頭骨2, 豚下顎骨6		「豚坑」		豚骨格2, 豚頭骨2	
			二層台上, 頭部~足元の周囲				

河北省武安県溝溝遺跡〔北京大学ほか 1959〕 山東龍山文化に属する1基の土坑中に豚の骨格21体があった。

河南省淅川県下王崗遺跡〔河南省文物研究所ほか 1989〕 仰韶文化に属する123基の墓のうち1基(0.8%)に猪の頭骨などが副葬してあった(図11)。

M705号 男・男 中年 猪上顎骨1 2号人骨の左腹部

山西省襄汾県陶寺遺跡〔中国社会科学院考古研究所山西工作隊 1980〕 山東龍山文化晩期に属する109基の墓のうち4基(3.7%)の墓坑内または墓口の傍らの別の小さく浅い土坑に、豚の下顎骨が埋めてあった(図22)。

M232号 豚下顎骨

M248号 豚下顎骨

M271号 成人 豚下顎骨1 頭部の上部

M282号 成人 豚下顎骨14 脚の下方, 1.1m離れた土坑

陕西省臨潼県姜寨遺跡〔西安半坡博物館ほか 1988〕 仰韶文化半坡期前半(約7000~6500年前)に属する174基の墓のうち3基(1.7%)から豚と鹿の下顎骨が出土している。

M27号 男 6前後 豚下顎骨1

M88号 女 青年 鹿下顎骨1

M90号 男 40—50 豚下顎骨1

陕西省華県元君廟遺跡〔北京大学歴史系考古教研室 1983〕 仰韶文化半坡期(約7000~6000年前)に属する38基の墓のうち4基(10.5%)から豚の頭骨・下顎骨などが出土している(図11)。

M419号 女 成年 食肉獣下顎骨1 骨盤の右側

M425号 — — 豚顎骨1 腰骨の上

M439号 8人合葬(男4, 女1, 小児3) 豚右下顎骨1 骨格の所

M442号 男 40歳前後 豚頭骨1

陕西省南鄭県龍崗寺遺跡〔陕西省考古研究所 1990〕 仰韶文化半坡期後半に属する255基の墓のうち1基(0.4%)から豚の下顎骨が出土している。

M4号 男 45前後 豚下顎骨1

甘肅省永靖県大何庄遺跡〔中国科学院考古研究所甘肅工作隊 1974〕 齐家文化(約4000~3600年前)に属する82基の墓のうち12基(14.6%)の埋土中に豚または羊の下顎骨があった(図23)。少ない墓で2個, 多い墓では36個あり, 平均11.7個である。

M14号 女? 青年 羊下顎骨6

M27号 — 成人 羊下顎骨8

M34号 — 成人 豚下顎骨36

M35号 — 児童 豚下顎骨2

M36号 — 成人 豚下顎骨12

M53号 — 成人 豚下顎骨13

M55号 — 成人 豚下顎骨2

M57号 — 成人 豚下顎骨4

M58号 — 成人 豚下顎骨24

M60号 — 成人 豚下顎骨8

M63号 男 老年 豚下顎骨16

M88号 — 成人 豚下顎骨8

甘肅省永靖県秦魏家遺跡〔中国科学院考古研究所甘肅工作隊 1975〕 齐家文化に属する138基の墓のうち46基(33.3%)から合計439個の豚の下顎骨が出土した(写真7, 図23)。1基あたりの数は, 少ないもので1個, 多いもので68個, 平均9.5個である。

M4号 — 成人 豚下顎骨4

M6号 男 中年・児童 豚下顎骨68

M9号 — 成人 豚下顎骨26

M10号 男 老年 豚下顎骨13

M12号 — 成人 豚下顎骨2

M13号 女 成年 豚下顎骨2

M14号 — 成人 豚下顎骨9

M15号 — 成人 豚下顎骨4

M17号 — 成人 豚下顎骨1

M18号 男・女 成年 豚下顎骨12

M19号 男 中年 豚下顎骨4

M23号 — 成人 豚下顎骨2

M 24号	—	成人	豚下顎骨4	M 60号	—	成人	豚下顎骨6
M 25号	—	成人	豚下顎骨2	M 74号	男	中年	豚下顎骨1
M 27号	—	成人	豚下顎骨8	M 79号	—	成人	豚下顎骨5
M 28号	—	成人	豚下顎骨16	M 82号	—	成人	豚下顎骨12
M 30号	？・女？	成年・児童	豚下顎骨4	M 88号	—	成人	豚下顎骨8
M 33号	—	成人	豚下顎骨6	M 89号	男？	中年	豚下顎骨4
M 37号	—	成人	豚下顎骨18	M 95号	男・女	？・成年	豚下顎骨5
M 38号	—	成人	豚下顎骨7	M 96号	—	成人	豚下顎骨2
M 39号	—	成人	豚下顎骨1	M100号	—	成人	豚下顎骨4
M 40号	—	成人	豚下顎骨4	M103号	—	成人	豚下顎骨1
M 41号	男	中年	豚下顎骨11	M104号	—	成人	豚下顎骨7
M 42号	—	成人	豚下顎骨5	M107号	—	成人	豚下顎骨10
M 47号	—	成人	豚下顎骨2	M108号	男・女	老年・中年	豚下顎骨12
M 48号	—	成人	豚下顎骨4	M110号	—	成人	豚下顎骨10
M 50号	男・女	？・老年	豚下顎骨34	M123号	—	成人	豚下顎骨1
M 52号	男・女	成年	豚下顎骨55	M131号	—	成人	豚下顎骨4
M 58号	—	成人	豚下顎骨4	M134号	—	成人	豚下顎骨15

甘肅省武威県皇娘娘台遺跡〔甘肅省博物館 1960, 1978〕 第4次発掘時の齐家文化に属する62基の墓のうち16基(25.8%)に豚または羊の下顎骨の副葬があった(図23・24)。その量は、少ない墓で1個、多い墓で7個、平均2.2個であった。

M28号	成人2	豚下顎骨1	M53号	成人	豚下顎骨1
M30号	成人2	豚下顎骨5	M54号	成人2	豚下顎骨1
M33号	成人	豚下顎骨1	M58号	成人2	豚下顎骨1
M37号	成人	豚下顎骨2	M59号	成人	豚下顎骨2
M40号	成人	豚下顎骨2	M60号	成人	豚下顎骨1
M46号	成人2	豚下顎骨2	M63号	成人	羊頭骨1
M51号	成人	豚下顎骨1	M73号	成人	豚下顎骨6
M52号	成人2	豚下顎骨7	M83号	成人	豚下顎骨1

江蘇省南京市北陰陽營遺跡〔南京博物院 1958〕 崧沢文化(約6000~5700年前)中期に属する1基の墓から、豚の下顎骨が6個出土している。

江蘇省常州市圩墩遺跡〔常州市博物館 1974〕 馬家浜文化後期(約6500~6000年前)に属する25基の墓のうち2基(8.0%)から豚の頭骨・下顎骨が出土している(図24)。

M7A号	下顎骨1	M11号	頭骨1
------	------	------	-----

江蘇省上海市青浦県崧沢遺跡〔上海市文物保管委員会 1962, 1987〕 崧沢文化中期に属する100基の墓のうち5基(5.0%)から、豚や鹿の下顎骨が出土している。

M13号	男	中年	豚下顎骨	頭部の右上	M92号	—	中年	鹿顎骨	
M33号	—	—	鹿下顎骨		M93号	男	中年	豚顎骨	頸部
M42号	—	壯年	豚骨	高坏の下					

江蘇省呉県草鞋山遺跡〔南京博物院 1980〕 崧沢文化に属するM96号墓から豚の下顎骨2と鹿の上顎骨1が出土している(図24)。

浙江省北部の遺跡〔文物編集委員会編 1979: 218〕 良渚文化（約5700～4100年前）に属する遺跡の小形の墓で、豚の下顎骨を副葬した例がある。

湖北省黄冈県螺蛳山遺跡〔湖北黄冈地区博物館 1987〕 大溪文化（約6400～5200年前）に属する10基の墓のうち5基（50.0%）から豚・鹿の下顎骨などが出土している（図25）。

M3号	—	—	豚顎骨2	M7号	女30歳前後	豚下顎骨4, 豚顎骨4
M4号	—	—	豚顎骨3, 鹿顎骨1	M8号	女38歳前後	豚下顎骨3, 豚跟骨1
M5号	女	成年	豚下顎骨4			

湖北省鄖県青龍泉遺跡〔中国社会科学院考古研究所編 1991〕 屈家嶺文化晩期（約5000～4600年前）に属する17基の墓のうち4基（23.5%）に豚の下顎骨があった（図25・26）。

M8号	豚下顎骨（残）	M10号	豚下顎骨約12	頭部の右側に一括
M9号	豚下顎骨約15	M11号	豚下顎骨14	胴部の左側と足元

湖北省均県乱石灘遺跡〔長蘇文物考古隊直屬工作隊 1961〕 石家河文化に属する4基の墓のうち2基（50.0%）の人骨下肢付近の底部に、豚の下顎骨3, 4個を副葬してあった。

福建省崇安県武夷山白岩崖墓〔福建省博物館ほか 1980〕 印文硬陶文化（約3000～2000年前）に属する崖洞墓1基の、船棺外で横穴の左側から豚の下顎骨1が出土している。被葬者は、男性で約55～60歳である。古越人の墓とされている。

雲南省賓川県白羊村遺跡〔雲南省博物館 1981〕 新石器文化（約4000年前）に属する24基の墓のうち二次葬の1基（4.1%）から豚の下顎骨が出土している。

M12号 青年 豚下顎骨1

内蒙古自治区烏蘭察布涼城崞寨子遺跡〔内蒙古文物考古研究所 1989〕 戦国時代（約2400～2200年前）に属する31基の墓のうち17基（54.8%）から羊を主体として豚・馬鹿・牛の頭骨が出土している（図26）。

M4号	女	児童	羊頭骨2	M13号	男	40—45	羊頭骨5
M5号	男	成年	馬鹿頭骨1, 馬頭骨1	M14号	男	40前後	牛頭骨1
M6号	男	45—50	馬鹿頭骨1, 羊頭骨2	M15号	女	成年	牛頭骨1
M7号	女	成年	羊頭骨2	M17号	女	45—50	羊頭骨1
M8号	女	22—24	牛頭骨1, 豚頭骨5, 犬頭骨5	M18号	女	少年	羊頭骨5
M10号	男	30—35	羊頭骨5	M19号	女	25前後	牛頭骨1, 豚頭骨10, 犬頭骨6
M11号	男	50前後	馬鹿頭骨1, 羊頭骨2	M20号	女	30—35	羊頭骨4
M12号	男	少年	羊頭骨4	M21号	男	成年	馬鹿頭骨1, 羊頭骨7
				M22号	女	20—22	牛頭骨1, 羊頭骨7

遼寧省敖漢旗大甸子遺跡〔中国科学院考古研究所遼寧工作隊 1975〕 夏家店下層文化（約4500～3000年前）に属する54基の墓のうち一部（基数不明）の埋土中と龕に、豚の骨があった。

M5号	男	成年	豚頭骨2・犬骨格1	埋土中, 豚の脚骨 脚端の墓坑壁の上部の龕
M12号	女	成年	豚骨格	埋土中, 豚の脚骨 脚端の墓坑壁の上部の龕

吉林省吉林市西团山遺跡〔東北考古発掘団 1964〕 西团山文化（約3000～2600年前）に属する

箱式石棺墓19基のうち9基(47.4%)から、豚の下顎骨が出土している(図26)。

M1号 成人 豚下顎骨1	M12号 成人 豚下顎骨1
M4号 成人 豚下顎骨2(幼獣1, 亜成獣1)	M14号 成人 豚下顎骨3(幼獣左1, 左右揃い2)
M7号 成人 豚下顎骨4(幼獣右3, 左1)	M17号 成人 豚下顎骨1(幼獣)
M9号 成人 獣類下顎骨1	M18号 成人 豚下顎骨1
M10号 成人 豚下顎骨1(幼獣右2)	

吉林省吉林市騷達溝遺跡〔周 1984(佐川訳 1988:187)〕 西団山文化に属する。豚の下顎骨を副葬していた。

吉林省吉林市土城子遺跡〔周 1984(佐川訳 1988:187)〕 西団山文化に属する。豚の下顎骨を副葬していたほか、石棺墓のうち90%の棺蓋の上には豚の牙が散布していた。

d アジアの発掘例の特色

豚骨副葬習俗の成立と伝播 豚の頭骨や下顎骨を死者の墓に副葬する習俗は、中国では黄河と長江中・下流域の新石器時代、約5500~3000年前の間に特に盛行し、その間に西南部に伝わり、以後は盛行地域を周辺に移して今日にいたるまで残存する。

大陸側では豚の頭骨または下顎骨の取り扱い、墓への副葬が主体となっている。そして、それは、黄河中流域の仰韶文化では、半坡期前半の姜寨遺跡に早くも現れるのに対して、黄河下流域の山東省を中心に江蘇省まで分布する大汶口文化では、遅れてその早期後半の大墩子遺跡や野店遺跡に初めて現れる。このように、この習俗は仰韶文化に大汶口文化よりも早く現れるが、発達したのは黄河の下流域の大汶口文化中期~山東龍山文化においてである。大汶口文化早期前半~後半の劉林遺跡に1例もなく、同早期後半の大墩子遺跡に8例存在するというあり方から判断すると、その上限が大汶口文化早期前半までさかのぼる可能性はない。ただし、豚の下顎骨を集めてどこかに掛けていたことをうかがわせる例が、早期(細かな時期は不詳)の劉林遺跡では発掘されているから、豚の下顎骨を呪物として扱う習俗は、大汶口文化早期前半までさかのぼる可能性もこっている。豚の下顎骨を懸架することと、墓に副葬することを分けて考えると、かりに仰韶文化が大汶口文化に影響を与えたとすれば、それは墓に副葬することだけであった可能性もあろう。ただし、仰韶文化では、廟底溝期以後はこの習俗はまったく振るわない。しかし、黄河上流域では、その後、齐家文化でこの習俗は発達する。長江下流域のばあいは、馬家浜文化後期の副葬例が報告されているので、現状では黄河下流域よりも墓への副葬は時期的に早いことになる。しかし、崧沢遺跡のあり方をみると、頻度がきわめて低いうえに、鹿の下顎骨を交えているから、この習俗が成立した地域の候補からは外れる。むしろ、長江中流域の大溪文化晩期に属する螺蛳山遺跡が、頻度も高く中心部に近いことを思わせる。

いずれにせよ、豚の下顎骨を懸架あるいは副葬する習俗は、黄河流域で始まり、そこから淮河を越えて長江中・下流域へ広がり、さらに南は福建省から雲南省、東北は吉林省を越えてアムール川流域まで達したということになろう。なお、日本との関連では、朝鮮半島の状況が問題であ

るが、現在のところまったく不明である。ただ、わずかに慶尚南道三千浦市勒島遺跡33号墓の人骨の上に鹿の骨を主とし猪の骨を交えた獣骨が散布していた例が挙げられる[申 1985]。また、同遺跡5号甕棺でも鹿の骨が人骨の上に散っていたという[申 1984]。時期は無文土器時代後期、前2世紀ごろである。獣骨の部位は、四肢骨や腸骨、第1頸椎などを含んでおり、頭骨や下顎骨主体の中国新石器時代例とは異なっているうえに、出土状況も中国とは趣をまったく異にしているが、留意しておくべき資料であろう。

さて、黄河流域の大汶口文化早期後半の野店遺跡、同中・晩期の大汶口・西夏侯遺跡では下顎骨の付いた頭骨をしばしば副葬するのに対して、同早期後半の大墩子遺跡、同晩期の崑山村・三里河・陵陽河・呈子遺跡などでは下顎骨だけを副葬している。仰韶文化・龍山文化・齐家文化でも、そのほとんどが下顎骨だけである。さらに長江下流域のはぼ同時期の崧沢文化に属する崧沢遺跡や草鞋山遺跡では、豚の下顎骨の副葬にこだわらず、鹿の下顎骨をもってそれにあてるように変化している。豚の頭骨の副葬は、現状では、泰山周辺の大汶口文化にのみみられる特徴であることを確認しておきたい。

大陸側では、下顎骨の穿孔例はきわめて少ない。劉林遺跡の下顎骨の廃棄例から、墓への副葬例も本来はどこかに掛けてあった可能性がたつよいと思われるが、そのばあい木の棒に下顎連合部を掛けるという形が主だったのであろう。

黄河上流域の大何庄遺跡では、例は少ないが鹿、羊の下顎骨を副葬した墓がある。豚の代わりと考えてよいだろう。この傾向は内蒙古の窯子遺跡へいくと、豚と羊・馬鹿が完全に入れ替わるというほど変化する。これは、定着した集落のまわりで家畜を飼う農耕・牧畜型と、移動生活を送りながら家畜を飼う遊牧型の違いに基づくものであろうが、羊の下顎骨が豚のそれに代替するという事は、下顎骨がもつ象徴性とかかわりがあるのであろう。

豚の骨を副葬された人々 被葬者の性は、男女双方にまたがっているばあいと、男性だけに偏っているばあいがあり、その差は顕著である。また、少数例であるが、幼児に副葬した例も知られている。これらのうち詳しい報告のある大墩子・大汶口・陵陽河・三里河・秦魏家遺跡を例にとって整理してみよう（数字は副葬墓の数、副葬骨の数／墓の総数の順。なお、性については疑問符が付いているものも、数のうちに含める）。

大汶口文化早期後半の大墩子遺跡では、豚の下顎骨の副葬は男4人、1人1～2個、女5人、1人1個であって、その副葬は、男の墓の4.9%、女の墓の7.9%、合わせて6.3%であって、その頻度は低い。仰韶文化半坡期の姜寨、元君廟遺跡でのあり方と合わせ、豚の下顎骨副葬の初期の様相をよく示している。大墩子遺跡では、中期になっても、豚の骨の副葬は男の墓の6.8%、女の墓の7.0%、合わせて9.2%であって、この傾向は大きくは変わらない。

大汶口遺跡では、大汶口文化中期には男5人、1人1～3個、1人平均1.6個、女2人、1人1個、1人平均1個、男女合葬の13号墓だけ14個の頭骨を副葬していた。中・晩期には女1人、1個、男女合葬墓でも1個である。そして、晩期には女1人、2個である。

	〔大墩子遺跡〕 大汶口文化		〔陵陽河遺跡〕 大汶口文化		
	早期後半	中期	中期	中・晩期	晩期
男	4(5)/81	5(7)/74	2(6)/3	6(24)/7	9(46)/12
女	5(5)/63	3(5)/43	— /—	1(6)/2	— /1
不明	1(1)/15	4(13)/23	1(29)/1	3(8)/5	7(55)/14
幼児	— /—	1(4)/1	— /—	— /—	— /—
計	10(11)/159 (6.3%)	13(29)/141 (9.2%)	3(35)/4 (75.0%)	10(38)/14 (71.4%)	16(101)/27 (59.3%)

〔大汶口遺跡〕 *うち男1(1)は下顎骨の副葬

	中期	中・晩期	晩期	不明
男	5(8)*/8	— /1	— /5	— /1
女	2(2)/9	1(1)/2	1(2)/3	1(1)/1
男女	1(14)/2	1(1)/1	— /1	— /—
不明	21(52)/51	2(4)/15	8(8)/16	2(4)/7
幼児	— /3	— /1	— /—	1(2)/6
合計	29(76)/73 (39.7%)	4(6)/20 (20.0%)	9(9)/25 (36.0%)	4(7)/15 (26.7%)

〔三里河遺跡〕

	大汶口文化晩期	龍山文化
男	10(93)/30	9(43)/46
女	10(44)/21	9(25)/34
不明	— /4	2(4)/14
幼児	1(9)/9	20(72)/97
計	21(146)/64 (32.8%)	20(144)/97 (20.6%)

〔秦魏家遺跡〕

	齊家文化
男	6(101)/10
女	2(6)/9
男女	5(118)/7
不明	33(214)/109
幼児	— /3
計	46(439)/138 (33.3%)

三里河遺跡では、大汶口文化晩期には、男は10人、1人1～37個、1人平均9.3個、女10人、1人1～11個、平均4.4個、そして、龍山文化期には、男は9人、1人1～14個、平均4.8個、女は9人、1～8個、平均2.8個となっている。

したがって、この習俗は一貫して男女ともにみられる。そして、副葬した豚の下顎骨の数は、大汶口文化早期後半～中期までは1人1、2個と少数であるが、大汶口文化晩期～山東龍山文化になると、1人あたり6、7個と激増する。また、齊家文化では、秦魏家、大何庄遺跡のように、1人あたり10個前後という多いばあいと、皇娘娘台遺跡のように、2個強のばあいがある。そして、いずれのばあいも、平均すれば男のほうが1人あたりの数が多い。また、幼児にも副葬した例が存在する事実は、豚の骨の副葬と飼育担当者との間には直接的な関係がないことを示唆して

いる。なお、陵陽河遺跡で豚の下顎骨をもつ被葬者の性は、男性15、男性？2、女性？1で、ほとんど男性に限られている。これは、45基のうち性が判明しているのは男性18、男性？4、女性2、女性？1で、男性主体の墓地となっていることと関連があるのであろう。性が判明している4例はすべて男性である尹家城遺跡のばあいも、同様の解釈が可能であろう。

三里河遺跡での時期的変化をみると、大汶口文化晩期と龍山文化期との間には、男の墓の33.3%、女の墓の47.6%、合わせて32.8%に豚骨の副葬がある段階から、男の墓の19.6%、女の墓の26.5%、合わせて20.6%に副葬のある段階への推移が認められる。その間で注目すべき動きは、大汶口文化晩期には1人11個副葬の女性35～40歳が、1人22個副葬の男性40～45歳、1人15個副葬の男性55～60歳、1人37個副葬の男性約60歳に混じっているが、龍山文化期になると1人14個副葬例は男性で壮一中年というように、下顎骨の多数副葬例が年配の男性にかたよっていることである。

中国新石器時代の場合は、豚の屠殺時期をみると若い個体が多い。しかし、死者がでるのは不定期である。豚の屠殺が不定期に死者がでるのを待っておこなわれるというのはいかにも不自然である。葬儀のときに豚の屠殺が考えられるとしても、すべてがそうだと考える必要はまったくないのであろう。

この習俗の意味を考察していくには、骨を副葬された豚が、いつ屠殺されたかが重要である。いくつかの場合が想定できるが、ここでは二つあげておきたい。一つは、死者がでたあと葬儀をおこなうが、その葬儀の時に殺し食べたあと、頭骨または下顎骨だけを副葬したと考えることである。しかし、それにしては、秦魏家遺跡M52号墓の68頭、三里河遺跡M302号墓の37頭、大何庄遺跡M34号墓の36頭、陵陽河遺跡M17号墓の33頭、尹家城遺跡M138号墓の32頭は多すぎる。ちなみに、豚1頭の肉量を50kgとすれば、68頭で約3.4tとなる。1日に1人が1kg食べたとすれば3400人日分、1週間食べ続けたとしても500人分、おそらく実際にはそれ以上に達する量であろう。よほど多くの甲問客が参加しないかぎり、到底1回の葬儀で食べきれない量ではない。⁽¹⁾その一方、この考えだと、下顎骨や頭骨の副葬のない墓のばあいは、葬式の時には、豚を屠殺しなかったことになる。

もう一つは、普段から、あるいはなんらかの祭りの時に豚を食べたあと、頭骨ないし下顎骨をのこしておき、それを死者がでた時に副葬したと考えることである。

後者の考えのほうが妥当だと思うが、出土した豚の下顎骨を調べ、1基の墓に副葬している豚の屠殺時季が特定か、それとも不特定かをはっきりさせて判断すべきであろう。なお、墓地から出土する豚骨と集落址から出土する豚骨の死亡年齢・時季との異同の検討も必要である。

3 アジアの民族資料

豚骨の懸架や副葬の習俗は、古代と現代の民族例にもある。それを瞥見してみよう。

a 大陸側の事例

古代肅慎族 『三国志晋書肅慎氏伝』によると、肅慎族は多くの豚を飼っており、肉を食べ、皮を着、毛を績いで布を作る。死者は、その日のうちに、ただちに野に葬る。木を組み合わせて小さな棺を作り、豚を殺してその上に積み、死者の糧とした。富者は数百、貧者でも数十という。なお、肅慎族は沿海州以北に居住していた挹婁人の後裔とされている。

清初の満人〔王 1981〕 『八旗通志』 典礼の条によると、春秋に杆を立て神を祭った後、馬の神を2日間祭り豚1頭を用いる。また、たそがれの夜、建物の西壁の外に、小豚をもって天を祭る。祟りを去らせるためという。

海南島黎族〔志 1958〕 人が亡くなると、裕福な親戚と友人は、牛または豚と酒をもって集まり葬儀をおこなう。忌中の家は当日、牛または豚を殺して、死者の霊魂を送る。埋葬する前に祭壇の上に、いくつかの料理やご飯をもった碗を載せ、その中間に豚または牛の下顎骨をもった碗をおき、村の年老いた司祭者が、ひそひそ声で「死者の魂は、ご飯を食べて家に帰れ」と言う。葬儀ののち、大勢で酒を飲み、肉を食べる。牛や豚を殺す習俗は、彼らの説明では、死者の生前の功勞を追慕するためであり、死者の死後の生活にも関心をよせるためである、という。遺体は墓の上で木棺に納めるが、そのあと、殺した牛あるいは豚の下顎骨すべてを他の副葬品とともに棺の上におくか、または棒を用いて墓の上に立てる。また、多くのばあいは墓の上的一对の牛の角をおく。

雲南省寧蒗彝族〔王 1981〕 既婚女性は新婦のために頭を櫛でけずる。これに先だって必ず豚の頭の肉を食べる。富める家では、松明祭に豚を殺した後、家の全員が囲炉裏の前に座り、1人が豚を手で持ち上げて、一家の頭の上で左方向に7回、右方向に9回まわし、一家の平安を祈り、百病を除く。彼らは豚を使って祖先の祭りをおこない、年の瀬にはまた、豚の頭を準備して主人に贈る。四川省の彝族は、官署に出て談判するとき、豚の頭の半分を送る。豚の幼獣は、悪いものを送るのと同じである。

雲南省西盟佤族〔李 1961: 371~372〕 よく豚を祭りの道具にする。狩猟で獲物を得た後、狩人は2日目に子豚を獸神に捧げる。時には、子供をはらんだ雌豚を殺し、子豚を取り出す。そして、敵人が通る道路上に埋め、攻撃が勝利におわるように祈る。人が亡くなった当日、村の巫師は鶏を殺し、豚を殺して霊魂にする（すなわち、霊魂を追いやる）。村人は山に行き木を切って棺を作る。2日目、巫は豚を殺して、霊魂を追いやる。そして、遺体を棺に納める。彼らは3日目に埋葬する。当日、再び鶏を殺して八卦を見、牛や豚を殺して親戚、友人、それに葬式を手伝ってくれた村人を泡酒で歓待する。葬式は、墓坑を土で埋めて終わるが、墓坑上面は平らにして墳丘を築くことはない。墓の上には、竹籠をおく。また、墓の中央には1本の棒を突きさし、棒の上には竹筒をくくりつけ、死者のための生米や水、酒を入れる。家の人は、葬式のために殺した牛または豚の頭を棒の上にくくりつけておく。また、死者のために、泡酒用の木筒（または陶

器の酒甕)を、墓の上においた竹籠の中に入れておく。凶死のばあい、老若男女を問わずすべて、必ず村の外の荒れた山の上に埋葬する。当日、巫は鶏を殺し、豚を殺して魂を追いやる。葬儀に使った肉は、巫と老人だけが食べ、残った肉は、ある時は墓の中に埋めてしまう。墓坑を埋めるときは平らにし、墓の上には何の標識も作らない。埋葬後、2日目は、村人は仕事をしない。主人の家は、6日間仕事をしない。一番最後の日に、巫に頼んで、殺した雌豚で魂を追いやり、一気に呪文を唱えて、葬儀は終わる。

雲南省永寧県納西族 [宋 1964 : 201] 昔は、彼らと黎族の習慣は同じで、豚の下顎骨を副葬していた。今日でも、日頃から、食べた後の豚の下顎骨を室内の壁に掛けておき、一般的には富の象徴としている。また、家族の平穏と危険の象徴としている。もし家族の誰かが死ぬと、ただちに豚の下顎骨をすべて村の外に投げ捨てる。

四川省木里県普米族 [宋ほか 1983 : 295] 豚の下顎骨を門の上に掛け、財富の象徴とする。

雲南省景頗族、四川省普米族・僜人都把族 [宋ほか 1983 : 294] 家畜の頭骨を家の軒下に掛ける。その量が多いのはその家が富んでいることを示し、自己の財力を他人にみせびらかす役割を果たしている。

雲南省瑶族 [宋ほか 1983 : 293~294]・[何 1986] 豚の頭骨または下顎骨を死者に副葬する習俗をもっている。生前に富んでいた死者は数多く副葬され、貧しかった死者のばあいは少なく、甚だしきは一つもない。

台湾ルカイ族 [佐々木 1980 : 232~233] 1972年に佐々木高明が台湾の民族調査をした時に、ルカイ族のアデル村の頭目の家の内部には、歴代の当主が狩で得た大量の猪の下顎骨を保存していた。それは、粘板岩の板石を積んだ壁の隙間に短い木棒2本を約2mおいて同じ高さに差し、その上に横棒を掛け、その棒に猪の下顎連合部をまたがらせて上下3段に並べたもので、その数は60個以上に達する(写真10)。猪の狩猟は、彼らの生業である畑作の豊かさを念じる儀礼の一部であるとともに、男たちの生きがいにかかわる活動であって、捕獲した猪の下顎骨は一種のトロフィーとして保存しているのだ、という。なお佐々木の教示によると、この習俗は現在では絶えているとのことである。

また、大塚裕之提示の写真では、台湾の民俗博物館に、復元家屋の天井に紐で竹の棒を吊り下げ、その棒に猪の下顎連合部を掛けている状態の展示がある。並行して吊り下げた棒は2本あり、計約10個の下顎骨の懸架がある。

アッサム・東部ナガ族 [大林 1955 : 85~86] 豚の頭骨を牛のそれとともに家屋の装飾に用い、墓前に並べる。ある酋長の家には豚の下顎骨を5、60個陳列しており、そのうちの若干は巨大な牙をもっていた。これらは、供宴のトロフィーとして掛けておくのだ、という。

アッサム・ルシャイ族 [大林 1955 : 85~86] 氏族または家族の守護霊に4年に1回の供儀をおこなうときは雌豚を殺して、その首を家の中心の柱に掛ける。また、村や家をしばしば見舞うという Huai に対する供儀では子豚を殺して、その頭骨を寝間の上に掛ける。

アッサム・クキ族, セマ=ナガ族, アンガミ=ナガ族 [大林 1955: 86] 酋長の葬儀に際して殺した雌牛と豚の頭骨を墓上の木の柱におく。

アッサム・ラケール族 [大林 1955: 86] 稲作儀礼で豚と鶏を主に供犠し、豚の頭骨を犠牲の場所で柱に掛ける。

b 日本の事例

沖縄県羽地村源河 [島袋 1929] 毎年旧12月8日に餓鬼祭をおこなう。祈禱が終ると、神人や字の委員は豚の頭骨を棒に立て、口には木片を含ませて、字の入口の道に海に向けて立て、その上から注連縄に餅の包み殻を十字にくくったものを結びつけて道の両端に張る。

沖縄県多良間島・国頭村辺戸・名護市安和 [島袋 1989: 26~28] 悪霊や疫病などが海や他所の土地から侵入してこないように、シマクサラーの行事をおこなう。辺戸ではハンカといい、古くは豚の頭骨を木の棒に突き差し、タチガチの方向に向けて立てていた(図6)。元々は牛を犠牲にしていたが、琉球王府から牛馬の屠殺禁止の示達があって豚に変わったとも、明治時代以降は祭祀の経費上の問題から豚や山羊などに変わったともいう。多良間島ではアキバライというが、かつてはシマクサラーは沖縄各地にあった。この行事はまた、アクフゲージ(悪霊を追い返す)と同時に、村の人々が集い、共食する機会として大きな意味をもっていた。

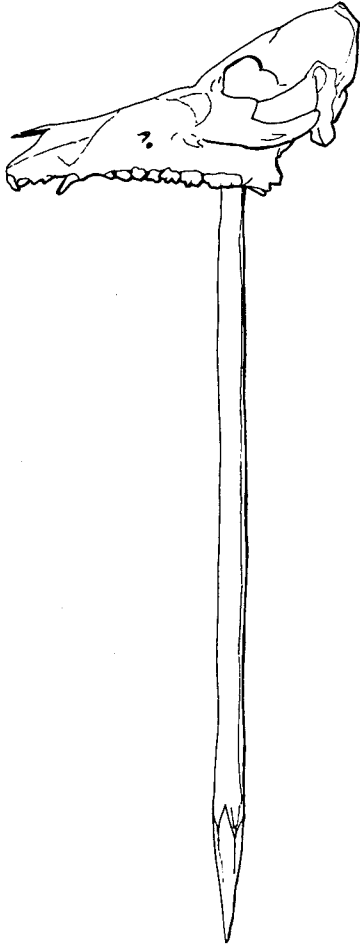


図6 国頭村辺戸のハンカ行事の豚の骨 [島袋 1989]

沖縄県宮古・伊良部島 [山下 1982: 236~238] 家を建てる時、棟上げをする時、豚を殺して、頭を玄関に、四つ足は家の角に埋め、血は壁に塗る。なにか不幸があったときにニガイ直す。家を新築して3年目にミーテガユイという3年祝いをする。このときに豚を殺して、親戚、知人、近隣の人を招待して盛大に祝う。

伊良部・仲地では、8月に豚を殺し、生肉・生骨をシメナワに結び、集落のはずれに高くつるす。少年たちが夜11時頃にカーガマに集まり、そこからドラを鳴らして魔物を村はずれまで追い払い、最後に仲地のカーガマで終る。佐良浜では、旧暦12月に厄神を払って豊作を迎えようとする。神人(女性)たち70人は当日は神装束をして夜ごもりをして、神を崇べる祈願をする。これが終ると神々を慰めるために踊りをする。翌日はオハズルの神と十二方の神々に祈願をして、池間のアガリノカアに行く。それまでに、区長

らによって豚が殺され生の骨がつるされたシメナワが集落の入口や境にはられている。神人たちはニガ竹の杖をふり、家の壁をたたきながら、悪いものを出せと呼びわりながら、全部落の各家庭をめぐり厄霊悪神を追い払いながら、鯖置井の崖まで行き、そこで追い落とす。一同はこの行事が終ると海岸で豚の料理を食べ、手足を清める。なお、佐良浜は宮古・池間島から分村してきた集落であって、池間島でもほとんど同じ儀礼をおこなっている。

鹿児島県奄美大島〔田畑 1976:199〕 猟師は、猪を初めて猟した初矢から猟のあるごとに、牙または下顎骨をとっておいて、千頭目はとった場所に埋めて塚をつくる。なお、田畑千秋の教示によると、自分が捕獲した猪の牙や下顎骨を保存するのは、猟の記念品であり、自慢の種にもなるという。

宮崎県銀鏡神社〔佐々木 1980:243〕 霜月の祭礼のときに、殺したばかりの猪の肉・毛のついた頭を神前に供えて、豊猟の祈願をおこなっている。

大分県大野郡野津町猪権現〔佐藤 1971〕 明治時代に2回にわたって周辺の小社を合祀した熊野神社の一部で、一般には、猪権現と呼ばれている。石灰岩の岩壁の中腹に間口10m、奥行12mほどの洞穴があり、奥に小祠2基がある。神社の本殿は崖下に建てられている。猟師は、狩猟期に入る前に神社に詣でて、神酒を献じて、豊猟を祈念する。狩猟期に入り、猪や鹿を捕獲すると、その肉を食べたあと、頭骨を体からはずして、洞穴のなかに奉納する。筆者は1986年に現地を見学したことがあるが、下顎骨を針金やツタでしばりつけた頭骨が、数百積み上げられていた。捕獲した日を骨に記入しており、完全に骨化したものを献じていることは確実である。

c アジアの民族例の特色

中国の少数民族は、死者儀礼の一環として豚を屠殺することをしばしばおこなっている。葬儀のさいに、豚を殺す理由としては、死者の食べ物として用意するという説明と、死霊を送るという説明がある。後者は、死霊や祟りに対する恐れにもとづいており、殺した豚の頭骨や下顎骨を棺の上においたり、棒に掛けたりしている。黎族やかつての納西族、アッサムのセマ＝ナガ族、アンガミ＝ナガ族などは、この事例である。下顎骨はまた、日頃豚を食べたあとと室内の壁に掛けて、家族の平安を守護するための魔除けの呪物として扱っている。魔除けとして使っているばあいは、家族に不幸があると、効力を喪失したものとみなし、捨ててしまう。

一方、納西族・普米族・景頗族やアッサムの東部ナガ族などのばあいは、豚の下顎骨は消費した富の象徴として見せびらかすのにも使っている。納西族の間で、豚の下顎骨の副葬から、豊かな富の象徴へ転化が認められるから、豚の下顎骨を富の象徴とする考えが、魔除けの二次的に変化した姿であることは明らかである。

沖縄では、豚の頭骨は悪霊を追い出すのに使い、棒に付けて立てたり、土中に埋めて辟邪の機能をもつ呪物として扱っている。中国の黎族や佤族とは、追い出す霊が悪霊であるという違いがあるものの、霊を送るという点では共通したあり方を示している。

台湾・奄美大島では、畑作の豊かさを念じる猪の狩猟を儀礼的におこない、そのあと、猪の下顎骨をのこしている。台湾のこの習俗が自生的なものであったかどうかは、まだわからない。古い時代に中国大陸から豚とともに、魔除けのために持ち込まれた儀礼が、その後、豚の飼育の衰退によって、猪を用いる儀礼に変容した可能性も考えられる。猪の記念に下顎骨をのこす奄美大島の例は、おそらく本来の儀礼が形骸化したものなのであろう。宮崎、大分県では、猪の頭骨を神に供え豊猟に対する祈願または感謝のしるしとしている。

こうしてみると、豚は、死霊や悪霊に対抗し、それらを撃退しうる特別な威力をもつ家畜であった。なかでも豚の下顎骨や頭骨が、威力の根源であったことが、民族例でもわかるのである。

4 豚の下顎骨懸架の意味

弥生時代例の系譜 豚の下顎骨穿孔例は、大陸側では山東省三里河遺跡から1例、咸鏡北道虎谷遺跡から2例出土しているだけである。しかし、豚の頭骨や下顎骨の副葬は、先に列挙したのももおそらくこれまでの報告例のすべてではない。それほどまでに、かつては普遍的な習俗であったといつてよい。その習俗は、黄河から長江の範囲で成立し、時期がくだるにつれてその範囲を周辺部に移しながら、仰韶・大汶口・馬家浜文化期から現代の少数民族までつづいた、長い歴史をもっている(図7)。

日本では豚の下顎骨の穿孔例、木棒にかけた例は、弥生時代早期後半から後期後半まで知られている。分布は長崎、福岡、大分から愛知県までひろがっているほか、沖縄県に貝塚時代中期の孤例が知られている。縄文時代の例ははっきりせず、⁽²⁾佐賀県菜畑遺跡で夜臼Ⅱ・板付Ⅰ式共伴層で最古例が検出されているから、弥生早期に北部九州で始まり、前期のうちに東海地方西部まで広がった遠賀川式土器圏の特徴的な習俗であることはほぼ確かである。これらと中国新石器時代の⁽²⁾大汶口～龍山文化期の例との間には約2500年の開きがある。また、中国の現代少数民族例との間には約2000kmの大きな距りがある。しかし、弥生時代の例は中国起源と推定される豚を含んでいるので、両者がまったく無関係であるとは思えない。北部九州の弥生早期例にもっとも近い例は、虎谷遺跡例である。時期は紀元前1世紀ごろで、遺跡の位置は豆満江下流で沿海州に近く、肅慎族と関係が深いと思われる。したがって浜郷遺跡で確認された弥生時代の例も、五島列島で独自に発生したと考えるよりも、彼地からの影響と考えるほうが自然であろう。しかしながら、弥生時代併行期の例は、中国や朝鮮半島では実際には知られていない。ただし、韓国の南端の勒島で、遺体の上に鹿と猪の骨を散布した例が発見されている。これを島嶼部における変形ととらえるならば、九州にもっとも近い例となり、さらに中国と同じく豚の下顎骨の懸架や副葬を示す資料が近い将来、朝鮮半島で発掘されることを期待することもできよう。

中国の西南部に居住する少数民族の間に存在しているこの習俗が、新石器時代以来連続とつづいていた可能性はつよい。中原地域では龍山文化中期まではさかんであるが、晩期になると衰退

に日本列島に伝来し、また中国少数民族には今日にいたるまで残存するという現象〔春成 1987 : 83~86〕と、基本的に同じであるといつてよい。

唐津市菜畑遺跡の夜臼・板付Ⅰ式の層から最古例が発見されている事実、そして老岐の原ノ辻遺跡からも出土している事実は、この習俗の伝来コースを示唆している。それに対して、沖縄県渡喜仁浜原貝塚出土の猪の下顎骨穿孔例は、「貝塚時代中期」に属するというから、縄文時代晩期に併行する。したがって、九州本島の例よりもさかのぼる。沖縄島と北部九州との間をつなぐ資料を欠いているので、現状では、両者の間には直接的な関係は認めがたい。しかし、その一方、中国新石器時代では穿孔例は稀である。判断は難しいが、台湾の民族例が猪であることも考慮すると、中国南部から台湾に伝播して豚から猪の呪術ないし儀礼へと変転し、それが沖縄まで北上してきたものであろうか。

日本の研究者の意見 豚の下顎骨の懸架や副葬は、いかなる意味をもっていたのであろうか。

奈良県唐古遺跡の1937年発掘資料の鑑定にあたった直良信夫は、「孔の部分に細紐を通して棒に結び付け、これを神前に供え」る習俗で、「狩猟に対する儀礼の表現とみられようが、実際には、農作地を荒す害獣への防除と鎮魂を意味しての祭礼」と考えた〔直良 1956 : 109〕。戦前に、長崎県原ノ辻遺跡からの発見例を報告した鴛田忠正は、「北海道アイヌがその家の周囲に熊祭りの犠牲となった熊の頭骨を、先端二又の棒先きに通して樹て、豊猟を祈念する呪具とする如き呪術が当時の島民の間に行われており、穿孔部は野猪の首を棒先きに通す為穿たれたものと解したい」と述べた〔鴛田 1944〕。この資料をその後、再報告した仙波輝彦は、「二又になった木の先に付けたか、縄を通したか、要するに家や或いは部落の入口に飾って、一種の Trophy として、或いはその野獣のもつ霊力の利用による何らかの呪術の材料、又は将来の多猟への呪法として、利用したものには違いあるまい」と推定した〔仙波 1960 : 207〕。

それに対して、菜畑例を報告した渡辺誠は、「水稻栽培に伴って伝来した風習か、あるいはこれによって縄文文化の伝統が一部変質したことによるものか、このいずれかの場合である可能性が強い」といい、その目的については「狩猟祭祀よりも農耕祭祀に祀られたものと推定」した〔渡辺 1982 : 401~402〕。同じく土肥孝も、「在来の縄文時代の狩猟儀礼の中からは生起しえない動物に対する扱い方」であって、「この淵源は、日本国外の地に求めなければならない。すなわち、この儀礼は、稲作栽培の伝播と前後して流入した農耕儀礼と推定できる」という〔土肥 1984 : 157〕。

西本豊弘は、豚の下顎骨の懸架について、「その儀礼は農耕儀礼と思われる」といい、それを根拠にして、「ブタは単に食用としてだけではなく、農耕儀礼に必要なもの」として「日本に持ち込まれた」と考えた〔西本 1991 : 186〕。その後、愛知県朝日遺跡の豚の死亡時季を、第3後臼歯の萌出状態にもとづいて「生後24~28カ月前後、すなわち5月から10月頃」(猪は6月頃生まれる)と推定し、「たとえば、春の稲の種を蒔く時とか、秋に収穫した時などの儀礼にブタが用いられたのではなからうか」として、豚が農耕儀礼に用いられたことを主張している〔西本 1992〕。

農耕儀礼とは、「農業の生産行程に応じ、その開始から終了に至るまでの折目折目に営まれる

「祭事儀礼」のことをいう〔竹田 1972 : 552〕。弥生時代は農耕社会であるからといっても、弥生時代におこなわれた儀礼は、農耕儀礼だけではない。豚が、かりに犠牲あるいは儀礼食の対象となることがあったとしても、豚の屠殺が農耕儀礼だけだったとは限らない。抜歯習俗の存在から成人儀礼や婚姻儀礼、埋葬習俗から死者儀礼なども想定できる。いずれも重要な儀礼であることはいうまでもない。あるいは、かりに農耕儀礼のさいに豚を殺したとしても、下顎骨の穿孔例も農耕儀礼に関係がある、とはいえない。いつ、いかなる場で、いかなる効果を期待しての行為であったのかを明示しないかぎり、豚の下顎骨穿孔＝農耕儀礼説は成立するものではない。

その一方、長崎県浜郷遺跡で墓に「猪」の下顎骨が副葬されていた例について、甲元眞之は、それが女性だけであった事実に着目して、これらの猪は野生状態ではなく女性によって飼育されていたから女性の墓にのみ伴うのだと考えている〔甲元 1982 : 83〕。確かに、近世の沖縄では、豚を飼育するのは女性の仕事とされていた〔島袋 1989 : 37~39〕。しかし、それだけの理由で「猪」の下顎骨が女性にのみ伴うものであろうか。浜郷遺跡では1カ月の乳児に副葬した例があるし、中国では豚の骨は男女ともその墓に副葬されている。浜郷遺跡の「猪」はその後、豚の可能性がよくなってきたが、この例を飼育者の性との関連だけで説明することは検討を要する。

日本の大部分の研究者の見解は、以上みてきたように、中国での出土例や民族例についての知識を欠いたままの推定にとどまっている。

そうしたなかにあつて、加藤晋平だけは中国・ロシアの文献を渉猟して、縄文晩期の山梨県金生遺跡の一土坑から出土した120体分以上の豚の下顎骨のうち100体以上が6カ月以下の幼獣であったこと、群馬県桐生市千網谷戸遺跡の住居址内から出土した猪の焼骨が成獣2、亜成獣4、幼獣19頭であったことから、「縄文晩期におけるイノシシの過殺の例は、粛慎の例にきわめて類似している」と指摘し、沿アムール・沿海州・朝鮮半島北部・中国東北地区との間に、「何らかの関連性を考えねばならない」とした。また、海南島黎族が豚また牛の下顎骨を木棒に掛けて墓の上におく習俗が、「きわめて弥生の例に類似している」ことから、弥生時代に中国から「新しい概念」が流入したことを示唆している〔加藤 1982 : 52〕。豚の飼育やその下顎骨懸架の習俗が中国大陸起源であるとすれば、当然、大陸側の事情を探索する必要があるのである。

私有財産の象徴説 この習俗に関する中国の研究者の意見は、二つに分かれる。一つは、豚すなわち家畜を個人の私有財産とみなし、副葬した豚の頭骨または下顎骨の数の差異は各個別家族の私有する家畜の多寡を反映していると考えられる伝統的な説である。その大きな根拠は、大汶口遺跡で、早期には豚の骨を副葬している墓が1/3の割合で存在するのに対して、中期になると1/4に減少する事実を、特定の人々に財産が集中していく過程と理解することである〔山東省博物館 1980 : 26〕。

何徳亮の意見も同様であつて、新石器時代の特定の墓に、豚の頭骨や下顎骨が集中していることは、私有財産が出現していることの証拠であるとみなす。中国西南地区の少数民族には、いまなお牛や豚を殺した数量で、財産の多いことを示すという習慣がのこっている。新石器時代の墓

に豚の下顎骨が最多33個副葬されているが、それは死者の実生活の需要をはるかに超えている。そこで、豚の骨の副葬は、被葬者の社会的地位の高低と私有財産の多寡を表示すると主張する〔何 1986〕。

大汶口文化後期の墓は大形、中形、小形に分類され、それは社会的な地位の反映であると一般に理解されている。しかし、大汶口遺跡では大形の墓であるM9号墓やM98号墓には豚の骨の副葬はなく、最大規模のM10号墓では2個にすぎなかった。それに対して、小形のM58号墓には4個もあった。また、三里河遺跡でも、西夏侯遺跡でも、豚の下顎骨を副葬した墓とそうでない墓との間には、他の副葬品では差異を見いだせない。私有財産の多寡の象徴では説明ができないのである。

霊の守護説　　そこでもう一つの意見が提出される。豚の骨の副葬はむしろ、一種の「原始的宗教観念」の反映であろうとする王仁湘の説である〔王 1981〕。

王によると、「原始崇拜」の対象の多くは、人間自身が恐怖と畏怖をいだく神格化した自然の力である。豚はこのような神格化を経てのち、敬仰の対象となったものである。『淮南子』・『史記』・『説文』・『易経』・『周礼』など古い文献によれば、豚はかつては恐怖の象徴として存在した。先秦時代のいわゆる「豕禍」は、まさに豚を恐れおどろいていることの反映である。『淮南子』や『説文』などによると、豚を土に封じ、蛇の乾肉をつくと、人に危害がおよぶ、という。それらの動物はしばしばまったく遠慮なく畑に侵入して収穫物を人と分ける。原始農耕民族が、彼らを特別に畏敬する理由はここにある。人々は、彼らの威風が「邪・祟」の脅威に対抗できると考えた。ここにおいて、猪は神格化され、生者と死者の「霊を護衛」するものとなった。『易経』に述べる「豮豕之牙吉」、『説文』にいう「豮豕也」は、去勢した豚は吉すなわち善であり、凶を避け祟りを駆逐するという意味である。「牙」は豚の下顎と頭骨のことであって、人々はそれが吉祥を象徴するに値するとみなした。『周礼』には、茅・茜・葦・豚の首・紫色の葦の穂は、巫覡が祟りを取り除くための霊物である、としている。このように、豚の頭骨や下顎骨の副葬は、確実に死者の霊魂に対する一種の護衛である。中国の少数民族が、誰か死者がでると豚の下顎骨を村の外に廃棄する行為は、財富の標示という解釈では説明がつかない。誰かが亡くなると、古くからもっていた豚の骨に疑いの目を向け、安危にご利益がなかったと思ひ込み、惜しげもなく捨て去ったと考えるべきであろう。邳県劉林遺跡の溝の中に堆積していた豚の下顎骨〔南京博物院 1965: 11~12〕は、このような推測をさせる。

新石器時代の墓における豚の頭骨や下顎骨の数の多寡は、次の三つのことと関連する。一は、身分・地位・経験、二は、葬儀の規模、三は、埋葬方式である。一は、被葬者が生前に宗教祭典後に保存していた骨を副葬するので、死者の生前に遭遇した経歴と関わりがある。したがって、死者自身の系統が巫師の流れをくんでいたりすると、この種の巫術の道具は比較的多くなる。二は、原始社会の葬儀は盛大で集団的に挙行されるので、死者が生前に社会の公職にあたり、近親の血縁関係者がかなり多いと、弔いを述べて慰める人も多くなるので、葬送のさいの犠牲もた

くさん必要となり、その結果、豚の下顎骨の量は多くなる。三は、豚の骨は死者と同一平面上にあり、埋土中にあったり、墓坑付近に別に掘った小坑の中に入れたり、墓の上に放置したりするなど、種々の原因があるので、出土した豚の骨の数の多寡は何ら怪しむにたらない。

このように、古文献、民族例を援用しての王の解釈は、豚が恐怖の対象となった理由の説明を除けば、もっとも説得力をもっているといえよう。

豚の象徴性 王仁湘は、豚の頭骨や下顎骨の副葬の意味を、豚が神格化された恐怖の象徴であるから、豚を殺して靈魂を追い払い死者を護衛すると説明している。いうまでもなく、死者の靈を護衛するのは、生者を護衛するためである。ではなぜ豚は靈魂を追いやる動物とみなされたのであろうか。

猪・豚の頭部のもっとも大きな特徴は、長い牙が上・下顎に生えて半円形に露出し、その先端が鋭く尖っていることであろう。猪・豚の行動の特徴の一つは、猪突猛進の語にもあるように、猛然と突進することである。しかも、時としては人を殺したり傷を負わせたりする獐猛性を併せもっている。人の靈魂すなわち鬼は角のほか口の上下に牙をもつ人間に擬せられてしまったが、そのモデルの一つは立派な牙に加えて黒い剛毛を生やし、もの凄い形相をした猪・豚あるいはその頭骨であったとみることもできる。死者の靈魂が生者に寄りつくと、新たな死者がでる。したがって、死者の靈魂が生者の世界にとどまることは、忌み嫌われるべきことである。豚を殺して靈魂を追いやるというのは、先に亡くなった人の靈魂を、その直後に殺した豚の靈魂が勢いよく追いかけて、生者の世界から死者の世界すなわち他界に追い払うという意味なのではないだろうか。すなわち、豚は死靈に十分対抗できる、それほどまでに相手に恐怖感を与える容貌をもっていると考えられたのである。

時代はくだるけれども、前漢代の洛陽卜千秋墓の奥室の後壁最上部に、室内を睥睨するかのよ

うに、豚頭の怪人が大きく描かれている(図8)。これは、まさに邪悪な靈の恐怖から死者を護っている辟邪の表現であって、豚が邪靈を撃退しうることを示している[孫 1977]。曾布川寛は、この怪獣が「邪鬼を追い払う」ことができるのは、その「醜悪なさま」が「邪鬼を駭かすに十分」であるからだ、と説明している[曾布川 1981: 139

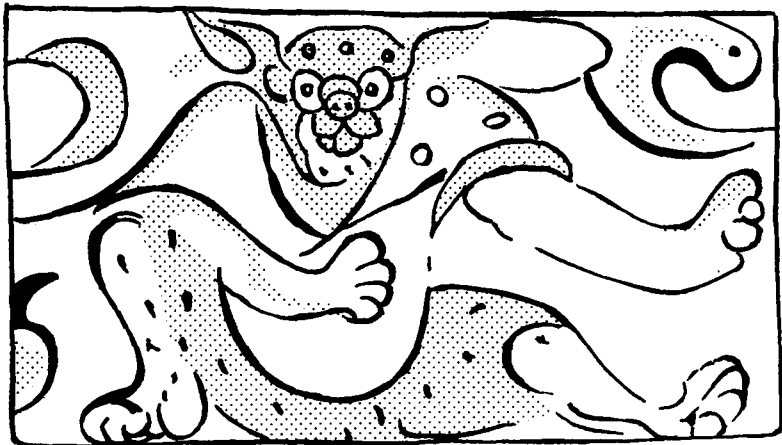


図8 中国前漢の洛陽卜千秋墓奥室後壁に描かれた豚頭の怪人
[陳ほか 1977写真を図化]

～144]。しかし、それだけではないようにみえる。

大分県下郡桑苗遺跡出土の豚の頭骨には、脳髓を摘出するための破壊から免れたきわめて保存のよい例が4点ある。これは、縄文時代にはまったくみられない特徴である。遺跡から頭骨を特別に扱ったような出土状態を示す例はまだ報告されていない。しかし、島根県西川津遺跡でも、頭骨1個が川に投棄されていた例と合わせると、日本でも豚の頭骨と下顎骨をセットにして用いるばあいもあったことを予想してよいだろう。

白川静によると、殷の甲骨文に、頭骨に刻字し、その字跡に朱を填めているものがあり、その刻文によって、異族の方伯首長を俘獲したときに頭顱を白骨化して、その呪霊を守護霊として用いたことがわかる、という〔白川 1984: 687～688〕。頭骨に悪霊追放の効果があるというのである。しかし、このばあいは敵の首長の頭骨であったことが、呪霊の根源にあったともとれる。白骨というだけでは、辟邪の威力をもつことは難しかったのではないだろうか。

豚の下顎骨の機能に関して、奈良県唐古・鍵遺跡できわめて示唆的な資料が出土している〔藤田 1989: 8〕。それは、SD—2202 から出土した穿孔した豚の下顎骨に木製牙を差し込んだものである。時期は、弥生前期後半から中期初頭に属する。これは、牙に重要な意味があり、それを失ったあとは補充しなければならなかったことを示しているのであろう。長い牙が下顎骨に植わっている状態は、V字形の物体に鉤がついている様に喩えることができる。そこに何か意味はないであろうか。しかし、中国新石器時代の墓に副葬されている動物の下顎骨のなかに、まれに四不像鹿や牛のものがある。牙がなくともその役割をはたすことはできたと考えるほかない。中国の少数民族のばあいも、牛の骨がしばしば豚の骨の代わりをつとめている。なぜ、鹿や牛でもその用を足すことができたのであろうか。

鉤の呪力 かつて金関丈夫は、鉤形の呪物や文様について、身体から抜け出そうとする魂を引っかけてつなぎとめる機能をもつと同時に、「外部からこちらへ侵入する邪霊を引きとめる効用もあった」と説き、弥生時代の鉤をもつ巴形銅器や銅釧もその例として挙げた〔金関 1964〕。それを承けて、坪井清足は、奈良県平城宮址出土の隼人楯の逆S字形の渦文も辟邪の機能をもつと解釈した〔坪井 1968: 302～304〕。

また、三島格は、南島一帯に分布する、スイジガイの殻を家の入口正面の軒あるいは石垣などに掛け、または家の四隅に吊しておき魔除けとするほか、豚小屋などにも掛けて多産のマジックとして用いているマブール（守る）と呼ばれる習俗〔大山ほか 1933: 59～60〕に注目した。そして、ホネガイ、クモガイを豚小屋などに吊し、魔除けとする例もあることを追加し、スイジガイなどもつ「鋭利・異形の鉤状の突起がもつ呪力に、加えるに女性器に似た開口部がもつとされる呪力」が辟邪の機能をもっていることを強調し、南島の住居址の入口部や隅部からスイジガイの殻が出土することを期待している〔三島 1973: 157～161〕。また、これと関連して、沖縄でシャコガイ（アジケー）の殻を、門の上や道路のつき当りの塀の上などに半開きにして固定し、やはり辟邪とするムンスキムンの習俗があることを報告している〔三島 1976〕。

その後、甲元眞之は、中国新石器時代の墓に副葬してある獐牙（キバノロの牙）または豚の牙や切歯を鹿の角や麋骨あるいは木の柄に装着した器具を、本来は魂を縛りとめるための首飾りと推定し、「死者の手にこれを握らせることも、肉体的な死の後、しばらくあたりをさまよう魂を、この獐牙器や獐牙で縛りとめて、生き返るようにとの願いの所産」であると考察している〔甲元 1980 : 583〕。私もまた、縄文・弥生時代にみられる鉤つきの短剣や腰飾りを、出身集団の祖先または土地と特別な霊の力によって「いわば血縁的な結びつきをもっている」ことを示す意味で身に着けたと解釈し、このような思想が縄文時代中期までさかのぼることを論じた〔春成 1985 : 52 ~54〕。

このように、鉤のもつ拘禁と辟邪の呪力の重要性に思いをめぐらしてみると、猪・豚と鹿の左右の下顎骨が連合している状態が、V字形の鉤形をしていることに気づく。しかも、豚のばあいには屈曲した牙が突き出していることによって、その形状がスイジガイによく似ていることに注意したい。豚の下顎骨の形状から連想してスイジガイを呪具として使うようになったと考える必要はないが、このような鉤を有する形状の自然物は辟邪の呪具とみなされることが多かったのではないだろうか。中国新石器時代に、時としては豚の下顎骨の代わりに、牛・鹿・羊の下顎骨を用いる理由も、ここに求められよう。

その一方、大汶口遺跡において、大形墓でありながら、豚の頭骨の副葬がないM9号墓、M98号墓には、ともに獐牙の副葬が認められる。他の豚の骨を副葬していない墓でも獐牙または豚牙を副葬しており、牙のみの副葬が52例、牙と頭骨などの副葬が38例に対して、頭骨のみの副葬は7例にとどまる。すなわち、ここでは獐牙器などが豚の頭骨よりも普遍性をもつ呪具として存在する。獐牙器などの副葬は、仰韶文化半坡期前半の龍崗寺遺跡ですでに3例みられるが、大汶口文化の早期前半から晩期までの間に最盛期を迎え、他では崧沢文化中期に散見するにすぎない。それに対して、豚の下顎骨を呪物として使うのは、大汶口文化早期からであるが、墓への副葬は早期後半になってからのことである。したがって、当初は副葬するのは獐牙器や獐牙であったものが、後になると、豚の下顎骨も合わせ副葬するようになったと考えることができよう。その理由としては、獐牙2本をソケットに装着した獐牙器(図9)が、豚の牙付きの下顎骨と同じ形状をしていることもあったのであろう。

ところで、大汶口文化早期に属する劉林遺跡では、獐牙の副葬例は80基存在するが、豚の頭骨や下顎骨の副葬例は皆無であった。しかし、豚の下顎骨の濠への投棄例が認められた。そして、同早期後半の大墩子遺跡では、獐牙・豚牙の副葬が35基の墓に認められる一方、豚の副葬が8基の墓に現れているから、江蘇省では豚の骨を墓に副葬するのは、大汶口文化早期後半からということになる。それに対して、山東省の野店遺跡では、大汶口文化早期後半に豚の下顎骨や頭骨の副葬が2基、同中期に4基にあるが、獐牙の副葬はなく、同晩期になると、豚の骨の副葬が1基に対して獐牙の副葬は14基にみられる。この時期には、一つの文化のなかに、豚の下顎骨を主に副葬する集団と、獐牙を主に副葬する集団の並存を想定してよいのかもしれない。おそらく、キ

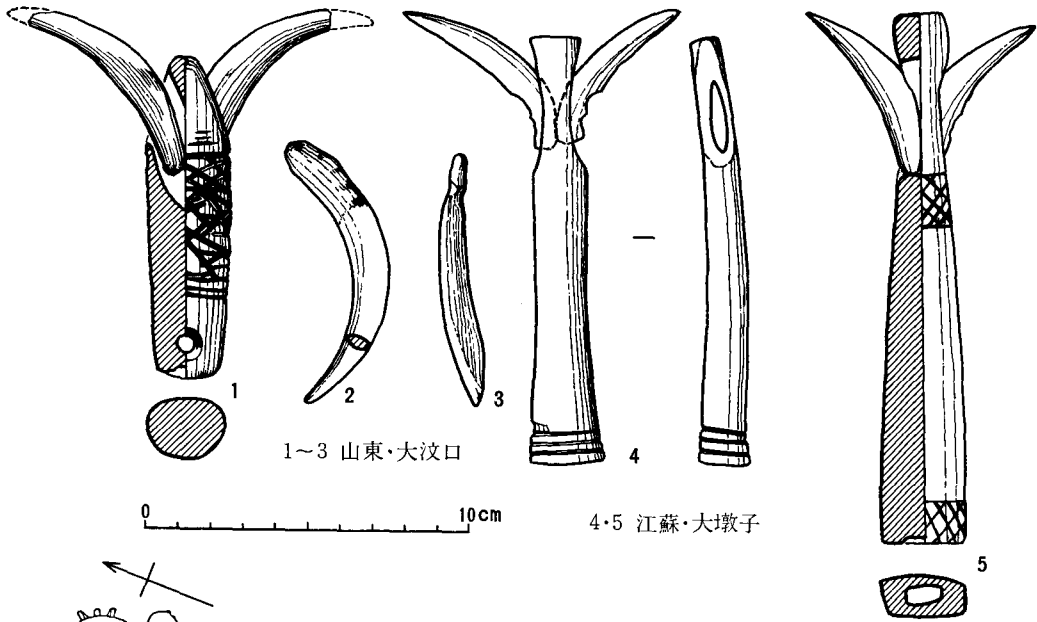


図9 獠牙器と豚の牙・切歯 [山東省文物管理处ほか編 1974]・
[南京博物院 1964・1965]

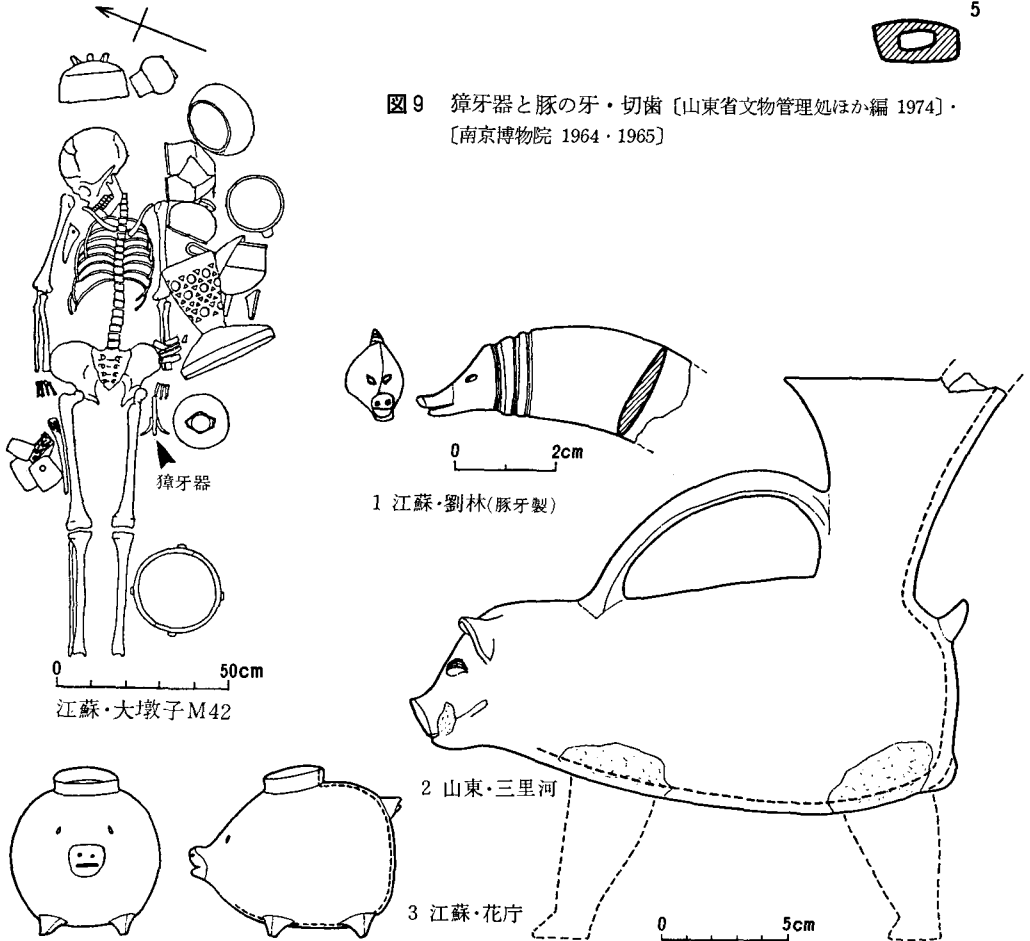


図10 大汶口文化の豚の造形品 [南京博物院 1965・1990]・[中国社会科学院考古研究所編 1988]

パノロなどの屈曲した牙と豚の頭骨・下顎骨は、同じ機能をそなえており、そのために互換性をもつ呪具とする関係にもあったのであろう。

弥生時代の豚の下顎骨の機能 弥生遺跡出土の豚の下顎骨の出土状況からそこに至るまでの過程を復元すると、次の二つのばあいを想定しうる。

豚の屠殺→下顎骨懸架→下顎骨廃棄（菜畑，唐古・鍵遺跡など）

豚の屠殺→下顎骨懸架→下顎骨副葬（浜郷遺跡）

棒を使って掛けた状態で出土した菜畑例や唐古・鍵例は、いかにも集落内のどこかに掛けてあった豚の下顎骨を、なんらかの理由で別の場所に投棄したことを推定させる。豚は、殺したあとおそらく一部を祖霊に捧げたあと、集団構成員が共に食べる食物である。弥生時代の豚の下顎骨が住居跡などの遺構に伴った例はまだ知られていないが、肉を食べた後の牙の付いた下顎骨は住居の壁または住居の入口、あるいは集落の入口に棒や紐を使って掛けてあって、もっぱら住居内または集落内に侵入する死霊や邪霊を撃退する辟邪の役割をはたしていたのではないだろうか。大阪府池上遺跡や唐古・鍵遺跡で牙を人為的に抜去している例が少なからず存在することが報告されている。拔牙のために下顎骨の一部を破壊している例があることから判断すれば、その多くは廃棄する直前の行為であって、抜いた牙は、装身具に加工しておそらく辟邪の呪具として再利用したのであろう。

このように観察するならば、長崎県浜郷遺跡の豚下顎骨の副葬も、辟邪の効力を失ってしまった下顎骨を墓の中に廃棄したのではなく、死者によりつこうとする悪霊を、むしろ鉤の威力によって撃退しようとしたのであろう。しかし、ここでは男性の墓には1基の副葬例もない。その理由を説明することは容易ではないが、弥生時代の西九州は、貝輪など装身具の着装が縄文時代以来の女性主体の慣習を守っていることから判断すると、妻方居住婚が支配的で女性が優位にたっていた社会である〔春成 1984:31~32〕。浜郷遺跡の副葬例については、これらの副葬された豚の下顎骨は、もともとその被葬者である女性とかかわりをもつ辟邪の呪具とみなされていたのではないだろうか。2号壺棺の乳児のばあいは、その母親が管理していた下顎骨を副葬したと考えることはできないだろうか。

豚の下顎骨を辟邪の呪具とする習俗は、奈良県唐古・鍵遺跡では後期前半、大阪府亀井遺跡では後期後半の例が知られている。しかし、古墳時代の動物遺体を出土した遺跡が少ないという問題はあるけれども、それ以降はその痕跡をたどることができない。『魏志倭人伝』には、「始めて死すや停喪まで十余日、当時肉を食わず、喪主は哭泣し他人は就きて歌舞・飲酒す」との記述がある。豚の屠殺と下顎骨の懸架に関する記述がないのは、そのままうけとってよければ、弥生後期の終わりごろには、葬儀のさいに豚を殺したり、その下顎骨をどこかに懸けるような習俗はほとんど絶えてしまっているようにみえる。しかし、中国の少数民族の間ではその後もこの習俗は永く保存され、一部の民族では、豚の骨の懸架は、辟邪の呪具から、その骨の数によって富や豊かさを示すシンボルへと転じたのであった。

謝 辞

小稿を準備するために、内田律雄(島根県埋蔵文化財調査センター)・大塚裕之(鹿児島大学理学部)・木村英明(札幌大学教養部)・甲元眞之(熊本大学文学部)・佐々木高明(国立民族学博物館)・申敬澈(韓国慶星大学校)・田畑千秋(奄美博物館)・寺沢薫(奈良県立橿原考古学研究所)・富岡直人(東北大学文学部)・西谷大(国立歴史民俗博物館)・西本豊弘(同前)・畑暢子(大阪文化財センター)・林謙作(北海道大学文学部)・藤田和尊(御所市教育委員会)・藤田三郎(田原本町教育委員会)・松井章(奈良国立文化財研究所)・村上恭通(名古屋大学文学部)の諸氏からは教示をうけ、また木村・甲元・西谷の三氏にはロシア語・朝鮮語・中国語文献を読むうえで多大な援助を得た。さらに、佐々木高明・中島直幸(唐津市教育委員会)・西本豊弘の諸氏と橿原考古学研究所・島根県教育委員会・田原本町教育委員会からは掲載写真の提供にあずかった。記して謝意を表する次第である。

(1992. 10. 30)

註

(1) 死者儀礼として多数の動物犠牲を伴うインドネシアのスラウェシ島のトラジャの例では、過去の死者儀礼(祭宴)の記念として水牛の角を慣習家屋前面の柱にゆわえている。その意味は、富と威信の誇示であるという。トラジャでは、死者儀礼として水牛と豚を犠牲にするが、このばあいは墓まではその証拠(骨)はもちこまれないことになる。トラジャの死者儀礼で供儀される動物の数を、参考までに掲げておく。数字の左は供儀の数、右は贈与の数である。贈与された豚やヤシ酒はその場で消費される〔内堀・山下 1986: 256〕というが、受贈者側も供出するとすれば、豚の消費量はもっと多くなる。

	水牛(頭)	豚(頭)	ヤシ酒(壺)	弔問客
ネ・レバン	64/75			157組5,000人以上
インド・サッカ	18/18	(105)/105	(14)/14	119組

(2) ただし、宮城県宮城郡松島町磯崎西ノ浜貝塚では、1967年の緊急調査時に、G 2 区の貝層下の 1 × 2 m の範囲から猪の下顎骨25個が、「完全な姿で、しかも歯の部分を下方に伏せて、東方を向け、同一平面上より出土」している〔加藤 1968: 13・22〕。時期は、縄文後期初めの堀之内式併行期であって、この時期に多い猪形土製品とともに注意すべき資料である。

文 献

〔日本文〕

- 安部みき子 1980「恩智遺跡出土の獣骨」『恩智遺跡Ⅰ』221~225, pl. 159~165, 瓜生堂遺跡調査会。
- 井上貴央 1988「西川津遺跡弥生中期相当層から検出された動物遺存体について」『西川津遺跡発掘調査報告書』Ⅳ: 261~274, 島根県教育委員会。
- 井上秀雄他訳注 1974『東アジア民族史』1, 正史東夷伝, 東洋文庫264, 平凡社。
- 内田律雄編 1989『西川津遺跡発掘調査報告書』Ⅴ(海崎地区3), 島根県教育委員会。
- 内堀基光・山下晋司 1986『死の人類学』弘文堂。
- 大林太良 1955「東南アジアに於ける豚飼養の文化史的地位」『東洋文化研究所紀要』7: 37~146。
- 大山 柏・小原一夫 1933「奄美大島群島徳之島貝塚出土遺物(第1回)」『史前学雑誌』5-5: 57~64, 図版8。
- 小田富士雄 1970「五島列島の弥生文化」『人類学考古学研究報告』2: 1~50, 長崎大学医学部解剖学教室。
- 加藤 孝 1968「埋蔵文化財第2次緊急発掘調査概報一西の浜貝塚一」『宮城県文化財調査報告書』16。
- 加藤晋平 1982「縄文・弥生文化におけるイノシシ飼養一その系譜について一」『日本と東アジアの文化交流の基礎的研究』昭和56年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書: 39~52。
- 1988「シベリアの先史農耕と日本への影響」(佐々木高明・松山利夫編)『畑作文化の誕生』215~235, 日本放送出版協会。
- 金関丈夫 1964「たましいの色一まが玉の起り」続・発掘から推理する5・6, 『朝日新聞』西部版, 2月5日・16日付夕刊(1975『発掘から推理する』朝日選書40, 34~40, 朝日新聞社)。
- 金子浩昌・牛沢百合子 1980「池上遺跡出土の動物遺存体」『池上・四ツ池遺跡』6, 自然遺物編: 9~32, 大阪文化財センター。

- 木村幾多郎 1982「北部九州の弥生時代貝塚」『森貞次郎博士古稀記念 古文化論集』上：389～411。
- 久野邦雄・寺沢 薫 1978『昭和52年度唐古・鍵遺跡発掘調査概報』田原本町教育委員会。
- 甲元眞之 1978「東中国海周辺の初期農耕文化」『東アジアの古代文化』14：56～71。
- 1980「古代中国動物随葬考」『日本民族文化とその周辺』考古篇：565～592，新日本教育図書。
- 1982「弥生時代動物随葬の一樣相」『歴史公論』8—9：79～84。
- 1992「長江と黄河—中国初期農耕文化の比較研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』40：1～120。
- 後藤重巳 1971「イノシシと祭祀」『考古学ジャーナル』52：16～18。
- 佐々木高明 1985「狩り・死と生のおりなす非日常の世界」(石川栄吉・岩田慶治・佐々木高明編)『生と死の人類学』227～251，講談社。
- 佐原 眞 1989～90「古代の食三項」『VESTA』1～4，味の素 食の文化センター。
- 島袋源七 1929『山原の土俗』郷土研究社。
- 島袋正敏 1989『沖縄の豚と山羊』ひるぎ社。
- 白井邦彦 1967『日本の狩猟獣』林野弘済会。
- 白川 静 1984『字統』平凡社。
- 仙波輝彦 1960「長崎県杵岐島中期及び後期弥生式時代遺跡出土哺乳動物骨の研究」『人類学研究』7—1・2：190～233，Pl. I～VII。
- 曾布川 寛 1981『崑崙山への昇仙』中公新書635，中央公論社。
- 高橋信武編 1992『下郡桑苗遺跡Ⅱ』大分県文化財調査報告書，89。
- 竹田 旦 1972「農耕儀礼」(大塚民俗学会編)『日本民俗事典』552，弘文堂。
- 田畑英勝 1976『奄美の民俗』法政大学出版局。
- 坪井清足 1968「隼人楯」(金関丈夫博士古稀記念委員会編)『日本民族と南方文化』297～305，平凡社。
- 寺沢 薫編 1979『昭和53年度唐古・鍵遺跡第4・5次発掘調査概報』田原本町教育委員会。
- 1981『昭和55年度唐古・鍵遺跡第10・11次発掘調査概報』田原本町教育委員会。
- 土肥 孝 1983「“いけにえ”の起源をさぐる」『アニマ』11—3：22～27。
- 1984「狩猟儀礼から農耕儀礼へ」(堅田 直編)『縄文から弥生へ』147～157，帝塚山考古学研究所。
- 渡喜仁浜原貝塚調査団編 1977『渡喜仁浜原貝塚』今帰仁村教育委員会。
- 鴫田忠正 1944「長崎県杵岐郡田河村原ノ辻遺跡の研究」(柴田実編)『日本文化史研究』星野書店。
- 富田靖男・島地岩根 1979「納所遺跡より出土した動物遺体について」『納所遺跡—その自然環境と自然遺物—』三重県埋蔵文化財調査報告，35—2：3～14。
- 直良信夫 1937「日本史前時代に於ける豚の問題」『人類学雑誌』52—8：20～30。
- 1938 a「三宅島コハマ浜弥生式遺跡発掘の豚の臼歯」『人類学雑誌』53—2：28～30。
- 1938 b「史前日本人の食糧文化」『人類学・先史学講座』1・2・3：1～133，雄山閣。
- 1938 c「北方文化圏の獣骨」『民族学研究』4—4：1～24。
- 1941「杵岐カラカミ山貝塚の自然遺物」『古代文化』12—2：43～48。
- 1956『日本古代農業発達史』さ・え・ら書房。
- 中島直幸・田嶋龍太編 1982『菜畑』唐津市文化財調査報告，5：PL-17・20・21・94～98。
- 西谷 大 1992「中国東部沿岸地域の土器構成から見た新石器文化」『考古学雑誌』77—3：89～120。
- 西本豊弘 1981「動物遺存体」『香深井』402～452，東京大学出版会。
- 1989 a「下郡桑苗遺跡出土の動物遺体」『下郡桑苗遺跡』大分県文化財調査報告書，80：48～61。
- 1989 b「弥生時代のブタ」『季刊考古学』28：91～92。
- 1991「弥生時代のブタについて」『国立歴史民俗博物館研究報告』36：175～194。
- 1992 a「下郡桑苗遺跡出土の動物遺体」『下郡桑苗遺跡Ⅱ』大分県文化財調査報告書，89：92～99，写真図版1～11。
- 1992 b「朝日遺跡の弥生時代のブタ」『朝日遺跡』自然遺物編，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書，31：213～229，図版11—I～VII。
- 橋口達也 1980『石丸遺跡』宗像町文化財調査報告書，4。
- 林 謙作・西本豊弘 1986「縄文晩期～弥生前期の狩猟と儀礼」『環太平洋北部地域における狩猟獣の捕

- 獲・配分・儀礼』昭和60年度科学研究補助金(一般A)研究成果報告書:26~42。
- 春成秀爾 1984「弥生時代九州の居住規定」『国立歴史民俗博物館研究報告』3:1~40。
—— 1985「鈎と靈一有鈎短剣の研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』7:1~62。
—— 1987「抜歯」『弥生文化の研究』8, 祭と墓と装い:79~90, 雄山閣。
—— 1990『弥生時代の始まり』UP考古学選書11, 東京大学出版会。
- 広瀬和雄・石神 怡編 1986『亀井(その2)』近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書, 大阪府教育委員会・大阪文化財センター。
- 藤岡謙二郎 1943「自然遺物類」(末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎)『大和唐古弥生式遺跡の研究』京都帝国大学文学部考古学研究報告, 16:221~231, 図版104, 桑名文星堂。
- 藤田和尊編 1992『奈良県御所市鴨都波12次概報』御所市文化財調査報告書, 12。
- 藤田三郎編 1983『昭和57年度唐古・鍵遺跡第13・14・15次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要, 1。
—— 1984『昭和58年度唐古・鍵遺跡第16・18・19次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要, 2。
—— 1986a『昭和59年度唐古・鍵遺跡発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要, 3。
—— 1986b『昭和60年度唐古・鍵遺跡第22・24・25次発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要, 4。
—— 1989『昭和62・63年度唐古・鍵遺跡発掘調査概報』田原本町埋蔵文化財調査概要, 11。
—— 1990「唐古・鍵遺跡第37次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』1, 1988・1989年度:7~8。
- 松井 章 1986「亀井遺跡(切り広げ部)出土の動物遺存体の分析」『亀井(その2)』本文編:423~484, 大阪府教育委員会・大阪文化財センター。
- 三島 格 1973「鈎の呪力」『古代文化』25-5:157~175, Pl. 6~8。
—— 1976「シャコガイについて」『えとのす』5:97~98。
—— 1977『貝をめぐる考古学』学生社。
- 宮崎泰史 1983「祭祀遺物」『亀井—近畿自動車道天理~吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』224~236, 図版95~98, 大阪文化財センター。
- 山口誠治 1983「動物遺存体について」『亀井』247~250, 大阪文化財センター。
- 山下欣一 1982「南島の動物供犠について—文化人類学的視点から—」『國學院雑誌』83-11:232~245。
- 渡辺 誠 1982「動物遺体1, 哺乳類」『菜畑』分析・考察編, 唐津市文化財調査報告, 5:399~419。
〔中国文〕
- 雲南省博物館 1981「雲南賓川白羊村遺址」『考古学報』1981-3:349~368
- 王 仁湘 1981「新石器時代葬儀の宗教意義」『文物』1981-2:79~85。
- 王 樹明 1987「陵陽河墓地雜議」『史前研究』1987-3:49~58。
- 何 徳亮 1986「論山東地区新石器時代の養猪業」『農業考古』1986-1:372~378。
- 河南省文物研究所・長江流域規画弁公室考古隊河南分隊 1989『浙川下王崗』文物出版社。
- 甘肅省博物館 1960「甘肅武威皇娘娘台遺址発掘報告」『考古学報』1960-2:53~71, 図版1~6。
—— 1978「武威皇娘娘台遺址第四次発掘」『考古学報』1978-4:421~448, 図版1~12。
- 黄 宣佩・張 明華 1980「青浦崑崙遺址第二次発掘」『考古学報』1980-1:29~58, 図版1~6。
- 江蘇省文物工作隊 1962「江蘇邳縣劉林新石器時代遺址第一次発掘」『考古学報』1962-1:81~102, 図版1~6。
- 湖北省黄冈地区博物館 1987「湖北黄冈螺蛳山遺址墓葬」『考古学報』1987-3:339~358, 図版3~10。
- 山東省考古所・山東省博物館・莒県文管所・王 樹明 1987「山東莒県陵陽河大汶口文化墓葬発掘簡報」『史前研究』1987-3:62~82。
- 山東省博物館 1963「山東滕県崗上村新石器時代墓葬試掘報告」『考古』1963-7:351~361。
—— 1980「談談大汶口文化」『文物集刊』1:19~27。
—— 山東省文物考古研究所 1985『鄒県野店』文物出版社。
- 山東大学歴史系考古専業教研室編 1990『泗水尹家城』文物出版社。
- 山東文物管理所・済南市博物館編 1974『大汶口』文物出版社。
- 志 遠 1958「海南島黎族人民的葬俗」『考古通訊』1958-7:57~58。

- 上海市文物保管委員會 1962「上海市青浦縣崑崙遺址的試掘」『考古學報』1962—2：1～29，圖版1～18。
 —— 1987『崑崙』文物出版社。
- 周 本雄 1984「中国新石器時代の家畜」(中国社会科学院考古研究所編)『新中国の考古發現和研究』文物出版社(佐川正敏訳 1988『新中国の考古学』186～189，平凡社)。
- 昌灘地区芸術館・考古研究所山東隊 1977「山東膠縣三里河遺址發掘簡報」『考古』1977—4：262～267，圖版1～3。
- 昌灘地区文物管理組・諸城縣博物館 1980「山東諸城呈子遺址發掘報告」『考古學報』1980—3：329～385，圖版1～10。
- 常州市博物館 1974「江蘇常州圩墩村新石器時代遺址的調查和試掘」『考古』1974—2：109～115。
- 西安半坡博物館・陝西省考古研究所・臨縣博物館 1988『姜寨』文物出版社。
- 陝西省考古研究所 1990『龍崗寺』文物出版社。
- 宋 兆麟 1964「雲南永寧納西族的葬俗—兼談對仰韶文化葬俗的看法」『考古』1964—4：200～204。
- 宋 兆麟・黎 家芳・杜 耀西 1983『中国原始社会史』文物出版社。
- 孫 作雲 1977「洛陽西漢卜千秋墓壁畫考釈」『文物』1977—6：17～22，圖版1～3。
- 中国科学院考古研究所山東隊 1964「山東曲阜西夏侯遺址第一次發掘報告」『考古學報』1964—2：57～106，圖版1～12。
- 中国科学院考古研究所甘肅工作隊 1974「甘肅永靖大何庄遺址發掘報告」『考古學報』1974—2：29～62，圖版1～18。
 —— 1975「甘肅永靖秦魏家齊家文化墓地」『考古學報』1975—2：57～96，圖版1～12。
- 中国科学院考古研究所山東隊 1964「山東曲阜西夏侯遺址第一次發掘報告」『考古學報』1964—2：57～106，圖版1～12。
- 中国科学院考古研究所遼寧工作隊 1975「敖漢旗大甸子遺址1974年試掘簡報」『考古』1975—2：99～101。
- 中国社会科学院考古研究所山西工作隊 1980「山西襄汾陶寺遺址發掘簡報」『考古』1980—1：18～13。
- 中国社会科学院考古研究所編 1988『膠縣三里河』文物出版社。
 —— 1983『宝鷄北首嶺』中国田野考古報告集考古學專刊丁種26，文物出版社。
 —— 1991『青龍泉与大寺』中国田野考古報告集考古學專刊丁種40，科学出版社。
- 長蘇文物考古隊直屬工作隊 1961「一九五八至一九六一年湖北鄖縣和均縣發掘簡報」『考古』1961—10：519～530，圖版1～4。
- 陳 少豐・宮 大中 1977「洛陽西漢卜千秋墓壁畫藝術」『文物』1977—6：13～16，圖版1～3。
- 東北考古發掘團 1964「吉林西团山石棺墓發掘報告」『考古學報』1964—1：29～49，圖版1～10。
- 內蒙古文物考古研究所 1989「涼城崞峯窯子墓地」『考古學報』1989—1：57～81，圖版9～16。
- 南京博物院 1958「南京市北陰陽營第一，二次的發掘」『考古學報』1958—1：7～23，圖版1～16。
 —— 1964「江蘇邳縣四戶鎮大墩子遺址探掘報告」『考古學報』1964—2：9～56，圖版1～16。
 —— 1965「江蘇邳縣劉林新石器時代遺址第二次發掘」『考古學報』1965—2：9～47，圖版1～14。
 —— 1978「長江下游新石器時代文化若干問題的探析」『文物』1978—4：46～57。
 —— 1980「江蘇吳縣草鞋山遺址」『文化資料叢刊』3：1～24，圖版1～3。
 —— 1981「江蘇邳縣大墩子遺址第二次發掘」『考古學集刊』1：27～81。
 —— 1990「1987年江蘇新沂花厅遺址的發掘」『文物』1990—2，1～26。
- 南京博物院新沂工作組 1957「新沂花厅村新石器時代遺址概況」『文物參考資料』1956—7：21～26。
- 任 式楠 1989「長江黃河中下游新石器文化的交流」『慶祝蘇秉琦考古五十五年論文集』65～81，文物出版社。
- 福建省博物館・崇安縣文化館 1980「福建崇安武夷山白岩崖洞墓清理簡報」『文物』1980—6：12～20，圖版3。
- 文物編集委員會 1979『文物考古工作三十年』文物出版社。
- 北京大学・河北省文化局邯鄲考古發掘隊 1959「1957年邯鄲發掘簡報」『考古』1959—10：531～536。
- 北京大学歷史系考古教研室 1983『元君廟仰韶墓地』中国田野考古報告集考古學專刊丁種24，文物出版社。
- 李 仰松 1961「佉族的葬俗對研究我國遠古人類葬俗的一些啓發」『考古』1961—7：371～374。
- 〔朝鮮文〕
 キム・シンギョ(金 信奎) 1974「わが国の原始遺跡にみられる哺乳動物相(Ⅱ)」『朝鮮學術通報』11—2：41～53，圖版17～26。

- 黄 基徳 1975「茂山虎谷遺跡発掘報告」『考古民俗論文集』6, 社会科学出版社。
申 敬澈 1984「慶南三千浦市勒島遺跡」『第9回韓国考古学会全国大会発表要旨』。
—— 1985「三千浦市勒島遺跡」『第10回韓国考古学会全国大会発表要旨』。

[ロシア文]

- Деревяно А. П. 1973, Ранний Железные век Приамурья, Академия наук Ссср.
—— 1976, Приамурье (I тысячелетие до нашей эры), Академия наук Ссср.

追記 稿了後に知った資料を追加しておく。

豚の下顎骨の副葬例

河南省淮浜県沙塚遺跡 [信陽地区文管会・淮浜県文化館 1981「河南淮浜発現新石器時代墓葬」『考古』1981-1:1~4] 屈家嶺文化晩期に属するM1号墓は老年女性で, 脚下に豚の下顎骨10個を副葬。

山西省夏県東下馮遺跡 [中国社会科学院考古研究所・中国歴史博物館・山西省考古研究所 1988「夏県東下馮」中国田野考古報告集考古学専刊丁種35, 文物出版社] 二里頭文化Ⅳ期に属するM527号墓は成年男性1・女性2を埋葬の横穴墓で, 豚の下顎骨2個を副葬。

内蒙古自治区伊克昭盟朱開溝遺跡 [内蒙古文物考古研究所 1988「内蒙古朱開溝遺址」『考古学報』1988-3:301~322] 龍山文化晩期の墓3基のうちM2001号墓の1基は足下に豚の下顎骨1個を副葬。「夏代中期」の墓には豚の下顎骨を少ないもので1個, 多いものでは十数個, 脚下または脚下の埋土中に副葬。M3024号墓は成年男性2・女性1で, 下顎骨は豚6個, 羊6個, 野獣8個を副葬。M3024号墓は成年女性で, 脚下に豚の下顎骨2個を副葬。「夏代晩期」のM6018号墓は成年男性で脚下に豚の下顎骨を1個副葬。

猪・豚の下顎骨懸架の民族例

熊本県八代郡泉村五家荘 [石野博信 1992「民と王の狩猟儀礼」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズ, V:11~20] 旧庄屋の緒方家には, 約250年前に建てた家の中央の間の鴨居に, 猪の下顎骨を12個, 下顎連合部を利用して棒に懸架。昔は, 村で猪がとれるたびにもってきたので, 部屋中をぐるりとめぐっていたという。

ニューギニア, イリアン・ジャヤ, ウギンバ村モニ族 [本多勝一 1973『ニューギニア高地人』本多勝一著作集3, すざさわ書店] 家の板扉に豚の下顎骨30個以上を, 太い蔓に下顎連合部を利用して懸架。

(国立歴史民俗博物館考古研究部)

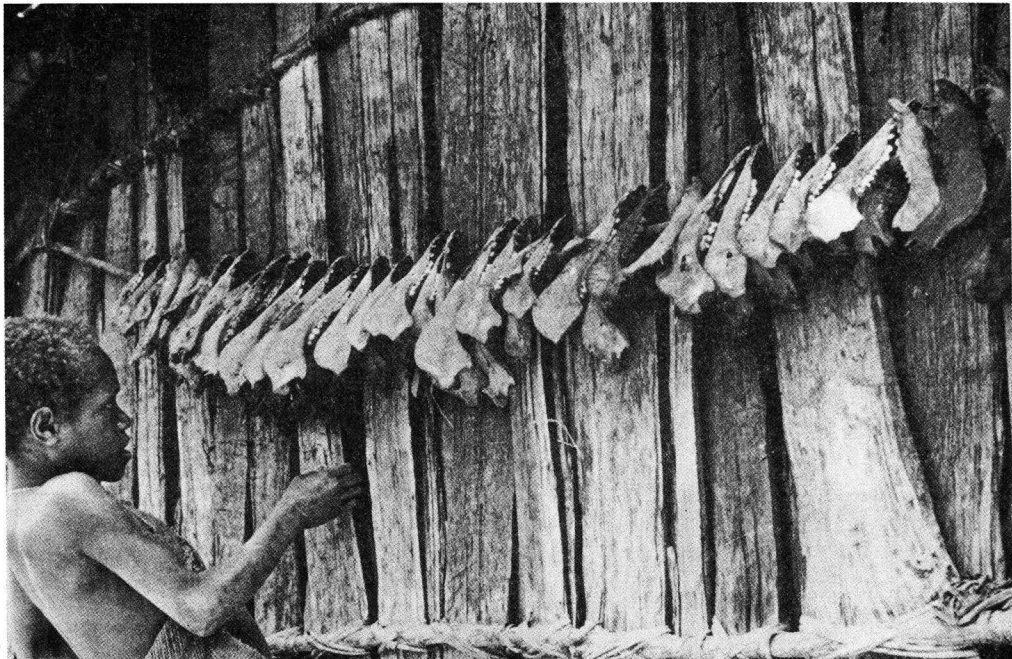


写真 ニューギニア・モニ族の豚の下顎骨懸架 [本多 1973]

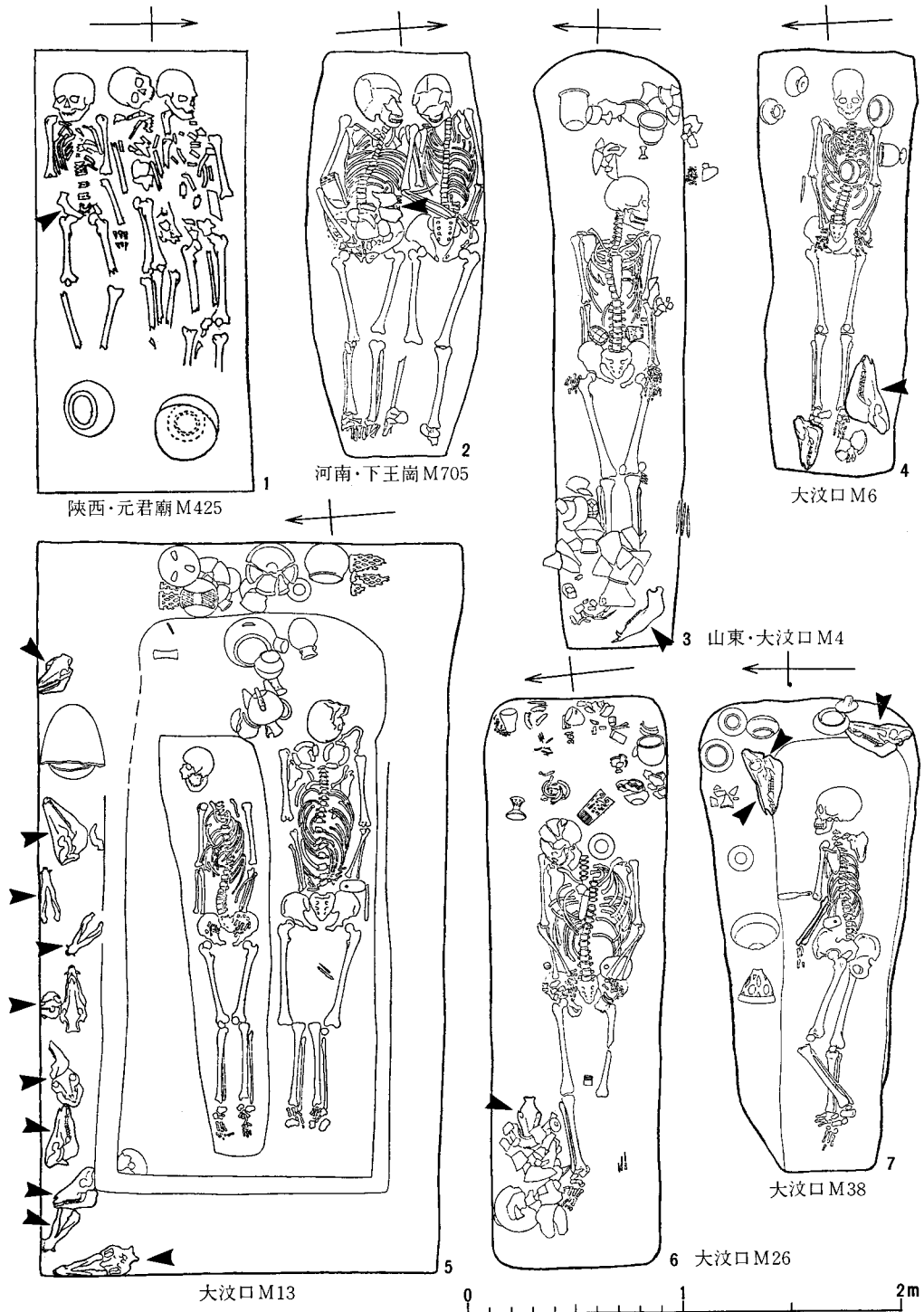


図11 陝西省元君廟・下王崗，山東省大汶口遺跡の豚骨副葬墓
 [北京大学歴史系考古教研室 1983]・[河南省文物研究所ほか
 1989]・[山東省文物管理処ほか編 1974]

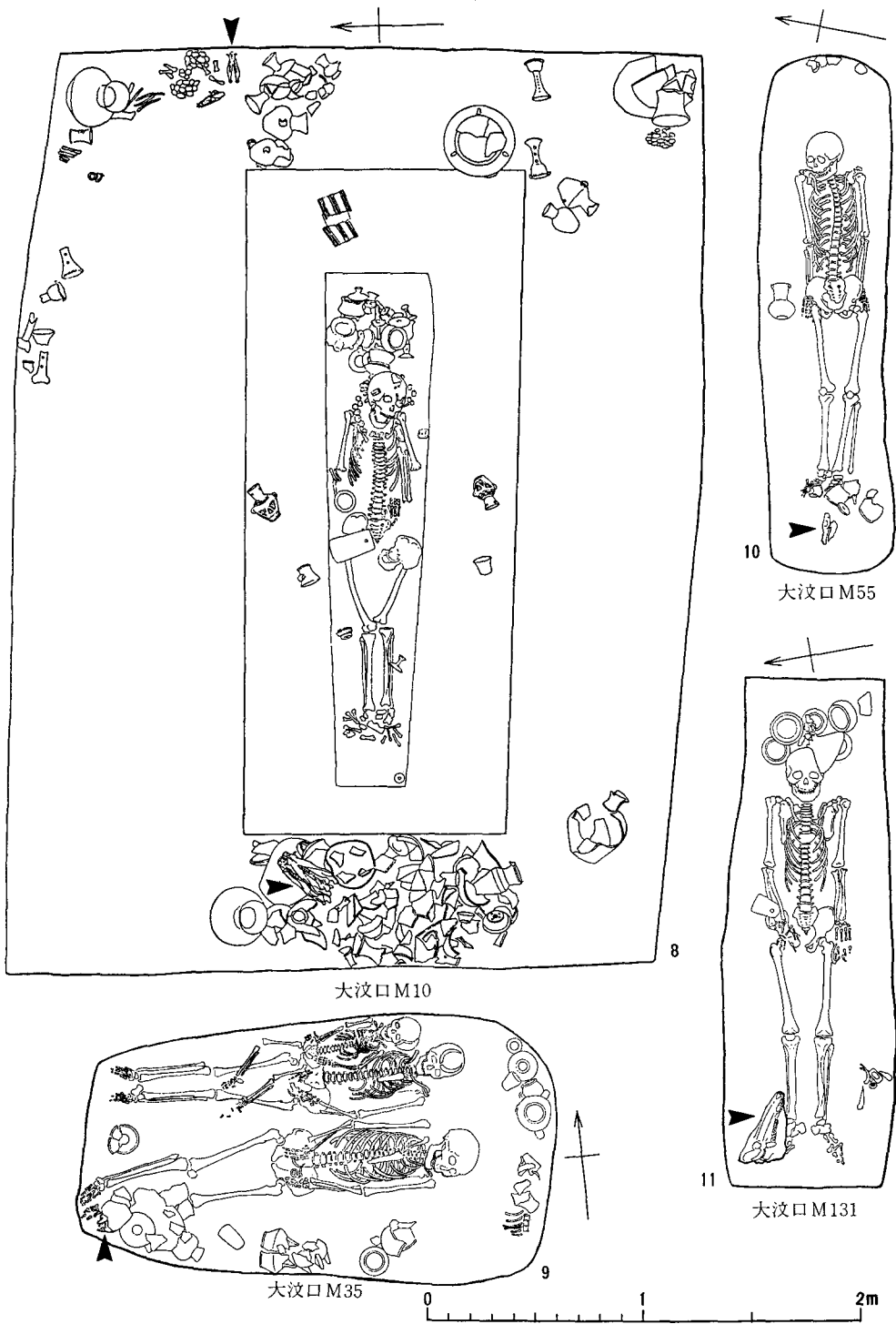


図12 山東省大汶口遺跡の豚骨副葬墓〔山東省文物管理処ほか編 1974〕

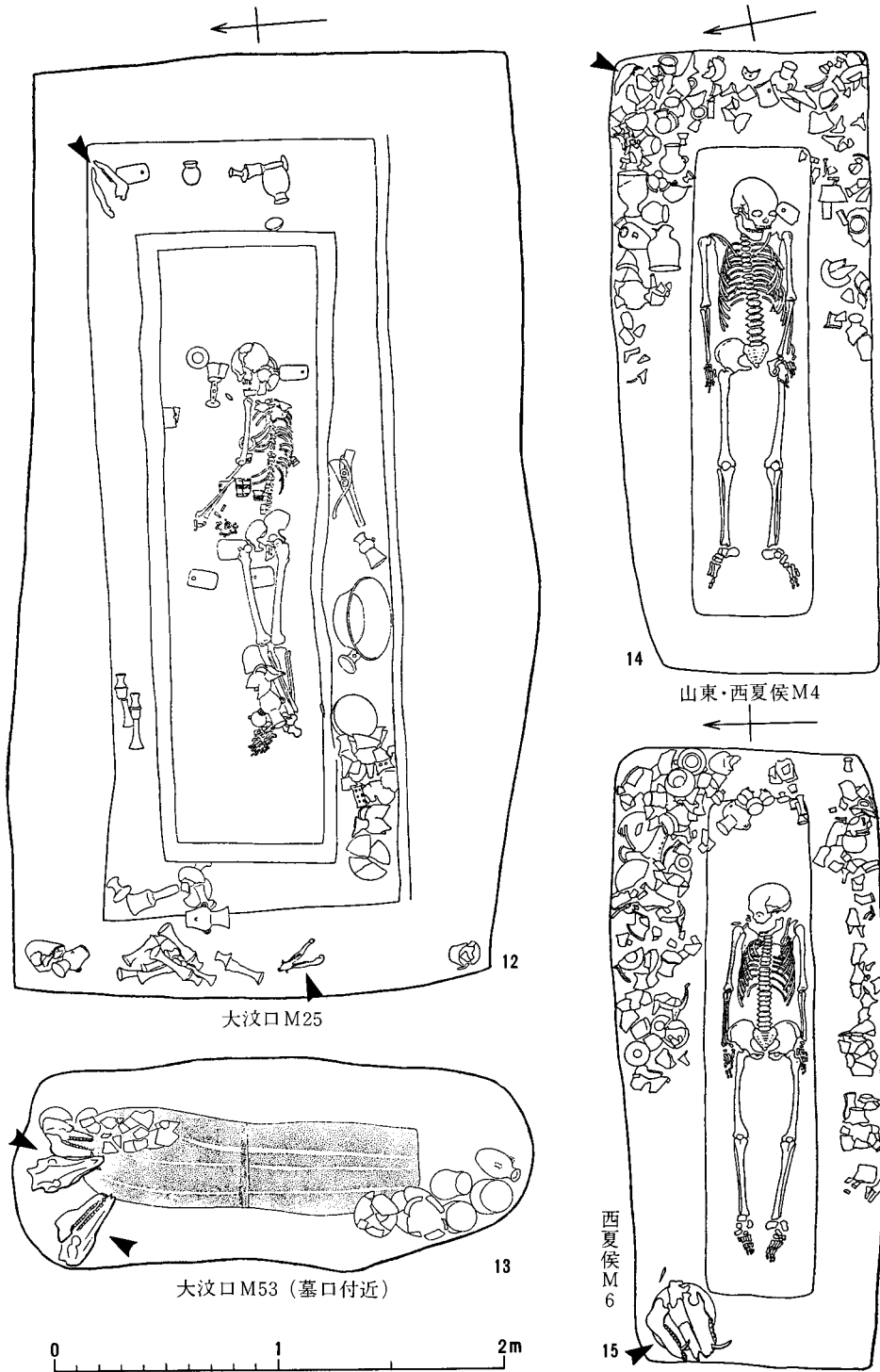


図13 山東省大汶口・西夏侯遺跡の豚骨副葬墓〔山東省文物管理处ほか編 1974〕・〔中国科学院考古研究所山東隊 1964〕

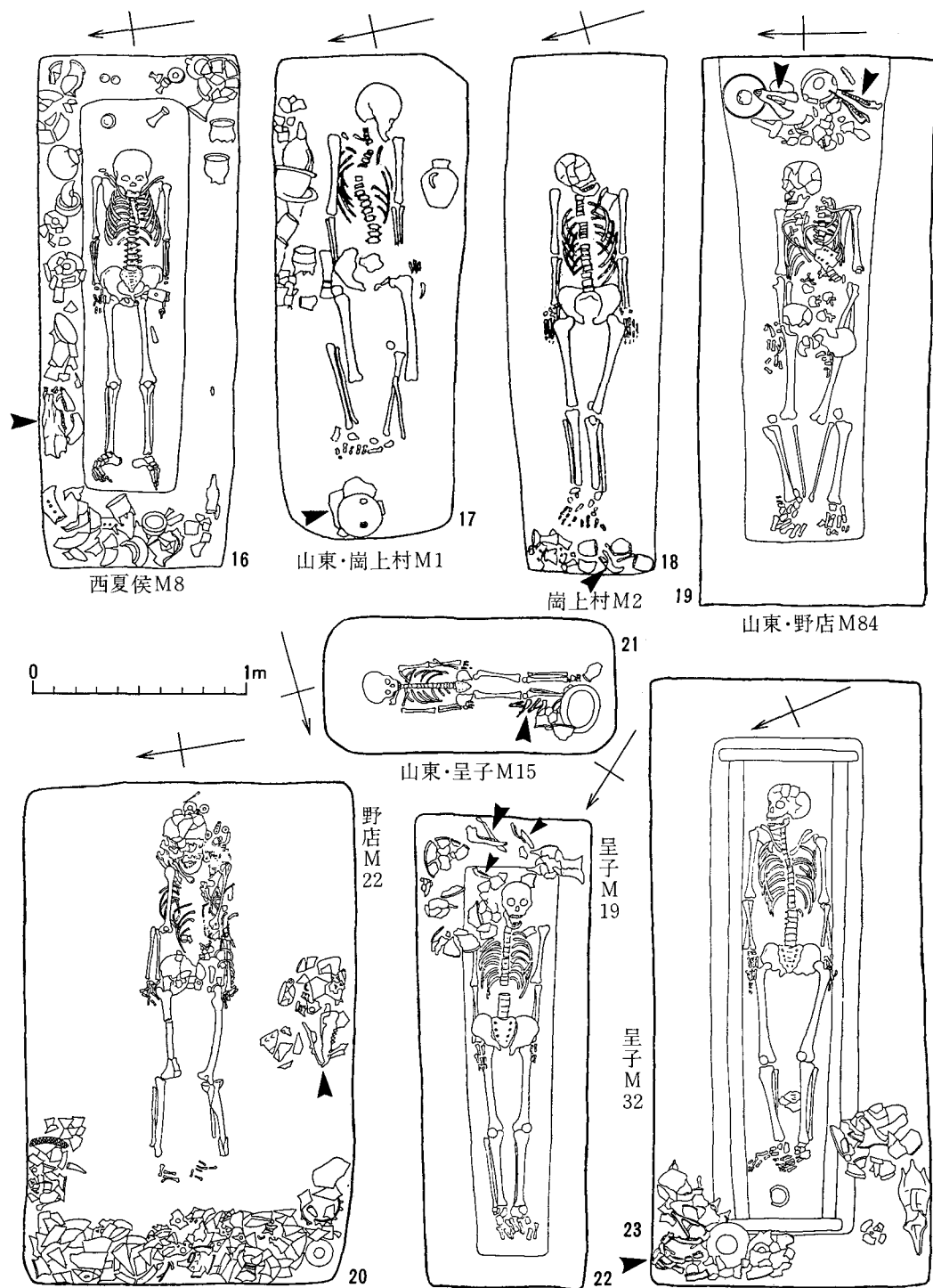


図14 山東省西夏侯・崗上村・野店・呈子遺跡の豚骨副葬墓 [中国科学院考古研究所 山東隊 1964]・[山東省博物館 1963]・[山東省博物館ほか 1985]・[昌濰地区文物管理組ほか 1980]

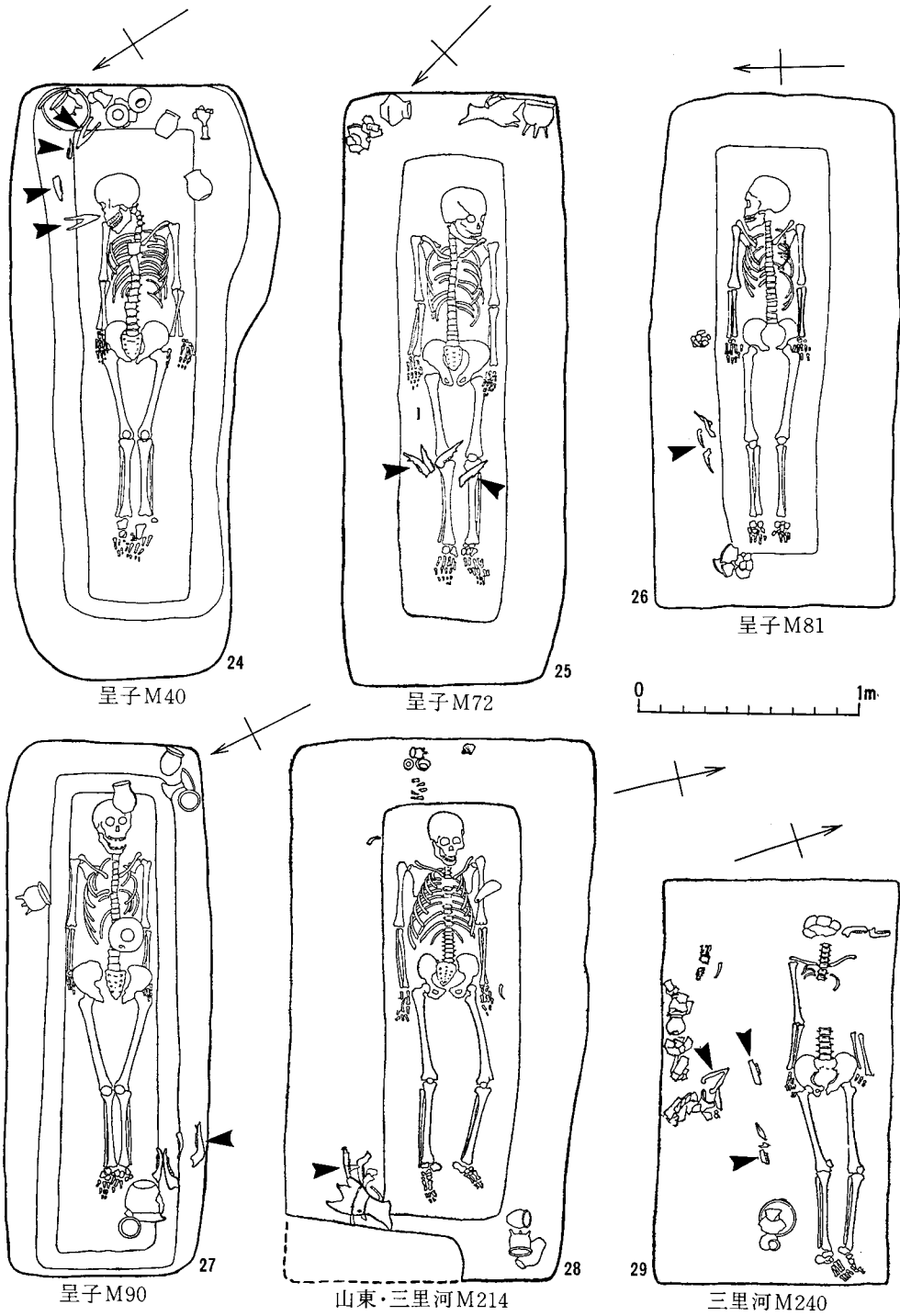


図15 山東省呈子・三里河遺跡の豚骨副葬墓 [昌濰地区文物管理組ほか 1980]・[中国社会科学院考古研究所編 1988]

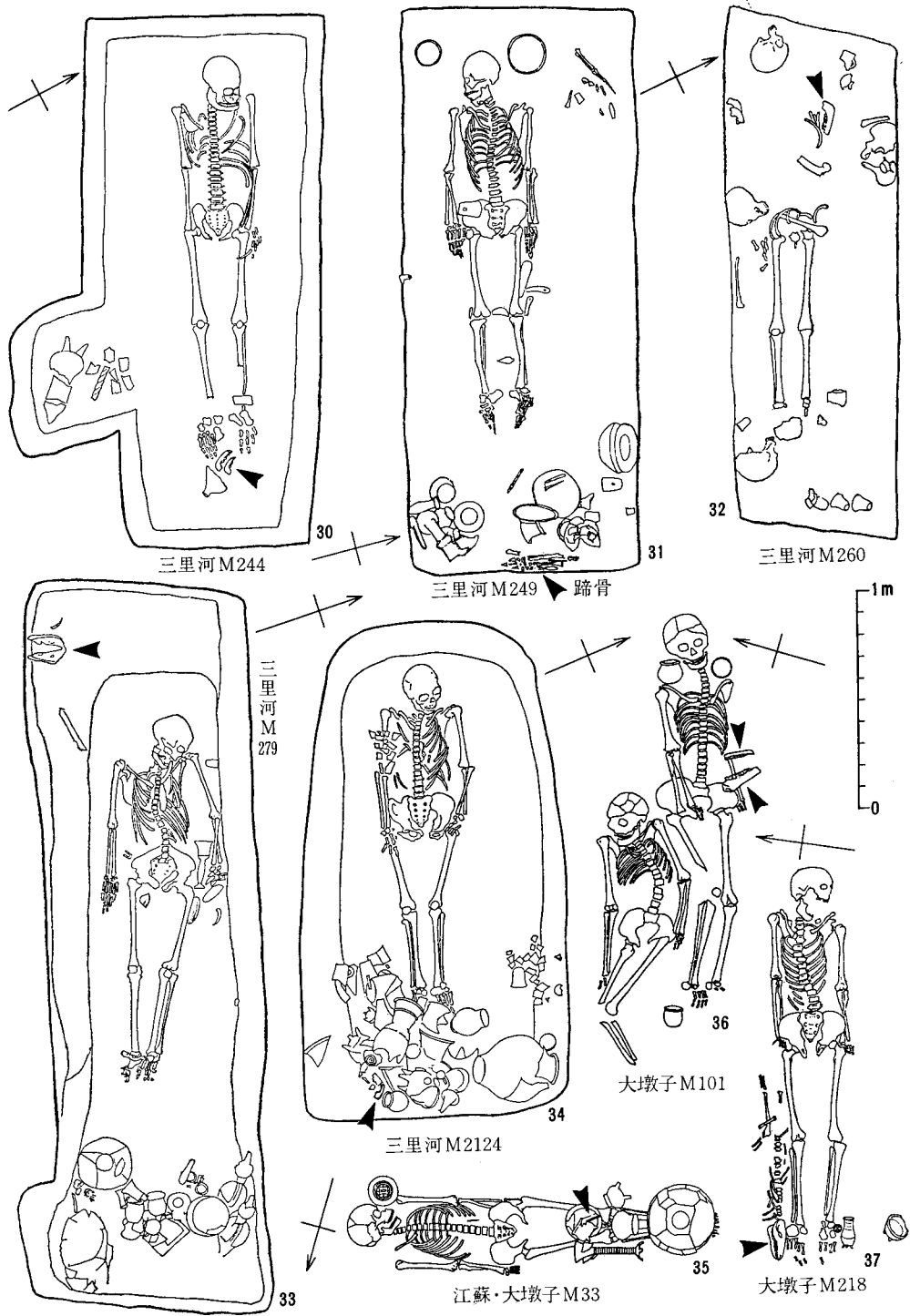


図16 山東省三里河・江蘇省大墩子遺跡の豚骨副葬墓
 [中国社会科学院考古研究所編 1988]・[南京博物院 1981]

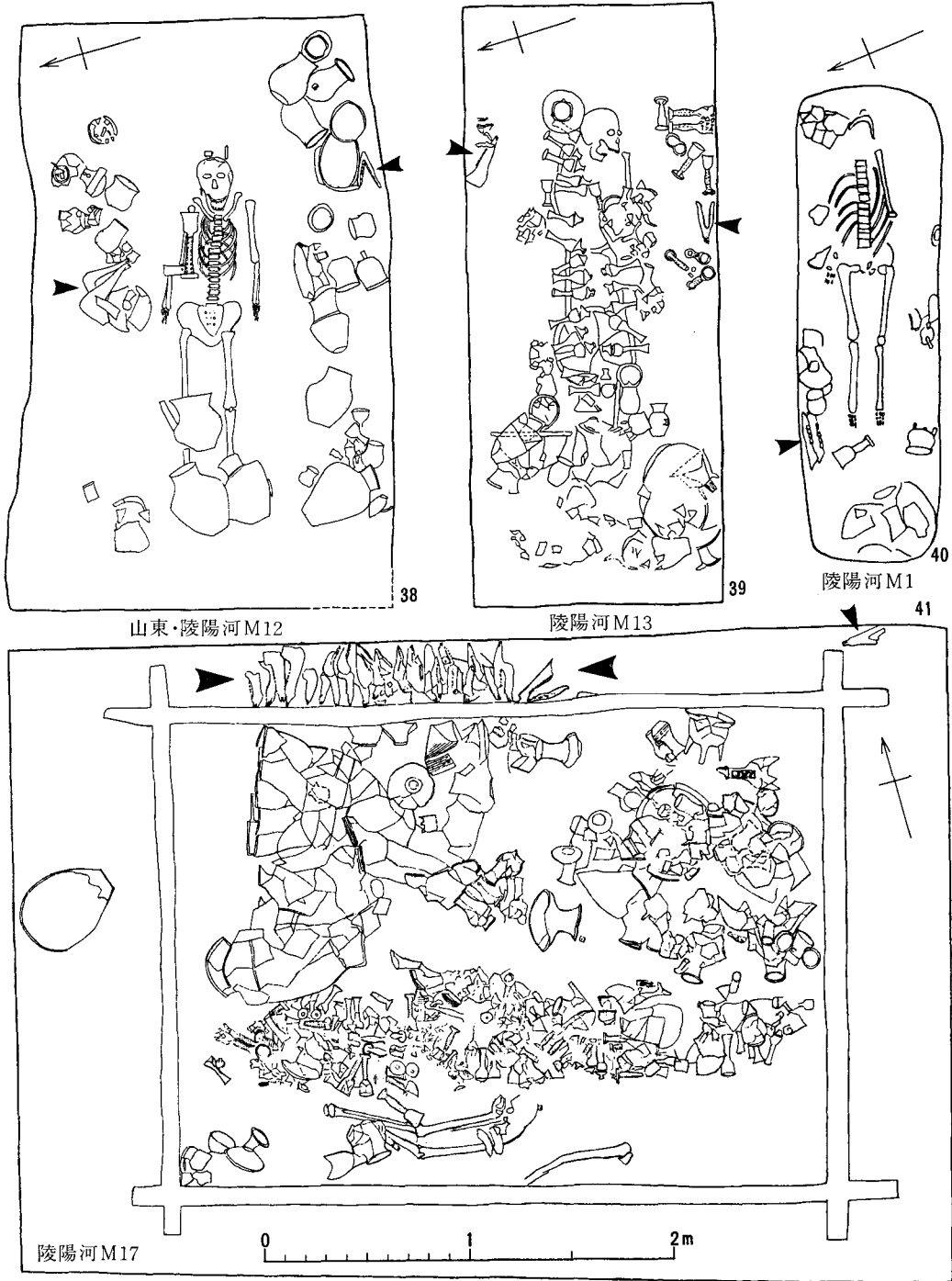


図17 山東省陵陽河遺跡の豚骨副葬墓 [山東省考古所ほか、1987]

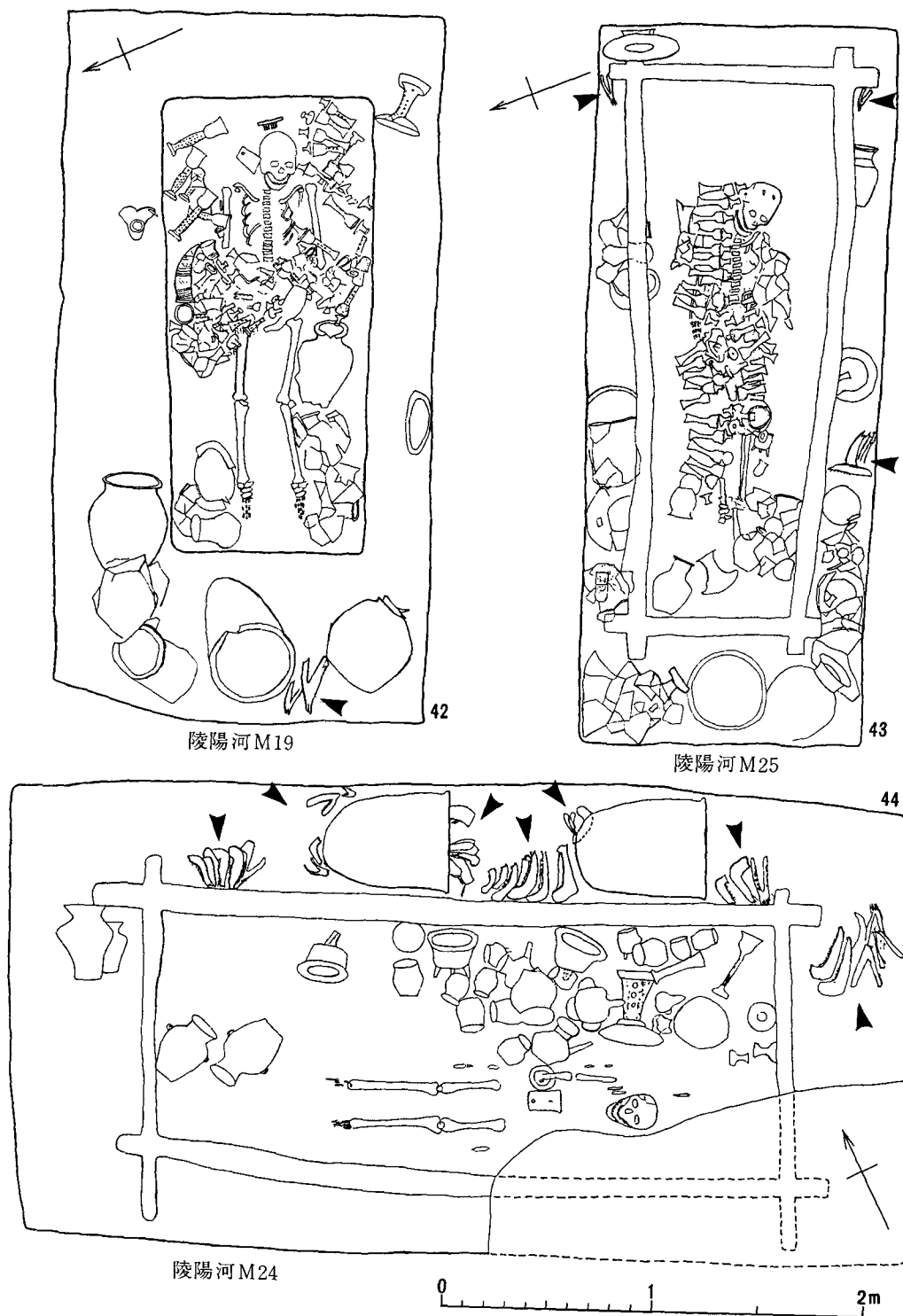
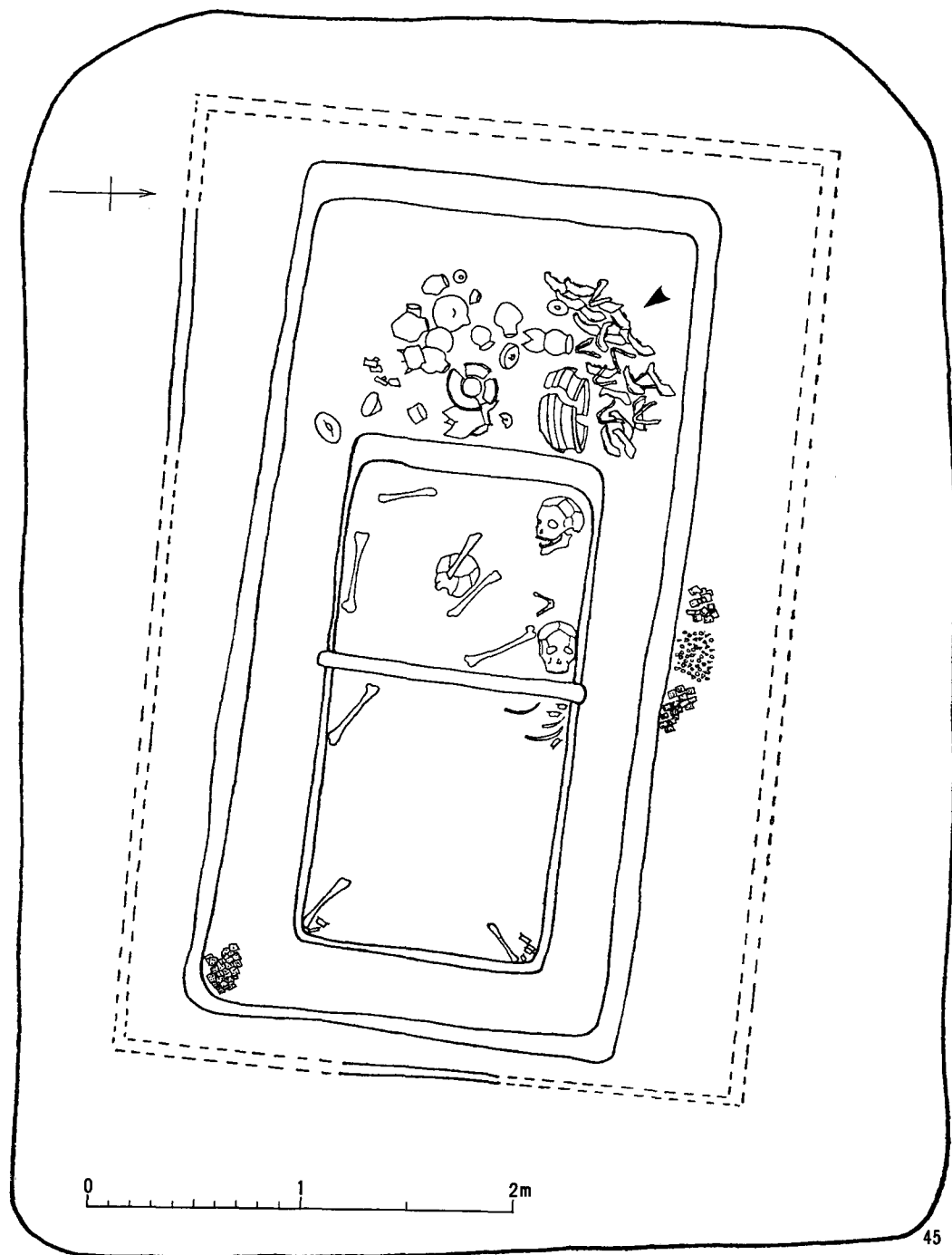
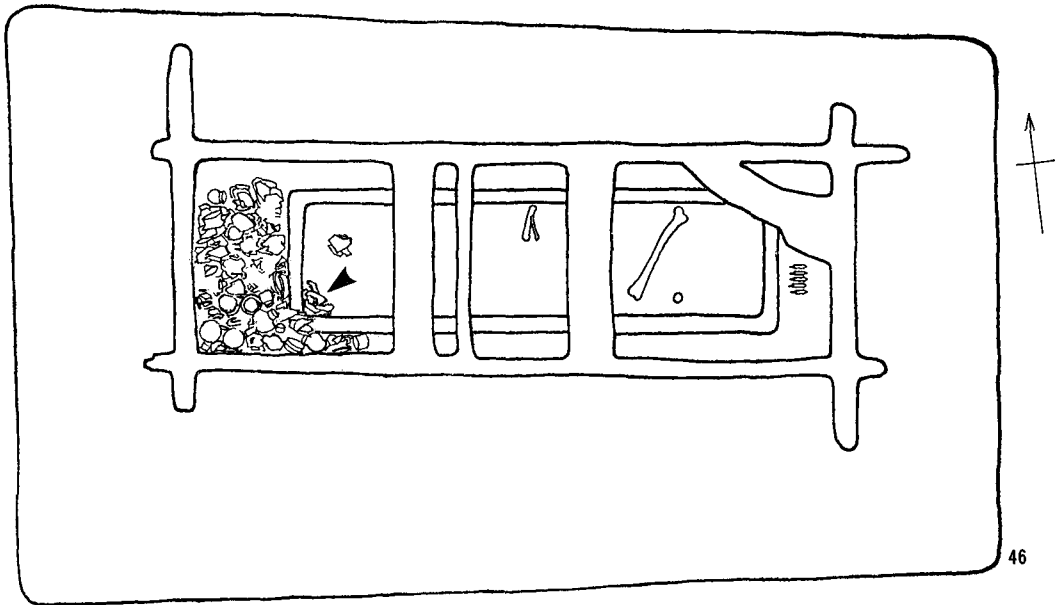


図18 山東省陵陽河遺跡の豚骨副葬墓 [同前]



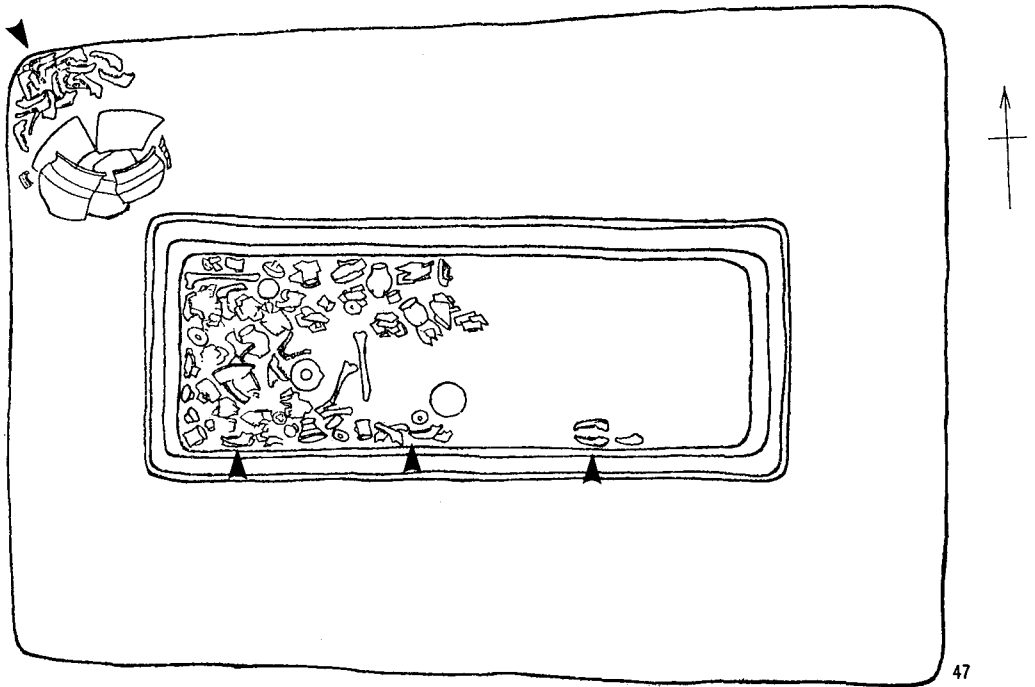
山東・尹家城M15

図19 山東省尹家城遺跡の豚骨副葬墓 [山東大学歴史系考古專業教研室編 1990]



尹家城M126

0 1 2m



尹家城M134

図20 山東省尹家城遺跡の豚骨副葬墓〔同前〕

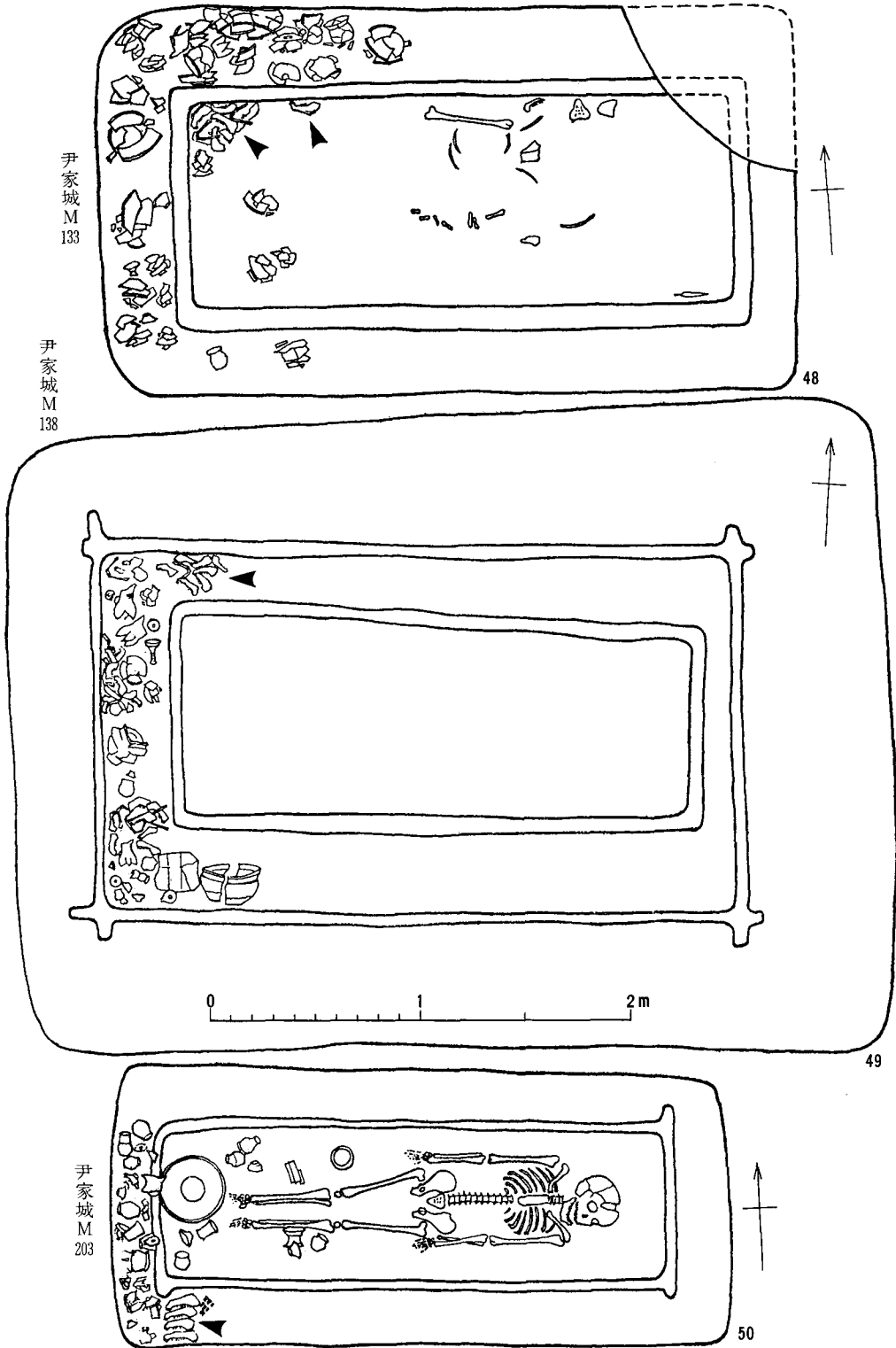


図21 山東省尹家城遺跡の豚骨副葬墓〔同前〕

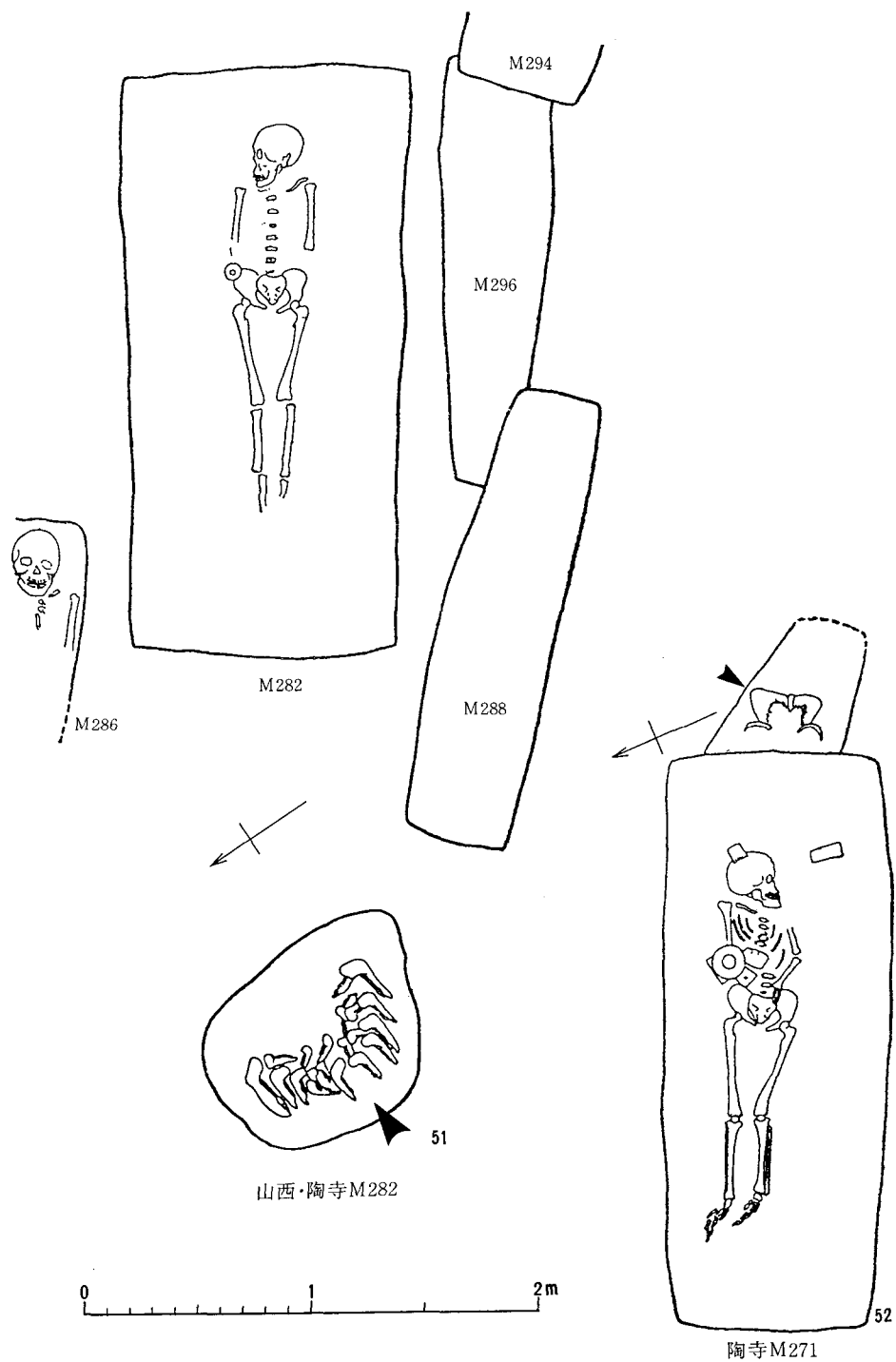


図22 山西省陶寺遺跡の豚骨副葬墓
[中国社会科学院考古研究所山西工作队 1980]

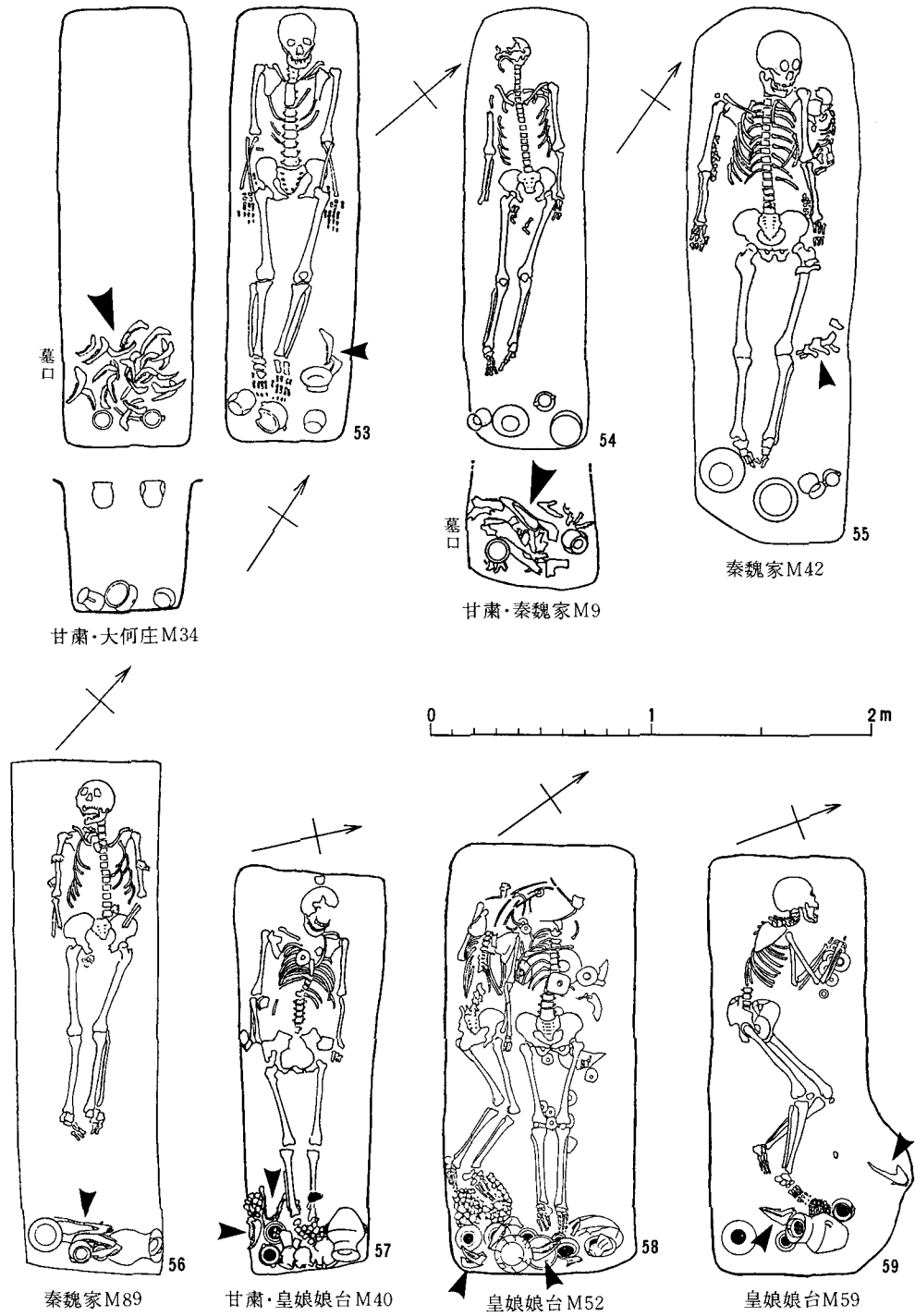


図23 甘肅省大何庄・秦魏家・皇娘娘台遺跡の豚骨副葬墓
 [中国科学院考古研究所甘肅工作隊 1974, 1975]・[甘肅省博物館 1978]

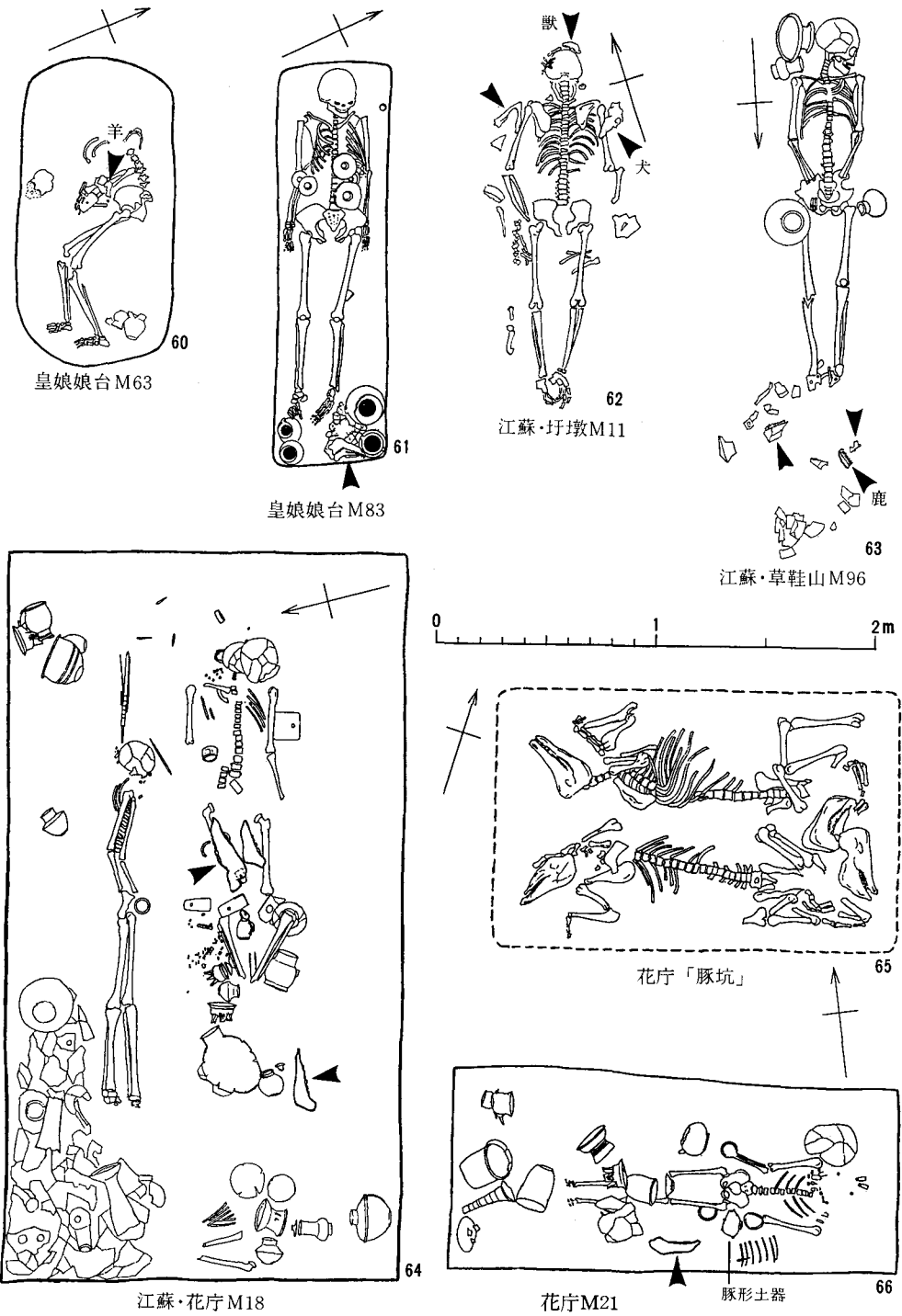
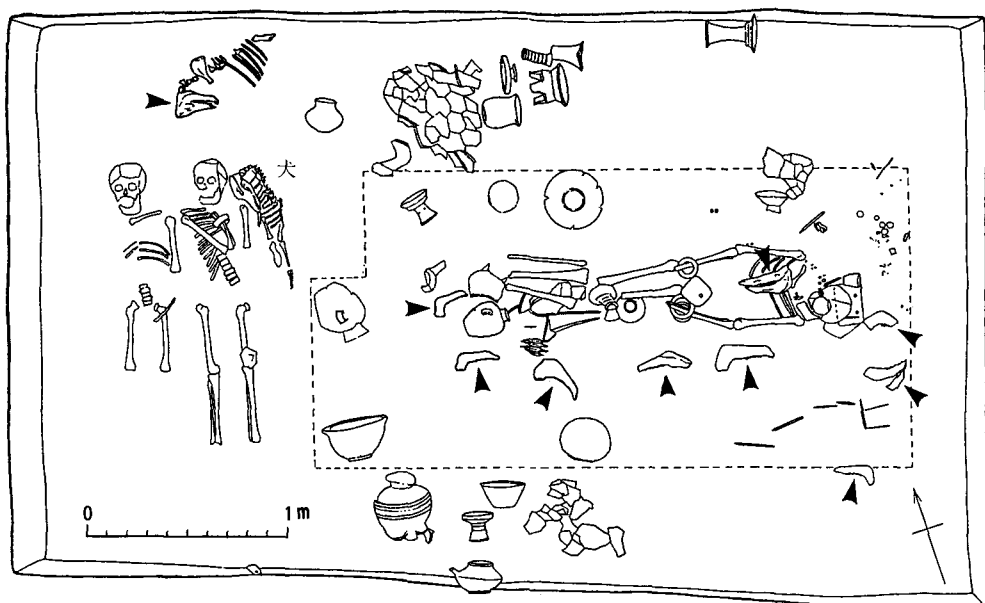
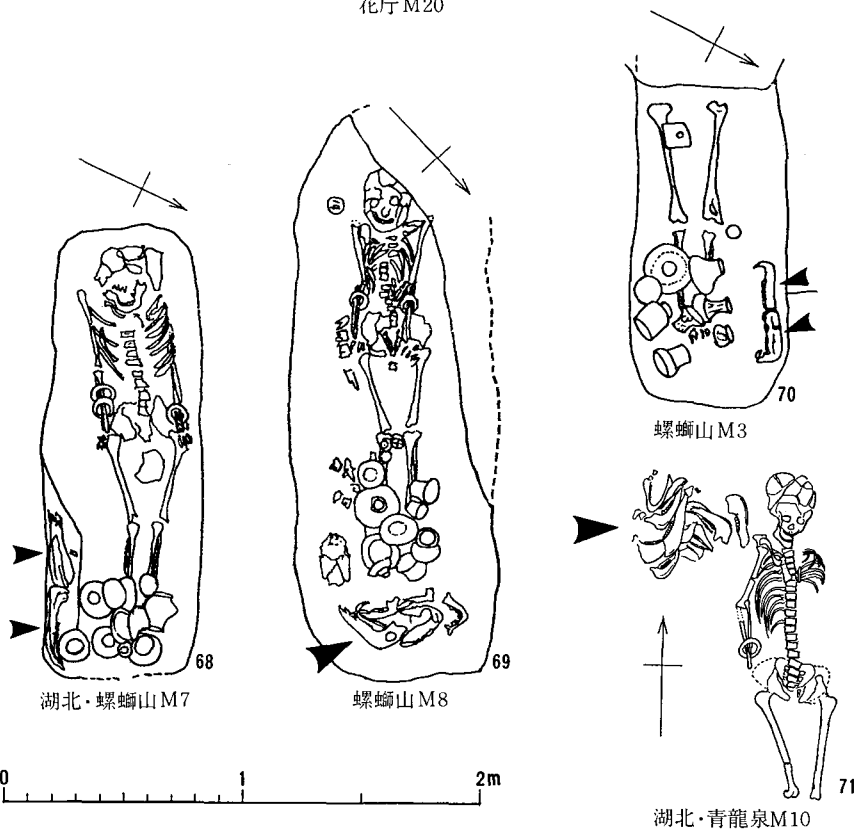


図24 甘肅省皇娘娘台，江蘇省圩墩・草鞋山，江蘇省花疋遺跡の豚骨副葬墓
 [甘肅省博物館 1978]・[常州市博物館 1974]・[南京博物院 1980・1990]



花庁 M20

67



湖北・螺蛳山 M7

螺蛳山 M8

螺蛳山 M3

湖北・青龍泉 M10

図25 江蘇省花庁、湖北省螺蛳山・青龍泉遺跡の豚骨副葬墓
 [南京博物院 1990]・[湖北黄冈地区博物館 1987]・[中国社会科学院考古研究所編 1994]

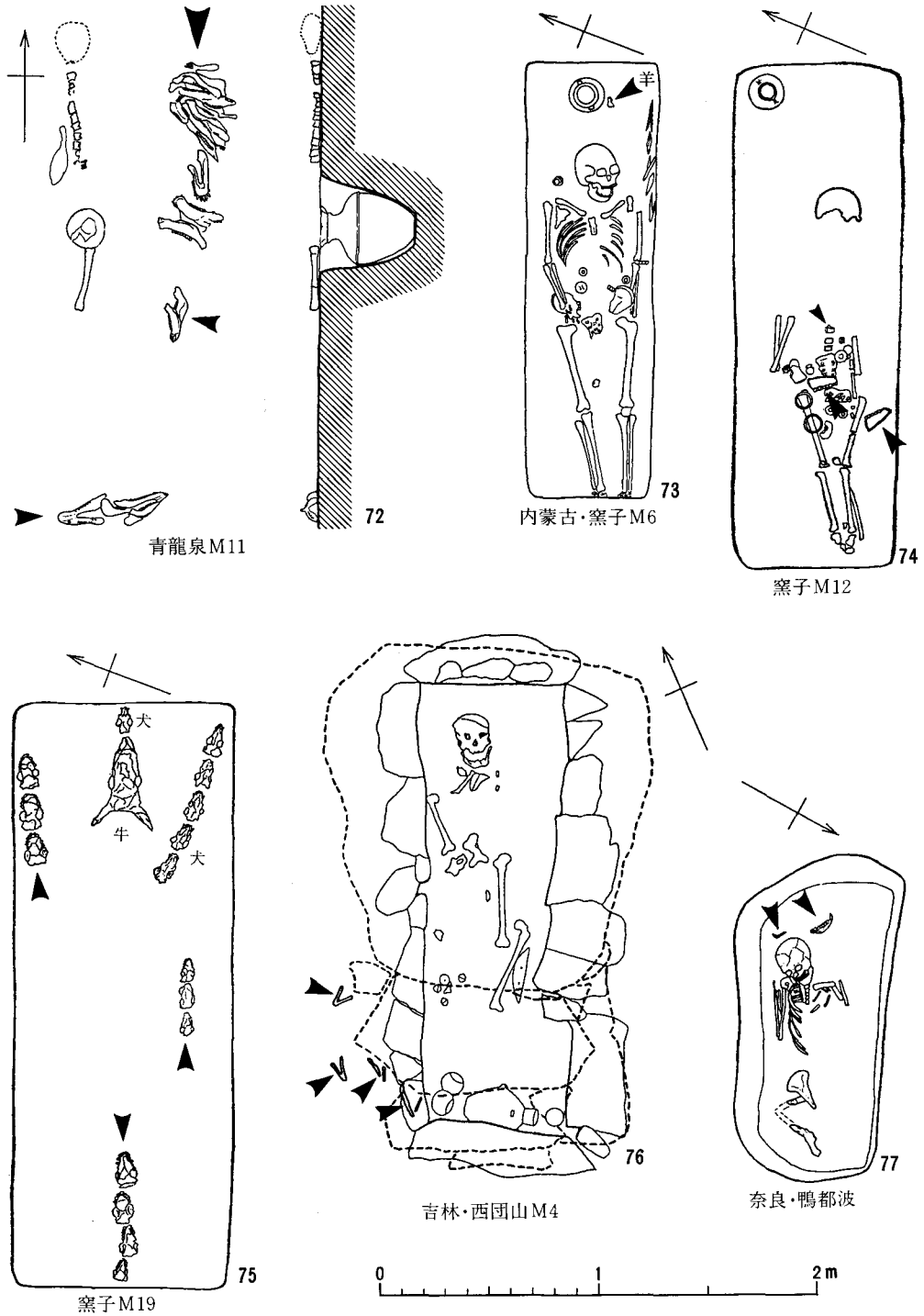


図26 湖北省青龍泉，内蒙古窯子，吉林省西团山，奈良県鴨都波遺跡の豚骨副葬墓
 [中国社会科学院考古研究所編 1991]・[内蒙古文物考古研究所 1989]・[東北考古発掘
 団 1964]・[藤田編 1992]

The Custom of Exorcism in the Yayoi Period

HARUNARI Hideji

Recently, the lower jawbones of pigs, pierced through by a bar or cord, or hung on a bar at the copula, were excavated from sites of the Yayoi period in western Japan, such as Nabatake in Saga Prefecture, and Karako-Kagi in Nara Prefecture. The prevailing opinion is that this custom was an agricultural formality introduced from the Chinese Continent.

Few examples of the pierced lower jawbones of pigs have been found on the Chinese Continent. However, the custom of burying lower jawbones or skulls of pigs in graves, or hanging them up somewhere, developed from the Neolithic Age in China. This custom has been handed down today among ethnic minorities in the southwestern part of China.

When someone dies, the Li Tribe of Hainantao sends off the spirit of the dead by killing a cow or a pig. They then put the lower jawbone of the killed pig on the coffin and bury it in the grave, or hang it on a pole above the grave. The Naxi Tribe of Yunnan Province hang the lower jawbone of pig on a wall indoors, to symbolize the peace of the family; when someone dies, they throw it away outside the village.

According to ancient Chinese literature, the pig is a symbol of fear; and the skull or lower jawbone of a pig will avert evil, and protect the spirit of the dead.

In the Neolithic Age in China, the custom of burying a cursing tool with the canine of a river deer or pig attached existed at the same time as, or before, the custom of burying the lower jawbone of a pig in graves. The reason for the use of the lower jawbone of a pig to send off or to protect the spirit of the dead can be found in the fact that the pig has a sharp, curved canine, like a hook. The effectiveness of a hook in warding off evil can be found in a certain tribe, in which the shell of *Har pago chragra* is hung at the entrance of the house as a charm. Also, the existence of a bronze cogwheel plaque with central boss fastened on to a shield is thought to date back to the Yayoi period. The lower jawbone of a pig might have been used to ward off the dead or evil spirits, because of the hooked canine and the fierce character of the pig. It is sometimes replaced by the lower jawbone of a sheep or deer, this being because the lower jawbone itself resembles a V-shaped hook.

In the examples from the Yayoi period, the lower jawbone of a pig was hung inside or at the entrance to the house, or at the entrance to a settlement. When someone died, or met with misfortune, they apparently thought that the dead spirit or an evil spirit was caught on the hooked part, and so threw it outside of the residential area, or, alternatively, buried it in the grave to protect the dead.

The custom of using the lower jawbone of a pig as a tool to avert misfortune is not known in the Korean Peninsula. However, it is obvious that this custom has its origin in the Chinese Neolithic Age, and was introduced to western Japan along with paddy-rice farming and agricultural ceremonies, by the people who crossed over to Japan in the early Yayoi period.



写真1 奈良県唐古・鍵遺跡SD-06溝の豚下顎骨の出土状況（奈良県立橿原考古学研究所提供）



写真2 同上SD-06溝の豚下顎骨の出土状況（田原本町教育委員会提供）



写真3 佐賀県菜畑遺跡の豚下顎骨の出土状況(唐津市教育委員会提供)



写真4 江蘇省劉林遺跡の溝の豚下顎骨出土状況
〔『考古学報』1965-2〕

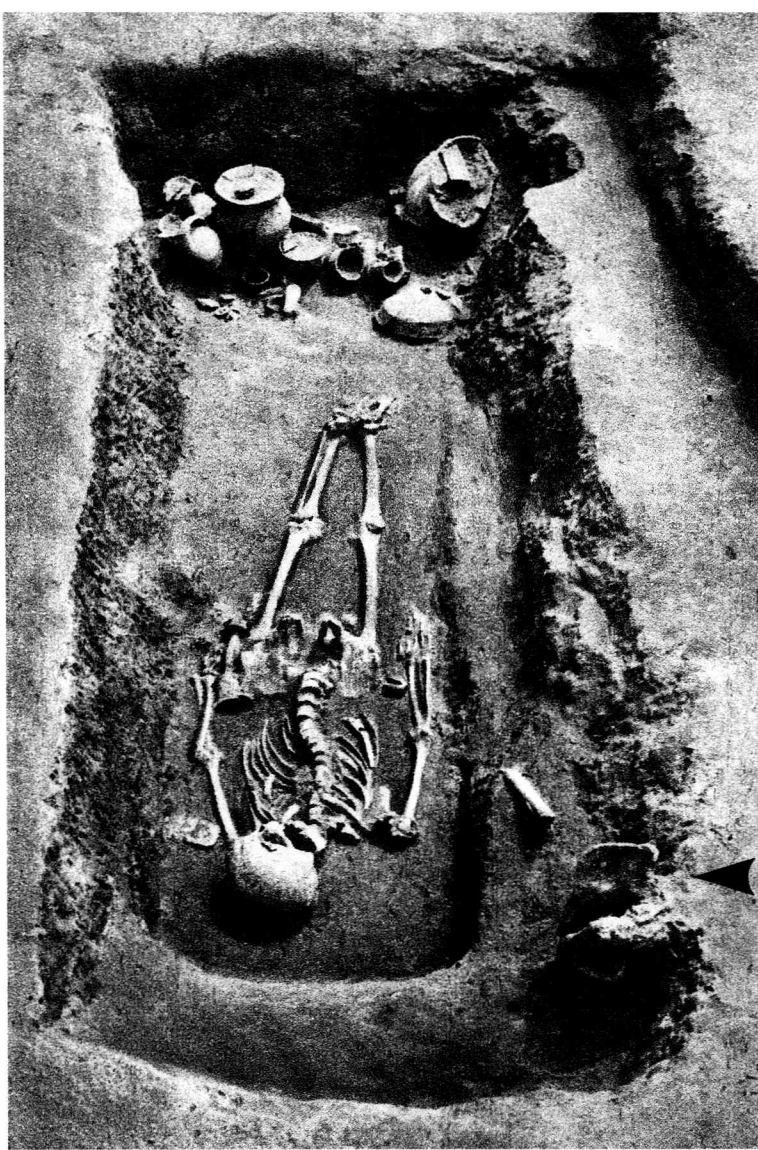


写真5 山東省三里河遺跡279号墓の穿孔した豚下顎骨の出土状況
〔『膠県三里河』〕

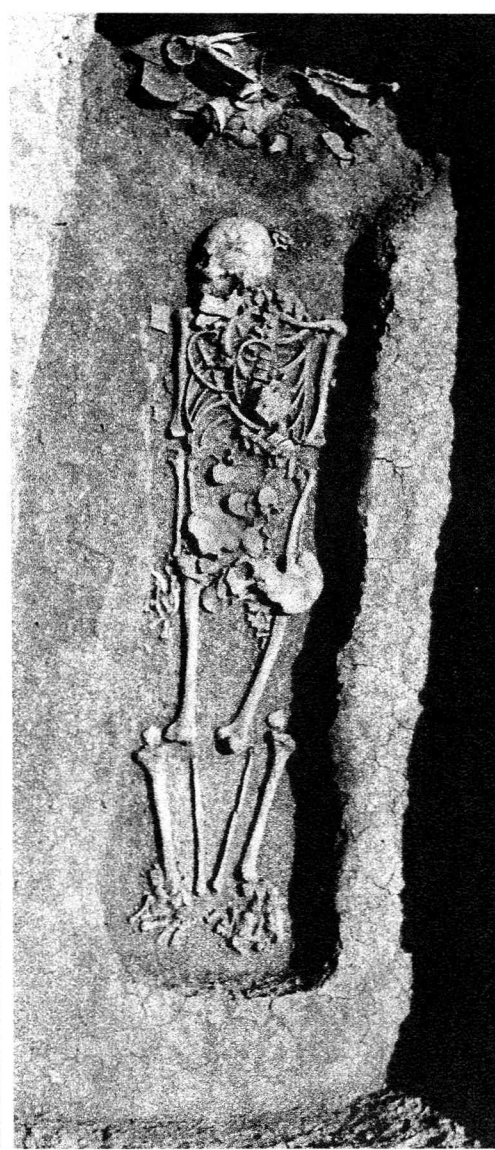


写真6 山東省野店遺跡M84号墓の豚下顎骨
出土状況〔『鄒縣野店』〕

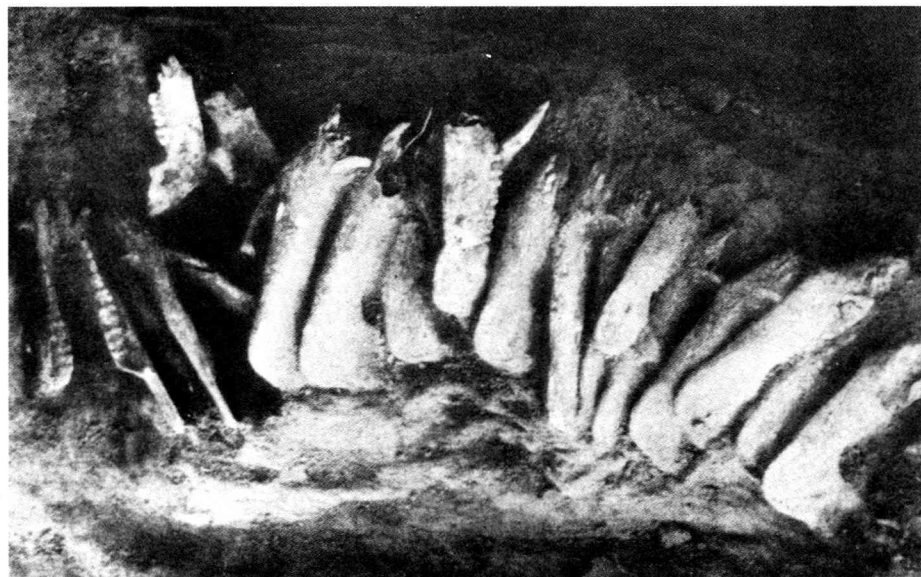


写真7 甘肅省秦魏家遺跡M134号
墓の豚下顎骨15個の出土
状況〔『考古学報』1975-2〕

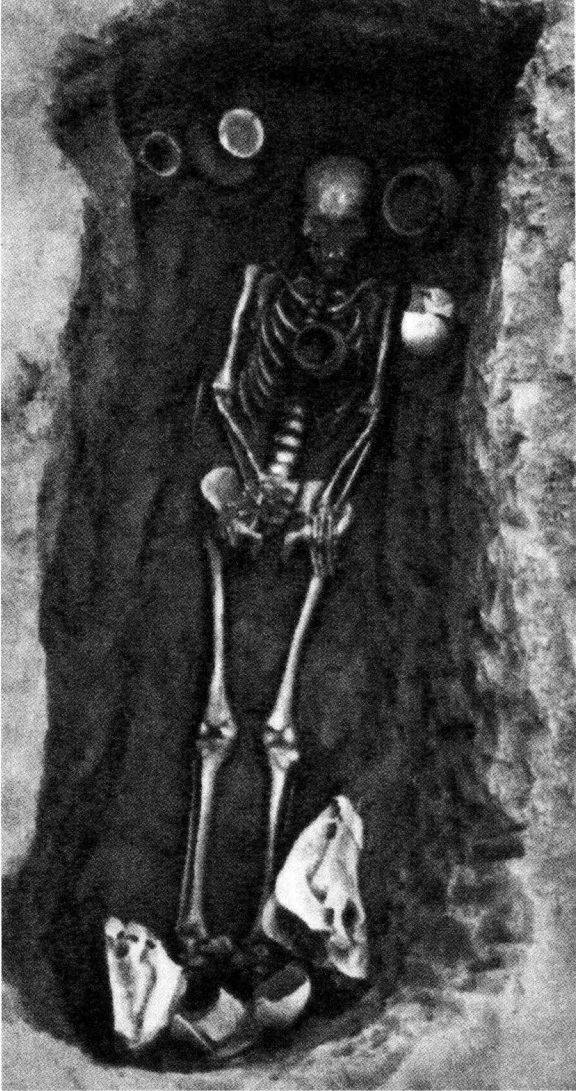


写真8 山東省大汶口遺跡M6号墓の豚頭骨出土状況
【『大汶口』】

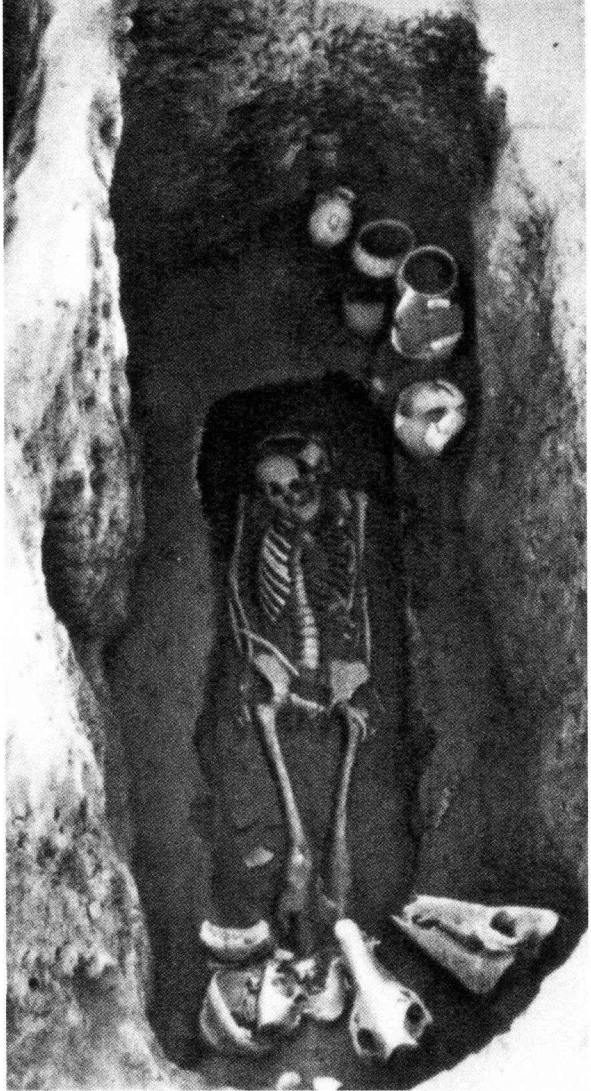


写真9 同前M53号墓の豚頭骨出土状況〔同前〕

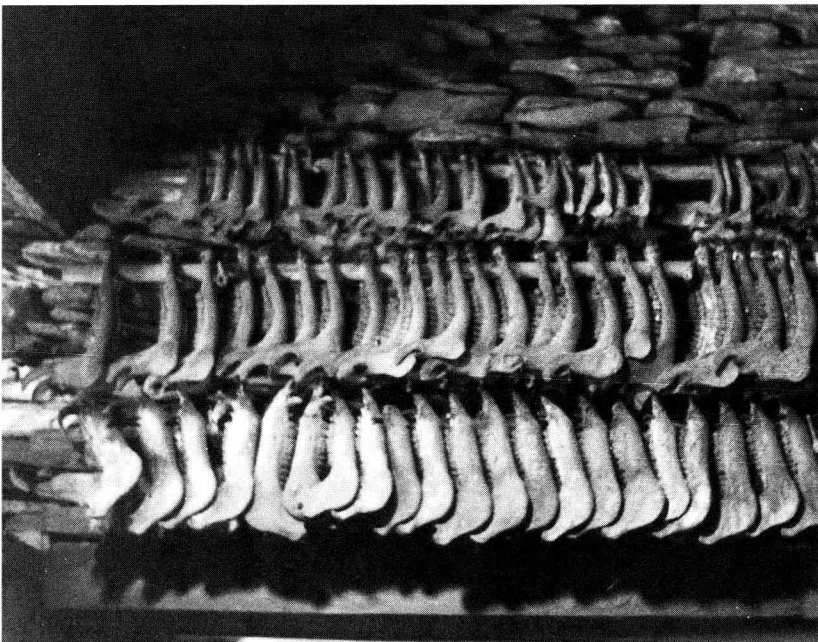


写真10 台湾ルカイ族の住居の壁に
掛けた猪下顎骨(佐々木高明
氏提供)



写真11 奈良県唐古遺跡出土の穿孔した猪下顎骨



写真12 同前



写真13 愛知県朝日遺跡出土の穿孔した豚下顎骨（西本豊弘氏提供）



写真14 大阪府亀井遺跡出土の穿孔した豚下顎骨

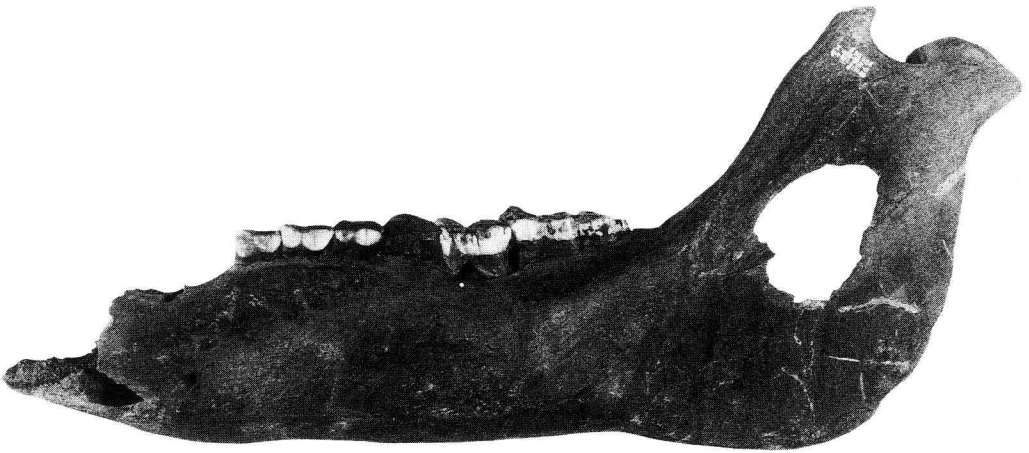


写真15 島根県西川津遺跡出土の穿孔した豚下顎骨(島根県教育委員会提供)



写真16 同前(同前)



写真17 大分県下郡桑苗遺跡出土の豚頭骨（西本豊弘氏提供）



写真18 沖縄県渡喜仁浜原遺跡出土の穿孔した猪下顎骨（『渡喜仁浜原貝塚』）



写真19 山東省大汶口遺跡出土の豚頭骨

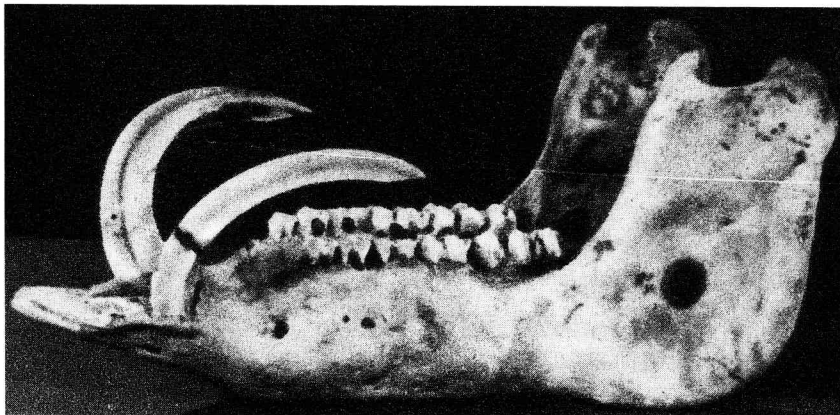
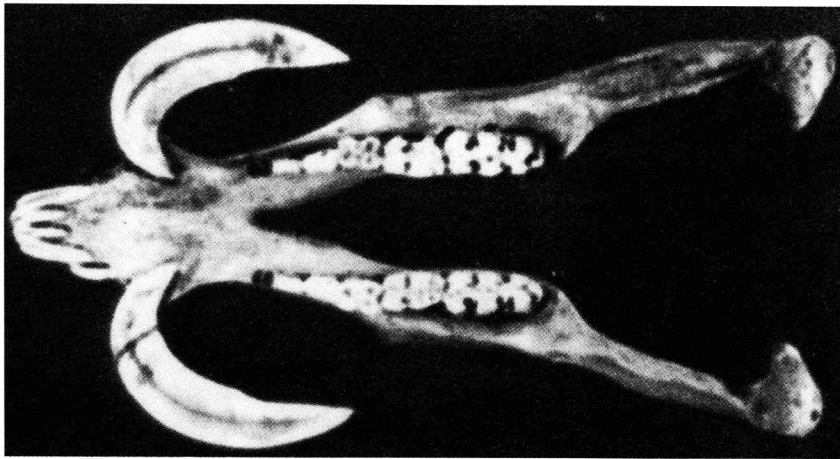


写真20 山東省三里河遺跡出土の穿孔した猪下顎骨（『膠東三里河』）